

平成 27 年度 学位請求論文

中期密教に至る灌頂儀礼の発展過程

大正大学大学院 仏教学研究科仏教学専攻 研究生

学籍番号 1507504

駒井 信勝

目次

序論	1
本論	
第一章 『陀羅尼集經』の灌頂儀礼について	6
第一節 はじめに	6
第二節 第四卷と第十二卷の灌頂儀礼	6
第三節 『陀羅尼集經』の普集会曼荼羅	20
第四節 『陀羅尼集經』の灌頂儀礼の特徴	35
第五節 まとめ	40
第二章 『蘇悉地經』の灌頂儀礼について	44
第一節 はじめに	44
第二節 『蘇悉地經』における真言の分類	45
第三節 『蘇悉地經』の灌頂の次第	51
第四節 『蘇悉地經』の曼荼羅	53
第五節 『蘇悉地經』の灌頂	56
第六節 『蘇悉地經』の灌頂の意義	60
第七節 まとめ	62
第三章 『蕤呬耶經』の灌頂儀礼について	65
第一節 はじめに	65
第二節 『蕤呬耶經』の七日作壇法	65
第三節 『蕤呬耶經』の曼荼羅	73
第四節 『蕤呬耶經』の灌頂の特徴	75
第五節 まとめ	80
第四章 『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼について	82
第一節 はじめに	82
第二節 灌頂儀礼の目的	82
第三節 『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅	87
第四節 曼荼羅の意義	94
第五節 『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼	103
第六節 まとめ	117
結論	122
参考文献	

序論

いつの時代に、どのようにして、密教に灌頂儀礼が取り入れられたかは明らかではない¹。しかし『牟梨曼荼羅呪経』には、曼荼羅を画き灌頂を行い入壇する儀礼が説かれている²。このことから、五世紀後半にはその基本形態が成立していたとみてよいであろう³。その後、様々な要素や思想を増広していき、『大日経』や『金剛頂経』のような体系的な儀礼へと整備され、密教儀礼の中でも最も重要なものとなるのである。

『大日経』と『金剛頂経』が両部大経として最重要視され、多くの研究業績があるのに対して、初期密教経典は、未発達な密教であるとか、事相作法が中心で仏教教理が乏しいなどとみなされ⁴、あまり注目されてこなかった。しかし、近年では大塚伸夫博士の研究などにより、再評価が進んでいる。

確かに、初期密教経典には中期密教経典に比べて整理されていない部分もあるが、『陀羅尼集経』や『蘇悉地経』『蕤呬耶経』などのように、整備された曼荼羅や灌頂儀礼が説かれている経典もある。そこで、本論文の課題は、初期密教から『大日経』に至るまでの灌頂儀礼の変遷を辿り、新たに付加されてきた要素や思想がいかなるものであるのかを検証し、初期密教から中期密教への発展・展開の過程を、灌頂儀礼という視点から考えようとするものである。

以上のことから、本論文の研究範囲は、一連の灌頂儀礼の中でも、瓶水灌頂が重要なテーマとなる。後期密教では、灌頂儀礼に四段階を立て、その第一段階を瓶水灌頂と称し、初期から中期密教における灌頂儀礼は、この瓶水灌頂の段階に含まれる。その代表的な灌頂儀礼は、七日作壇法である。そこで、『大日経』以前の成立と考えられおり、なおかつ七日作壇法が説かれる以下の四つの経典に対して考察を行う。

- (1) 『陀羅尼集経』
- (2) 『蘇悉地経』
- (3) 『蕤呬耶経』
- (4) 『金剛手灌頂タントラ』

(1) 『陀羅尼集経』

『陀羅尼集経』は七日作壇法が説かれる最初期の漢訳経典である。また、管見の及ぶ限りでは、日毎に詳細な七日作壇法を説く経典は本経以外にはみられない。このような意味において、先ず初めに『陀羅尼集経』の灌頂儀礼の全体像を明らかにする必要があると考える。

『陀羅尼集経』に関する研究は、曼荼羅に関するものと、経典の構成に関するものの二つに集約出来る。しかしながら、『陀羅尼集経』の灌頂儀礼に対する研究は見当たらない⁵。

曼荼羅に関しては、梶尾(1958)と大山(1961)と田中(2010)がある。梶尾(1958)では、七日作壇法が最初に説かれる本経に注目し、第四巻の七日作壇法から土壇曼荼羅の作法について言及している。大山(1961)は、密教修法壇としての曼荼羅という視点から、本経第十二巻の普集会曼荼羅について、諸尊の配置ではなく、骨格の面から『大日経』の胎藏曼荼

羅に繋がる要素を指摘している。田中(2010)は、『陀羅尼集經』が初期密教に見られる曼荼羅の三部の基本的な概念を示しているとして、第十二卷の十二肘壇と十六肘壇の二つの曼荼羅の構造に言及している。

經典の構成に関しては、まず佐和(1975)が挙げられる。『陀羅尼集經』は多くの尊格の尊像や画像が説かれている。中でも、四天王の像容に関する記述が見られるのは『陀羅尼集經』のみであり、密教美術的にも重要として、本經の全体像を概観している。その中で、『陀羅尼集經』は当時の仏教で信仰されていた諸尊をかかげ、全体を統一するという考えによるものであると指摘している。その研究に続くのは頼富(1988)である。頼富(1988)では、『陀羅尼集經』に(1)仏・(2)觀世音(菩薩を含む)・(3)金剛・(4)諸天という尊格分類が見られることを指摘し、その特色を考察している。佐々木(2003)では、『陀羅尼集經』に収録されている經典の内、第四卷と第十卷に注目し、それぞれを異訳經典と比較した結果、『陀羅尼集經』のみに灌頂儀礼などの儀軌がみられることを指摘している。

(2) 『蘇悉地經』

『蘇悉地經』の灌頂儀礼に対する研究も残念ながらほとんど見られない⁶。また、ロルフ・ギーブル(2000)は、『蘇悉地經』をめぐる研究のほとんどが中国・日本における蘇悉地部・蘇悉地法の歴史的展開に関するもので、『蘇悉地經』自体の本文研究は皆無に近いと言っても過言ではない⁷と述べている。この一文からも窺えるように、そもそも『蘇悉地經』に対する研究は少ないのである。

蔵漢両訳を用いている研究には、高田順仁氏の研究がある。高田順(1996), (1998), (2000)では、それぞれ『蘇悉地經』「請問品」, 「真言相品第二」, 「持戒品第七」の和訳を提示し、内容の考察を行っている。この他にも伊藤(2000), (2003)を挙げることが出来る。伊藤(2000)では、『蘇悉地經』の蔵訳であるデルゲ版と北京版、及び『大正蔵』に収録されている三本の漢訳の構成を対照して示している。さらに、『蘇悉地經』に説かれる阿闍梨の条件から、「曼荼羅に入って灌頂を受ける→真言念誦, 成就法の実践により, 悉地を獲得する→阿闍梨灌頂を受ける→阿闍梨」⁸という一連の修行階梯を示している。確かに本經にはこのような修行階梯を想定することが可能であるが、本經の灌頂儀礼に対する考察は行われていない。本論において『蘇悉地經』の灌頂儀礼を取り上げる意義はここにある。

(3) 『蕤呬耶經』

『蕤呬耶經』は、あらゆる曼荼羅に共通する規則を説く經典である。本經には詳細な七日作壇法が説かれているとされ、後期密教文献にも引用される⁹。

蔵訳を用いた研究としては、まず高田仁覚氏を挙げることができる。高田仁(1970)では、『蕤呬耶經』「摩訶曼荼羅品」の訳註を提示し、併せて『大日經』・『蘇悉地經』・『蘇婆呼經』を考慮しながら曼荼羅の通則について検討している。龜山(1991)は蔵訳を用いたものではないが、『大日經疏』に引用されている『瞿醯經』と、不空訳の『蕤呬耶經』を対照し、その相違点を明かし、『瞿醯經』が『貞元録』に記載がないことなどを踏まえ、善無畏が私的なルートで将来した可能性を指摘している。福田(1996)では、本經が、『大日經疏』において曼荼羅作法に関しての典拠を提供し、『建立曼荼羅及揀択地法』¹⁰において、『蘇悉地經』・『蘇婆呼經』・『大日經』と共に多数引用されていることから本經の位置づけを想定し、曼

荼羅建立に関わる規定のすべてを集大成したものと評価しているのである。大塚(1996)は、藏漢両訳を用いて『蕤呬耶經』の灌頂儀礼の全体像を明らかにした初めての研究であろう。大塚氏は、『蕤呬耶經』に説かれる曼荼羅行を实践するグループの想定を行い、次に七日作壇法に依る灌頂儀礼の全容を明らかにし、その特徴について論じている。そこでの評価は、『蕤呬耶經』は『蘇婆呼經』や『蘇悉地經』の灌頂儀礼よりも発達しているが、未だなお『金剛手灌頂タントラ』や『大日經』には至らない、過度的な行体系を有しているとしている。さらに、『蕤呬耶經』のテキストに関する研究として、金本拓士氏と伊藤堯貫氏による『『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究』がある。この研究は、藏訳のゲルゲ版を底本とし、北京版・ナルタン版・チョーネ版・ラサ版・トクパレス版・河口慧海将来写本を校訂し、和訳と該当箇所の不空訳の『蕤呬耶經』を提示するものである。1998年に『『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(1)』が発表され、現在『『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(7)』まで継続している。漢訳の分類に随えば「分別護摩品」までの内容に相当する。惜しむらくは残りの「補闕品」が未発表なことである。金本・伊藤両氏による研究が全て発表された暁には、『蕤呬耶經』の研究も今以上に進むことが期待される。

さて、以上の先行研究からも窺えるように、初期密教から中期密教にかけての密教儀礼を知る上で、本經は重要な經典と言えるであろう。

(4) 『金剛手灌頂タントラ』

『金剛手灌頂タントラ』は、藏訳のみが現在に伝わっており、漢訳された記録がないため、従来あまり注目されてこなかった經典である。本經は、酒井(1962)において『大日經』の先驅經典と位置づけられた。酒井(1973)¹¹によれば、『金剛手灌頂タントラ』は、タントラ四分法において『大日經』と同じ「行ギキ」であり、Buddhaguhyaも『上禪定品広釈』において両經を「分別(viśeṣa)ギキ」として「所作(kriyā)ギキ」より区別しているとする。しかし、Bodhyāgraの『蘇悉地成撰』では本經を「所作ギキ」としているため、「故にこの經軌は見る人によって所作ギキとも見られ得るが故に作業の面が多く示されていて云はば、所作ギキから行ギキにいたる中間的存在の位置にあるものと見られるのである。故に、言葉を換えて云へば行ギキたる大日經にいたる先驅的な成立を意味しているものと思はれるのである。実際にこの經軌を読んで大日經の如く整理せられていず、また哲学的内観も整っていないかのように思へるのである。」¹²として、本經を『大日經』以前に成立したものと見る立場から、考察をしている旨が明かされている。そして、両經を教相・事相の両面から詳細に比較し、本經を『大日經』の先驅經典と位置づけている¹³。頼富(1990)は、酒井論文を継承しながら、本經の曼荼羅に見られる四方四仏が、『大日經』「具緣品」に見られる四方四仏と一致することを指摘している。本論においても、酒井(1973)と同様の立場をとることとする。

その後、本經の研究は伊藤堯貫氏と大塚伸夫氏に受け継がれていく。伊藤(1994)では、本經の研究の基礎作業として、『金剛手灌頂タントラ』の全体の構成と、タントラ分類法における位置づけについて言及し、続いて、伊藤(1995a)、(1995b)において、本經の第一巻と第二巻に相当する部分の試訳を提示している。また、伊藤(1997a)では『金剛手灌頂タントラ』の金剛手灌頂の意義について考察している。本論文第四章で考察する本經の灌頂の目的も、伊藤(1997a)に依る所が大きい。続く伊藤(1997b)は、本經の灌頂儀礼に用いる曼

荼羅の該当箇所和訳を提示し、その構造について論じている¹⁴。

大塚(1995a)は、本経の一連の灌頂儀礼の構造を再構築し、その灌頂儀礼が、經典中に説かれる釈迦から普賢への灌頂をモデルにしていることを明らかにした。大塚(1995b)では、灌頂儀礼の最後に見られる「金剛杵授与」に注目し、それに如何なる意義があるのかを考察している。大塚(2013)では、更に本経と『華嚴経』『入法界品』との関係を究明し、『金剛手灌頂タントラ』は「入法界品」が密教化したものであると評価¹⁵している。

上記の先行研究から見出せる課題について以下に示したい。まず、本研究該当分野に対する研究そのものが少ないと言えるであろう。さらに、『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』に対しては、灌頂儀礼の考察がなされていない。また、一連の儀礼の構造や、灌頂の実践意義は明らかになりつつあるが、瓶水灌頂という名のもとに一括りにされ、各經典に解かれる瓶水灌頂の方法については論じられていない。

そこで本論では、まず従来灌頂儀礼の研究対象として注目されてこなかった『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』の灌頂儀礼について考察する。既に述べた通り、『陀羅尼集経』に説かれる七日作壇法による灌頂儀礼は、灌頂儀礼を説く經典の中でも最初期のものであり、この儀礼構造を明らかにすることで、初期から中期密教に至るまでの七日作壇法の基本構造が把握できると考えられる。また、『蘇悉地経』の灌頂儀礼に対する考察により、同時期に成立したと考えられている『蕤呬耶経』の灌頂儀礼の特徴をより明らかに出来るであろう。

さらに、各經典に説かれる灌頂儀礼の目的(=機能)について考察する必要があるであろう。『蕤呬耶経』には、除難灌頂・成就灌頂・増益灌頂・阿闍梨位灌頂の四種類の灌頂が見られる¹⁶ことから、『蕤呬耶経』編纂時には、灌頂儀礼が様々な用途で存在していたことが読み取れる。既に大塚氏による一連の研究において、『蘇婆呼経』の灌頂儀礼は除難灌頂であり¹⁷、『蕤呬耶経』の灌頂儀礼は阿闍梨位灌頂である¹⁸と、その意義が明らかにされている。そこで、新たに『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』に対する考察を行うなかで、改めて四つの經典の灌頂儀礼の目的を確認したい。

本論文では、四つの經典に対して、以下の四点に注意しながら考察を行う。

1. 灌頂儀礼の目的
2. その目的を果たすための灌頂儀礼の構造
3. その灌頂に用いられる曼荼羅の構造
4. 灌頂の目的を果たすための瓶水灌頂の方法

また、各經典における灌頂の方法において相違が見られた場合に、その相違が灌頂の目的に応じて異なるものであるのかを検討する。

以上のようにして、第一章で『陀羅尼集経』、第二章で『蘇悉地経』、第三章で『蕤呬耶経』、第四章で『金剛手灌頂タントラ』について考察を行う。初期密教經典に七日作壇法を用いた灌頂儀礼が現れてから、『大日経』へと展開していく間の灌頂儀礼の変遷について考察することによって、中期密教經典成立過程に対する研究の一助としたい。

¹ 森(2014)においても、密教の中での灌頂が、何をモデルにしたものかという疑問は当然浮かぶものであるが、残念ながらほとんど分かっていないとしている。そして、基本的な枠組みは既にできあがっていたこと、密教内部で試行錯誤して完成していったわけではないこと、大乘仏教の理念的な灌頂を実際の儀礼の形式に整備したのではないこと指摘して

いる。また、仏教の外にその求めた場合に関しても、ヴェーダ祭式の灌頂、シヴァ派の灌頂、ヴィシュヌ派の灌頂も密教のものとは大きく異なるとし、プラティシュターが灌頂の起源になるのではとの見解を示している。(森 2014, pp8-9)

2 『牟梨曼荼羅呪経』に説かれる灌頂儀礼については、大塚(2013, pp.686-689)に詳しい。

3 『牟梨曼荼羅呪経』の成立年代については大塚(2013, p665)参照。

4 例えば、ロルフ・ギーブル(2000)では『蘇悉地経』に対する研究が少ないことの要因として、「本経が専ら事相作法のみを詳細に説明し、教理的な関心をそそる内容ではないので、学問的な研究の対象として敬遠されてきたとも考えられよう」(ロルフ・ギーブル 2000, pp.105-104)と指摘している。

5 そのため、以前に『陀羅尼集経』の灌頂儀礼に対して言及したことがある。駒井(2011)参照。

6 『陀羅尼集経』と同様に、本経の灌頂儀礼についても考察を行った。駒井(2013)参照。

7 ロルフ・ギーブル(2000, p.105)参照。

8 伊藤(2000, p.277)参照。

9 桜井(1996)によって、後期密教文献に『蕤呬耶経』が多数引用されていることが報告されている。桜井(1996, p.74, p.253, p.318(p.358 注 9), p.331(p.361 注 39), p.349(p.369 注 87))参照。

10 『大正蔵』 vol.18, no.911

11 酒井(1973)は(1962)を修訂したものである。本論文では、(1973)を用いた。

12 酒井(1973, p.63)参照。

13 酒井(1973, pp.62-64)参照。

14 伊藤(1997b)では、曼荼羅の中尊を毘盧舍那か釈迦であると想定しているが、本論第四章で言及するように、この曼荼羅の中尊は金剛手であると考えられる。

15 大塚(2013, pp.976-985)参照。

16 大塚(2013, pp.955-957)参照。また、経典の該当箇所は以下の通り。『大正蔵』 vol.18, p.722a。D f.166r5-7, P ff.225v5-7.

17 大塚(1998a), (1998b), 及び(2013, pp.885-897)参照。

18 大塚(1996), 及び(2013, pp.953-958)参照。また、『蕤呬耶経』の灌頂の目的に関しては、本論第三章においても言及する。

本論

第一章 『陀羅尼集經』の灌頂儀礼について

第一節 はじめに

『陀羅尼集經』は、序によれば阿地瞿多在永徽 4(653)年に『金剛大道場經』から一部を取り出し、十二巻に集成したものとされ¹、各巻にそれぞれ別の經典が説かれている。全体として対応する梵本は確認されておらず、中国において集成されたものと松長(1980)²及び頼富(1988)³によって指摘されている⁴。

しかし、個別の經典は、個々に異訳經典が存在するものもあり、その内容もインドの儀礼を色濃く反映するなど、頼富(1988)の指摘通り、全く中国撰述であると言うことは出来ない⁵。また、佐々木(2003)によって『陀羅尼集經』の中の經典のいくつかの異訳經典が確認され⁶、先行する異訳經典との間で訳語の一致、主要述語における一貫した改変、儀軌・実践部分の増広等の事柄より「經説」と「儀軌」が別々にあり、阿地瞿多が編訳したのではとの報告がなされている⁷。こうした研究により、個々にインドに於いて成立した經典が『陀羅尼集經』としてまとめられたと考えられる⁸。

さて、この章では『陀羅尼集經』の中でも、七日作壇法が説かれる第四巻と第十二巻を取り上げることとする。ここでは、まず第四巻と第十二巻の灌頂儀礼が極めて近い構造をもつこと、また第十二巻の一連の儀礼の中に、『陀羅尼集經』の各巻の要素が取り入れられていることを確認していく。次に、佐和(1975)によって、『陀羅尼集經』前十一巻の諸尊が集められたという第十二巻の曼荼羅も、第四巻の曼荼羅を基に、さらに『陀羅尼集經』全体の構成を表していることを指摘し、最後に、第十二巻に見られる儀礼の内容と意義について論じていきたい。

第二節 第四巻と第十二巻の灌頂儀礼

第一項 『陀羅尼集經』の七日作壇法

まず初めに、『陀羅尼集經』に説かれる七日作壇法の構造を確認していきたい。第四巻と第十二巻に説かれる内容を対照すると以下ようになる。

	A.第四巻	B.第十二巻
一 日 目	A-1-1.阿闍梨と弟子、香湯で洗浴し、 香華を持って造壇の地へ赴く A-1-2.阿闍梨、弟子に秘密法蔵を学ぶ ことを確認 A-1-3.造壇の地に曼荼羅を画くことを 宣言 A-1-4.軍荼利法によって結界	B-1-1.阿闍梨と弟子、香湯で洗浴し新淨衣 を着て、香華を持って造壇の地へ赴く B-1-2.阿闍梨、弟子に秘密法蔵を学ぶこと を確認 B-1-3.造壇の地に曼荼羅を画くことを宣言 B-1-4.造壇の地に香水を洒水 B-1-5.軍荼利法によって結界

	<p>A-1-5.造壇の地の内にある，悪土・骨・瓦礫などを掘り去る</p> <p>A-1-6.好土によって元の高さまで埋め，平らにする</p>	<p>B-1-6.造壇の地の内にある，悪土・骨・瓦礫などを掘り去る</p> <p>B-1-7.好土によって元の高さまで埋め，平らにする</p>
二日目	<p>A-2-1.泥を地に塗る</p>	<p>B-2-1.晨朝に阿闍梨と弟子，香湯で洗浴し新浄衣を着て，弟子と道場に入る。</p> <p>B-2-2.道場を荘嚴する</p> <p>B-2-3.軍荼利法によって結界</p> <p>B-2-4.般若の大神呪を誦して，香泥を混ぜる</p> <p>B-2-5.香泥を地に塗る</p> <p>B-2-5.軍荼利法によって結界</p>
三日目	<p>A-3-1.泥を地に塗る</p>	<p>B-3-1.晨朝に洗浴する</p> <p>B-3-2.前の呪（般若の大神呪）を誦して，地に着かざる牛糞を香泥と混ぜる</p> <p>B-3-3.混ぜた牛糞を地に塗る</p> <p>B-3-4.地の四角に点を下し，繩を対角線に引き，中心に点を下す</p> <p>B-3-5.その中心に，七宝と五穀を埋める</p> <p>B-3-6.軍荼利法によって結界</p> <p>B-3-7.夜に灯を燃す</p>
四日目	<p>A-4-1.牛糞香泥を地に塗る</p> <p>A-4-2.地の四角に点を下し，繩を対角線に引き，中心に点を下す</p> <p>A-4-3.その中心に，五宝と五穀を埋める</p> <p>A-4-4.大結界を行う（初日の如く）</p>	<p>B-4-1.晨朝に，三日目までと同様に（軍荼利法）結界</p> <p>B-4-2.前の呪（般若の大神呪）を誦して，牛糞と香湯を泥に混ぜる</p> <p>B-4-3.混ぜた牛糞を地に塗る</p> <p>B-4-4.道場の荘嚴</p> <p>B-4-5.西門の南に火爐を建立する</p> <p>B-4-6.道場の東北に四肘量の白水壇を建立する</p> <p>B-4-7.道場南西に中庭を確保</p> <p>B-4-8.四肘量の白檀を建立する</p> <p>B-4-9.（軍荼利法の）大結界</p> <p>B-4-10.灯燭を燃し，香を焼く</p>
五日目	<p>A-5-1.牛糞を地に塗る</p> <p>A-5-2.結界（四日目の如し）</p>	<p>B-5-1.晨朝に阿闍梨と二人の弟子，香湯で洗浴し新浄衣を着て，道場に入る</p> <p>B-5-2.一遍行道し，讚歎して礼す</p> <p>B-5-3.香泥を地に塗り，乾くのを待つ</p> <p>B-5-4.曼荼羅拵ち</p>

<p>六 日 目</p>	<p>A-6-1.阿闍梨と、弟子二人、洗浴して新浄衣を着て、壇に入る A-6-2.曼荼羅絁ち A-6-3.五色線で五十五結の索を作る A-6-4.壇の荘嚴 A-6-5.西門の南に火炉を作る A-6-6.日没、諸弟子を洗浴させる A-6-7.大結界 A-6-8.日の入り、諸仏菩薩金剛を召請 A-6-9.供養 A-6-10.弟子の結護（護身・洒水・腕に索を着けるなど） A-6-11.齒木の所作 A-6-12.香水を飲む A-6-13.阿闍梨、諸仏・菩薩・金剛に啓白 A-6-14.弟子を引入し供養させる A-6-15.諸尊を發遣 A-6-16.弟子に語って寝かせる A-6-17.壇に入り、諸仏・菩薩・金剛に啓白（三度） A-6-18.諸尊を發遣 A-6-19.弟子の滅罪のために護摩を行う A-6-20.曼荼羅諸尊を作画する A-6-21.画いた曼荼羅に不備がないか検校する A-6-22.旧弟子に曼荼羅を守護させる</p>	<p>B-6-1.五色線で五十四結の索を作る B-6-2.日没、諸弟子を洗浴させ新浄衣を着させる B-6-3.阿闍梨と弟子、大結界・護身をなす B-6-4.日の入り、仏般若菩薩金剛諸天を召請 B-6-5.供養 B-6-6.弟子の結護（護身・洒水・腕に索を着けるなど） B-6-7.齒木の所作 B-6-8.香水を飲む B-6-9.弟子に語って寝かせる B-6-10.壇に入り、諸仏・菩薩・金剛に啓白（三度） B-6-11.諸尊を發遣 B-6-12.弟子の滅罪のために護摩を行う B-6-13.曼荼羅諸尊を作画する B-6-14.画いた曼荼羅に不備がないか検校する B-6-15.既に入壇したことのあつた弟子に曼荼羅を守護させる</p>
<p>七 日 目</p>	<p>A-7-1.阿闍梨、自身を結護する A-7-2.曼荼羅を結界 A-7-3.瓶の準備（十三瓶） A-7-4.瓶の加持（十一面觀世音の真言で水瓶を一百八遍誦す） A-7-5.水瓶の配置 A-7-6.諸尊の奉請 A-7-7.曼荼羅の大結界 A-7-8.香水を曼荼羅に洒水する A-7-9.散華 A-7-10.供物を施す A-7-11.十方の鬼神に施食</p>	<p>B-7-1.阿闍梨、自身を結護する B-7-2.曼荼羅を結界 B-7-3.瓶の準備 B-7-4.供物と道場の準備 B-7-5.瓶の加持(曼荼羅の座主の真言で水瓶を一百八遍誦す) B-7-6.水瓶の配置 B-7-7.供物を施す B-7-8.道場に入り、啓白して供養し讚歎す音楽をならず（散華仏の曲） B-7-9.諸尊の奉請 B-7-10.三摩耶の大結界</p>

A-7-12.弟子の結護	B-7-11.香水を曼荼羅に洒水
A-7-13.投華得仏	B-7-12.散華
A-7-14.灌頂	B-7-13.三礼して、行道する音楽をならず (阿弥陀の曲)
A-7-15.護摩	B-7-14.諸鬼神に施食音楽をならず(観世音の曲)
A-7-16.諸尊に謝礼	B-7-15.弟子の結護
A-7-17.諸尊の発遣	B-7-16.投華得仏
A-7-18.布施	B-7-17.灌頂
A-7-19.曼荼羅説示	B-7-18.護摩
A-7-20.破壇	B-7-19.金剛軍荼利讃歎道場成就満願の印
	B-7-20.諸尊に謝礼
	B-7-21.諸尊の発遣
	B-7-22.布施
	B-7-23.曼荼羅説示
	B-7-24.破壇

『陀羅尼集經』には突如として七日作壇法が現れるが、どのように本經に導入されたのか、残念ながらあきらかではない⁹⁾。しかし、『陀羅尼集經』翻訳時には、すでに七日作壇法の基本構造が出来上がっていたことだけは確かであろう。また『陀羅尼集經』に見られる七日作壇法で特筆すべきは、初日に行うべき所作や二日目に行う所作を、日毎に説いていることである。七日作壇法の各儀礼を日毎に説く經典は、管見の限り、『陀羅尼集經』の他には見当たらない。

第二項 第四卷と第十二卷の共通部分

同じ七日作壇法であれば、その中に共通する儀礼が説かれることに問題はない。例えば、『蕤呬耶經』や『大日經』にも、『陀羅尼集經』第四卷・第十二卷の七日作壇法と同様の儀礼が、その細部には多少の相違が見られるが、共通して説かれている。上記の七日作壇法の次第の構成で確認した通り、この両者を全く同一ということはできない。しかし、第四卷と第十二卷とで共通する部分としてあげる儀礼は、その詳細な部分にまで共通点が及び、異なる經典に説かれる二つの儀礼の関係を考える上で重要である。ここでは、以下に両者の儀礼が同等の内容を含む用例を表として挙げ、その共通点を確認していく。なお、本節では両者の共通点を指摘することを目的とするため、その内容や特徴については、第四節を参照されたい。

用例 1. 初日の儀礼

第四卷『十一面觀世音神呪經』

第十二卷『仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品』

処を定め知り已なば、白月一日の晨朝時、

処を定め知り已なば、其の白月一日の平旦に

	至りて、
阿闍梨の身及び諸弟子、香湯に洗浴せしめ、諸香花を將いて其の処所に至らしむ。	阿闍梨と諸弟子、香湯をもって洗浴し新淨の衣を著よ。諸香華を將いて其の処所に至り、
阿闍梨、手に跋折羅を執り、次第に諸弟子等に問うて言く。	阿闍梨、跋折羅を把りて、応当に彼の諸弟子に問うて言く。
「汝等、決定して諸仏の秘密法蔵を学ばんと欲す。疑を生ぜざるやいなや」と。	「汝等、必ず能く決定して我が諸仏等の説きたまえる秘密法蔵を受けん。疑惑を生ぜざるや不や」と。
徒衆答えて言く。	徒衆答えて言く。
「我等、諸仏の法蔵を学ばんと欲す。決定して誠信す。疑心を生ぜず」と。是の如く次第に三問三答す。	「我等、仏法の中に於て、決定して誠信す。疑惑を生ぜず」と。(是の如く重重に三問三答す。)
是の如く答え竟り、次に阿闍梨、手をもって香鑪・水等を印し、呪し已り、手に香鑪を執り、胡跪し焼香す。一切の諸仏般若菩薩金剛天等、及与び一切の業道冥祇に啓白す。	徒衆答え已りて、然して後に阿闍梨、手をもって香鑪及び浄水等を印し、馬頭印を用いて其の浄水を印し、呪すること三七遍せよ。而して香鑪を把り、胡跪して焼香し、一切諸仏般若菩薩金剛天等及び一切の冥聖業道に仰ぎ啓す。
「今此の地は、是れ我の地なり。我、今七日七夜、都大道場法壇の会を立てんと欲す。一切の十方法界の諸仏世尊、及び般若波羅蜜多、諸菩薩衆、金剛、天等に供養せん。諸の徒衆を領して、一切の秘密法蔵の思議し難き法門を決定せんが故に、諸の證成を取りたまえ。我、護身結界の法事を欲いて、此の院内の東西南北四維上下に在る、所有一切の正法を破壊せる毘那夜迦、悪神鬼等、皆我が結界の所の七里の外に出で去れ。若し正法を護る善神鬼等にして、我が仏法中に於いて利益を有する者は、意に随いて住せ」と。	「今此の地は、是れ我の地なり。我、今七日七夜、都大道場法壇の会を立てて、一切の十方世界の恒沙の仏等、一切の般若波羅蜜多、一切の大地の諸菩薩衆、金剛、天等を供養せんと欲す。仰ぎ請うらくは諸仏、諸の徒衆を領して、一切の秘密法蔵不可思議の大法門を決定せんが故に、諸の證成を取りたまえ。我今、護身結界供養の法事を作さんと欲う。此の院内の東西南北四維上下に在る、所有一切の悪神鬼等、皆我が結界の所の七里の外に出去れ。若し善神鬼にして我が仏法中に利益を有する者は、意に随いて住せ」と。
此の語を説き已りて、次等に彼の軍荼利法に依りて、辟除結界す。 (『大正蔵』 vol.18, p.813c)	此の語を作し已りて、次に前の水を用いて右遶し遍く道場の地に灑げ。次に、即ち前の軍荼利法を作して一度結界せよ。其の結界の印呪は、軍荼利部中の所説の如し。更に別の法無し。 (『大正蔵』 vol.18, p.886a)

次第の構成、弟子に対する質問、表白の内容など、ほぼ一致していると言える。

用例 2. 弟子を受持する次第

第四卷『十一面観世音神呪経』

第十二卷『仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品』

次に阿闍梨，諸弟子を喚び，護身印を作し，一一に呪を誦すること七遍せよ。各各与めに，諸弟子の頂及び両肩，心，咽，眉間，髮際，脳後を印ぜよ。護身畢已りて，諸弟子をして席上に就け，面を東に向けて座せしめよ。	次に阿闍梨，一一に更に与めに護身印を作し，呪を誦して一一の弟子の身上を印すること前の如し。然る後，席上に就きて跪座して各面を東に向かわしめよ。
次に香華及び白芥子を取れ。阿闍梨，白芥子を把り各の呪すること七遍し，次第に諸弟子の頭上を打つこと三遍せよ。打ち竟らば，更に護身を与えよ。馬頭観世音の印を用いて之を呪せ。	阿闍梨，白芥子を把りて呪して，一一の弟子の頭面心等を打つこと三遍せよ。然る後，馬頭観世音菩薩の印呪を用いて，更に護身の法事を作すこと前の如し。
次に阿闍梨，胡跪して最長の弟子に問うて云く。	次に阿闍梨，胡跪して，具さに最長の弟子に問え。
「汝今，此の法を学ぶことを得んと欲するや不や」と。	「汝等，此の法を受くことを得んと欲するや不や」と。
弟子答えて云く。	其の弟子等答えて云く。
「得んと欲す」と。	「是等の如き法を得んと欲す」と。
是の如く次第に諸弟子に問え。法用は前の如し。	
次に阿闍梨，手に香水を擎げ，諸弟子の一一の頭上に泮らせ。復た，右手を以て諸弟子の一一の胸上を按じて，為めに馬頭観世音の呪を誦せ。	具さに問答し已りて，次に阿闍梨，香水の器を把りて，一一の弟子の頭上に挿げ。復た右手を以て一一の弟子の胸上を案じて，口に馬頭観世音菩薩の心呪を誦して，与めに護持し訖れ。
次に呪索を取り，各各諸弟子の与めに臂に繫げ。男は左，女は右なり。	次に呪索を以て，一一の弟子の左臂に繫げ。
次に娑羅樹の汁香を以て，次第に与めに諸弟子の身に泮すに，右旋すること三転せよ。香水を泮らし竟りて，次に炬火を旋らすこと亦た前法の如し。	次に阿闍梨，諸弟子を引きて，位を退きて東の階より下りて西の階の下に於て，地に跪きて座せ。次に阿闍梨，即ち娑羅樹の汁香水を以て，次第に与めに一一の弟子の前に灑ぐに，右邊すること三匝せよ。次に炬火を用いて右邊せよ。三匝すること亦た前法の如し。
次に柳枝の各の長さ八指なるを与えよ。次に華を授与せよ。	次に柳枝を与えて，次に雜華を与えよ。皆前法に准じて右邊し諸弟子等に授与せよ。
竟りて，諸弟子をして東に向け列座せしめよ。諸弟子をして華を投じ前に向かし	其の弟子等，柳枝を受け已りて，却き縮まり跪座して，楊枝の頭を嚼みて，然る後，

めよ。次に、柳枝を嚼ましめ、亦た前の如く投ぜしめよ。	前に向いて其の柳枝を投げよ。
若し其の華の頭、身に向かはば好なり。背いて東に向かはば魔障出ると知れ。南北に向かはば皆不吉と為す。柳枝の嚼める処、身に向かはば好なり。背いて東に向かはば魔障出ると知れ。余は華法の如し。	阿闍梨、一一に其の柳枝の墮つる処を看よ。若し其の柳枝の嚼める頭、身に向はば即ち大吉と為す。若し南に向はば即ち不吉と為す。若し其の嚼める頭、余方に向はば即ち平平なりと知れ。
次に洗手を以て、各の手を以て跋折羅を水に領けて、敬謝して之を飲め。	是の如く次第に試験すること遍く已りて、然る後、次第に香水を掌に灌ぎ、及与び之を飲ましめよ。人、各の三たび飲め。一一の弟子の掌に灌ぐこと遍く竟れ。次に阿闍梨、跋折羅を以て水を印して自ら飲め。
次に阿闍梨壇に入りて、諸仏菩薩金剛等に啓白して云く。	
「我れ次第を以て諸弟子に問い、又た作法次第を以て試み竟れり。今諸弟子、壇に入り来たりて聖衆に供養せんと欲す」と。是の如く啓し已りて、弟子を引入し、略供養竟り、発遣して外に出よ。	
	法事を作し已りて、諸弟子を引きて道場に昇れ。西の階従り上りて道場の側に於て行列して座せしめ、与めに一遍の行香の法事を作し訖れ。
阿闍梨、諸弟子に語れ。「各の臥睡するために去るべし。若し夢みる所有らば、明朝、各各我れに向いて之を道え」と。	次に阿闍梨、諸弟子に語れ。「汝等、臥すために去るべし。若し夢相有らば、明朝、我れに向いて各の具さに之を説け。各各用心せよ。造次にも他に向いて漏泄すること得ざれ」是の語を作し已りて、次に阿闍梨、弟子等を引きて東の階従り下りて、各の散して房に帰せしめよ。
時に諸弟子、総て臥しに去りし後、次に阿闍梨、壇内に入り、仏菩薩金剛等に白して云く。	次に阿闍梨、道場内に入り、仏菩薩金剛等に啓して云く。
「諸弟子等、明日更に道場に入り、来りて広く諸仏菩薩金剛天等に供養を作さんと欲す。請して空中に昇り、明かに供養せんと欲す。時に臨んで、総じて赴き、衆の供養を受けたまえ」と。（是の如く	「是の諸弟子、壇に入らんと欲して来たり。各各に証を取りたまえ。我れ弟子某甲の与めに法用を作して、総て遍く問い竟んぬ。諸弟子等、明日壇に来入して供養せんと欲す。願わくは仏・般若・菩薩・金剛及び諸

三たび説け)	天等、今夜大悲の境界をもって徒衆にたれたまえ。弟子某甲、明日普く一切の三宝及び諸の眷属を請して、広く供養を為さん。願わくは大慈悲、明日皆赴きて諸供養を受けて法事を証明したまえ」と。(是の如く三たび説け)
然る後、壇内の諸仏菩薩金剛、及び諸天等を発遣せよ。(『大正蔵』vol.18, p.814c)	然る後、壇内の諸仏菩薩金剛を發遣せよ。(『大正蔵』 vol.18, p.887c)

これは六日目に行われる弟子を受持する儀礼で、『大日経』では三世無障礙智戒を授与する儀礼に相当する。若干の違いが見られるものの、ここでの所作も一致すると言える。

用例 3. 投華得仏

第四卷『十一面觀世音神呪經』

第十二卷『仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品』

次に香水を取り、与えて其の手を洗え。	次に更に香水を与えて手を洗い口を漱ぎ竟れ。(薬を止めよ)
	次に阿闍梨、其の徒衆を喚びて、年長の者従り一一に門辺の席の上に就かしめ、礼拝して跪座せしめよ。
弟子の爲めに、觀世音三摩夜印を作せ。印中に花を著き、放棄せしむること勿れ。次に、帛を以て其の弟子の眼を裹め。阿闍梨、心口に発願し、平等普大慈悲心を以て悉く皆一切衆生に回向せよ。	次に阿闍梨、将に黄絹を用うべし。以て次に縵を大弟子の眼に与えよ。弟子の手を取り、与めに觀世音菩薩三昧印を作り、印の中に花を著き已れ。
次に阿闍梨、弟子を引将し、壇の西門に入れ。阿闍梨、南辺に在りて立ち、弟子、北辺に在りて立て。	阿闍梨、弟子の頭を牽いて道場に入れ。壇の西門の前に面を壇に向けて立たしめよ。阿闍梨、門の北に在りて立ち、弟子は門の南に在りて立て。
阿闍梨、觀世音三摩耶呪を誦せ。呪に曰く。	次に阿闍梨、觀世音三昧の呪を誦せ、呪に曰く。
唵 _三 般母婆 _{去音} 囉 _三 夜 _三 莎訶 _三 (oṃ padmodbhavāya svāhā)	唵 _三 般母波婆 _{去音} 囉 _三 夜 _三 莎訶 _三 (oṃ padmodbhavāya svāhā)
誦すること七遍し已り、弟子に教えて云く。	之を誦すること七遍せよ。
「前に向いて華を散ぜよ」と。	弟子をして手の中の花を散じ、任に壇内に向わしめよ。
散じ竟らば好く花は何座に墮せるか看るべし。	華、仏等の蓮花座に著き已らば、眼を放ち絹を去り、位地を見せ礼すること三拜せしめよ。
知り已りて語りて云く。	已りて阿闍梨語れ。

「汝の散ぜし所の花，某仏，某菩薩等に著けり。好く念じて忘れざれ」と。	「汝の散ぜし花，某仏，般若，某菩薩，某金剛，某天等の位に著けり。其の著く所に随いて好く記して忘るること莫れ」と。
其の余の弟子は上の法の如くを用いよ。	散花竟りたる者，道場内の門の南に在りて跪座し，後の弟子の到来を待ちて，即ち却行して，出でて西の辺に座せしめよ。諸余の弟子も一一に此に准じて，総て尽く周遍せよ。 (『大正蔵』 vol.18, p.891b)
若し三廻散ぜし時，総て著ざれば，更に帛を解くこと莫れ，便に随いて擯出せよ。是れ大罪人にして入壇するに合わず。 (『大正蔵』 vol.18, p.815c)	

本節では内容に関しては語らないが，十一面觀世音を曼荼羅の中心に安置する第四巻で觀世音三摩耶の印呪を用いることは自然であるが，普門壇である第十二巻の本儀礼において同様の印呪が用いられることには注意が必要である。このことは，第四巻の儀礼が第十二巻に継承されたことを示す一つの論拠となろう。

用例 4. 『陀羅尼集經』の狭義の灌頂

第四卷『十一面觀世音神呪經』

第十二卷『仏説諸仏大陀羅尼都會道場印品』

一一次第に諸弟子を引し，阿闍梨，水缶を擎げ出で，灌頂壇に到り，右繞すること三匝せよ。其をして床に上らしめ，阿闍梨も亦た自ら床に上り，	次に阿闍梨，更に依次に一一の弟子を喚び，壇の中に入り，為に水缶を取りて，前に准じて却き出でて，灌頂壇に至りて西門従り入れ。其の緋蓋を執る者の阿闍梨に逐う法は，後従り行きて，弟子を覆いて外壇の所に至れ。
弟子の辺に立ち問うて云く。	次に阿闍梨，与めに法印を作して，水缶を捉り擎げよ。阿闍梨問うべし。
「汝が前に散ぜし花，何等の仏菩薩の座に著けるや」	「汝が前に散ぜし華，何れの仏位般若菩薩金剛諸天及び神鬼等に著けるや」と。
弟子答えて云く。	
「某仏等に著けり」と。	
時に阿闍梨，其の答える所に随いて，其の印を作さしめ，其の頂上を印せしめよ。	其の報える所に随いて，与めに本印を作して，印を頂戴せよ。
印中に華を著けて，至心に念ぜしむ。其の本主の仏菩薩等に随いて，阿闍梨，即ち彼の仏菩薩等の呪を誦せ。灌頂を与え已り，散華し解印せしむ。	已りて印の頭を上に向け，掌中に華を著よ。印を以て水を承け，与に本呪を誦し之を頂上に灌げ。弟子心口に発願すること前の如し(云云)。

	乃ち缶中の宝物の裏を収めて、此の宝物を以て前の呪索に繋ぎ、永く身を離さず、寿終の時に擬せ。須く此の宝を將て信驗と為さんが故に。
衣を著け壇に入れ。仏に謝すこと、本位座に依れ。	灌頂を与え竟らば、即ち浄衣を著して道場に入れ。加うるに紫蓋を以てせよ。迎礼の法事、一に阿闍梨の威儀進止に准ぜよ。壇の西門に至り、三礼せしめんこと本位座に依れ。
其の余の弟子の法用は前の如し。総じて灌頂し已れ。 (『大正蔵』 vol.18, p.816a)	次に阿闍梨、更に壇中に入りて、為に水缶を取りて一一に上に准じて次第に迎送せよ。灌頂の法事、一も別異無く、總じて周遍し已れ。 (『大正蔵』 vol.18, p.891c)

灌頂の場面に関しても、弟子の結縁の尊格を確認する次第、瓶水を受ける所作など、多くの点で一致が見られる。

第三項 第四巻と第十二巻の前後関係

第四巻と第十二巻を比較することによって、そこに説かれる個々の儀礼に多くの共通点が見られた。その中で、第十二巻に十一面観世音の呪を用いる箇所をいくつか確認することが出来た。第四巻『十一面観世音神呪経』では、十一面観世音を曼荼羅の中尊とするため、その呪を多くの箇所で用いることは当然のことである。しかし、第十二巻は曼荼羅作画の箇所で、

帝殊羅施を以て之を座主と為せ。中心に当たりて大蓮花座を敷け。座の主は即ち是れ釈迦如来の頂上の化仏なり。仏頂仏と号す。如し其れ仏頂を以て主と為さざれば、意の念ずる所の諸仏菩薩に随いて、位を替うることも亦得。其の座主を除きて以外の諸仏及び菩薩等は、皆本位に在りて供養を受く。諸仏般若及び十一面等の菩薩の相替るに非らざるより余は、皆得ずして都会法壇の主を作せ。(『大正蔵』 vol.18, p.888b)

と、帝殊羅施仏頂(Tejourāśi)を曼荼羅の中尊とする曼荼羅を説くのである。さらに、自分の念じる仏や菩薩を中尊にすることも可能であると説く。しかし、その一例に十一面観世音の名を出している。このような記述が、第四巻と第十二巻の前後関係を明らかにする材料になるであろう。よって以下に、第十二巻においても第四巻と同箇所で十一面観世音を含む、観世音系の菩薩の呪を用いることが説かれる箇所を確認していきたい。

先ず、灌頂に用いる水瓶を加持し準備するところである。

然して後に、香鑪を放ち著き出で、自ら手で一金水缶を取りて、壇の西門に至りて胡跪して至心に観世音十一面菩薩の呪を誦すること一百八遍せよ。若し諸仏をして座の主と為せば、其の當部に随いて各本呪を誦すること一百八遍せよ。

(『大正蔵』 vol.18, p.889c)

このように十一面觀世音菩薩の呪で加持することを説く。その後、曼荼羅の中尊が変わればその尊格の真言で加持することが説かれるが、初めに十一面觀世音菩薩の呪を例に出すところに注意が必要である。次に、投華得仏の時に注目すると、

次に阿闍梨、將に黄絹を用うべし。以て次に縵を大弟子の眼に与えて、弟子の手を取り、觀世音菩薩三昧印を与え作さしめ、印の中に花を著き已れ。

(『大正蔵』 vol.18, p.891b)

と、灌頂儀礼の中核をなす儀礼の一つである投華得仏の箇所において觀世音菩薩三昧の印を結び、そこに華をつけて投げる事が説かれている。他にも、『陀羅尼集經』第四卷、第十二卷共に弟子に対して灌頂を与え終わった後、五段護摩¹⁰を焚く所作が説かれるが、その五段目の護摩の箇所では、

次に国主皇帝皇后の為に、香華等の諸物を焼きて供養せよ、為に呪を誦すること四十九遍を満ぜよ。次に太子諸王妃主の為に、是の如く供養して亦呪を誦すること四十九遍を満ぜよ。次に大臣文武百官の為に、是の如く供養して亦呪を誦すること四十九遍を満ぜよ。次に歴劫の過現の諸師と一切の父母の為に供養して、呪を誦すること四十九遍せよ。次に一切の業道の諸官の為に供養して、呪を誦すること四十九遍せよ。次に十方の一切施主の為に供養して、呪を誦すること四十九遍せよ。次に十方の尽空法界の六道四生、八難八苦、一切衆生の為に供養して、呪を誦すること四十九遍せよ。次に阿闍梨自身の為に供養して、呪を誦すること二十一遍満足せよ。次に道場の処の主人の合家の為に供養して、呪を誦すること遍数前に同じ。国主自從り乃至主人まで、總て皆通じて觀世音十一面菩薩の大心呪を誦せよ。悉く一切の供養法に通じて用いよ。

(『大正蔵』 vol.18, p.892a)

と、十一面觀世音菩薩の呪を用いることが説かれている。

次に、十一面觀世音の呪ではないが、馬頭觀世音の呪を用いる箇所をみてみたい。第十二卷では、金剛線を作る箇所では、

次に第六日に、阿闍梨は五色線を以て、其の受法の人数の多少に随いて、為に呪索を結びて、馬頭觀世音菩薩の大心呪を用いて之を呪せ。(『大正蔵』 vol.18, p.887c)

と、馬頭觀世音の呪を用いる。また、弟子を受持する次第の中でも、

・阿闍梨白芥子を把りて呪して、一一の弟子の頭面心等を打つこと三遍せよ。然る後に、馬頭觀世音菩薩の印呪を用いて、更に護身の法事を作すこと前の如し。

(『大正蔵』 vol.18, p.887c)

・復た右手を以て一一の弟子の胸上に案して、口に馬頭觀世音菩薩の心呪を誦して、与えて護持し訖れ。

(『大正蔵』 vol.18, p.888a)

とあり、さらに弟子を眠りに就かせた後、弟子の罪を滅する護摩を行う箇所においても、

次に阿闍梨、壇の北辺に向いて火爐を著き已りて、馬頭觀世音の大心呪を誦し、白芥子を呪して火爐の中に於て一呪一燒すること一百八遍して、諸弟子の罪を滅し障を除

かしめよ。

(『大正蔵』 vol.18, p.888a)

と、結界・護身・護摩等の儀礼を行う箇所、観音系の尊格である馬頭観世音の呪を用いるのである。

以上見てきたように、灌頂に用いる水瓶の加持を十一面観世音の呪で行うこと、投華得仏の時の印が観世音三昧印を用いること、五段護摩の五段目に用いる呪が十一面観世音の呪であること、この三点及び、儀礼の中で行われる結界・護身・護摩の箇所、馬頭観世音の呪を用いること、さらに、曼荼羅作画の箇所、曼荼羅の中尊となるべき尊格の一例に十一面観世音の名を挙げていること等、第十二巻の儀礼の中に、十一面観世音を曼荼羅の中尊とする第四巻と同じように、観音系の真言が用いられていることが確認できた。このことから第十二巻に説かれる一連の灌頂儀礼は、第四巻の灌頂儀礼を継承しながら、それを普門壇（普集会曼荼羅）に発展させようとした時に残った観音系の名残ということが出来るであろう。

第四項 第十二巻に挿入されたその他の巻の儀礼

以上のことから、第十二巻に説かれる七日作壇法が第四巻から導入されたことが明らかになった。しかし、第四巻には見られず、第十二巻のみに説かれる儀礼がいくつかある。

次に、その相違について見ていきたい。それらの儀礼に注目すると、『陀羅尼集経』のその他の巻に説かれていることが分かる。ここでは、二日目から四日目までに行われる B-2-4, B-3-2, B-4-2 の香泥を地に塗る所作が、第三巻から導入されたこと、及び七日目の B-7-10. 三摩耶の大結界と B-7-19. 金剛軍荼利讚歎道場成就満願の印が第八巻から導入されたことを確認していく。

二日目に行われる塗香泥について第四巻では、「次に第二日、及び第三日泥を以て地に泥れ」（『大正蔵』 vol.18, p.814a）とのみ説かれていたのに対して、第十二巻では、

次に阿闍梨、更に一度軍荼利法の結界を作し畢已りて、即ち種種の香泥一瓮を作して、柳枝を用いて攪け、以て般若の空心呪を誦せ。呪に曰く。跢姪他揭帝揭帝波羅揭帝波羅僧揭帝菩提莎訶(tadyathā gate gate pāragate pārasaṃgate bodhi svāhā)。其の呪の遍数は、若し国王の為ならば、之を誦し満足すること一百八遍せよ。若し三品以上の為ならば、之を誦すること五十六遍せよ。若し四品五品の為ならば、誦すること七七遍せよ。若し六品七品の為ならば、誦すること五七遍せよ。若し八品下及百姓の為ならば、誦すること三七遍せよ。一切の壇法に皆是の如く呪せよ。泥を呪すること既に竟りなば、泥を用いて地に塗れ。塗地の法は日に随いて之を摩せ。

(『大正蔵』 vol.18, p.886b)

と、香泥をつくる所作から詳しく説かれている。そして、この般若の空心呪と同一の呪が、第三巻『般若波羅蜜多空心経』の中の「般若空心陀羅尼十六」に、

跢姪他揭帝揭帝波羅揭帝波羅僧揭帝菩提莎訶(tadyathā gate gate pāragate pārasaṃgate bodhi svāhā)。是れ空心呪なり。空心印を用う。諸壇處を作し、一切に

通用す。

(『大正蔵』 vol.18, p.807b)

と説かれる。第三巻ではこの呪が特に諸壇處を作ることに通用していたために第十二巻に導入されたと考えられる。

次に、B-7-10.三摩耶の大結界を見てみると、第十二巻では、

皆な華座を作して安置すること前の如くせよ。如し其れ当部に印呪無くば、若し諸仏を請するならば即ち一切諸仏の印法を用いよ。若し諸菩薩を請するならば一切菩薩の印法を通用せよ。若し金剛を請するならば亦一切金剛の印法を用いよ。若し諸天を請するならば亦一切諸天の印法を用いよ。若し一切諸鬼神等を請するならば亦一切諸鬼神の法を用いよ。一一に次第に総て奉請し竟れ。次に三摩耶大結界法を作せ。印法は是の如し。左右の無名指と小指を以て相又し掌に在け。二中指を以て豎て、斜めに申ばし頭を相拄えよ。二頭指を以て屈し、中指の上節の背を捻せ。二大指を以て頭指の根本の文に附捻せよ。呪に曰く。

唵跋折囉商迦禮摩訶三摩焰盤陀盤陀莎訶(om vajraśṛṅkhale mahāsamaye bandha bandha svāhā)

此の法の印を作して呪を誦すること七遍し、印を以て右転すること乃至三匝せよ。大結界と名づく。(『大正蔵』 vol.18, p.890c)

とあり、曼荼羅を画いた後に華座印を結び、仏部・蓮華部・金剛部・諸天ごとに印法を用いて奉請し、その後三昧耶の大結界を行うことが説かれている。第八巻では、

軍荼利三摩耶結大界法印呪第二十六

亦は一切仏摩訶三昧耶印呪と名づく

二小指と二無名指を以て、交叉し右をもつて左を押し、挺して掌中に在け。直く二中指を豎て、斜めに舒べ直く頭を相拄えよ。二頭指を以て各屈し、中指の第三節の背を捻せ。二大指を以て各二頭指の辺側に博き附け、掌を開け。呪に曰く。

唵商迦禮摩訶三昧焰盤陀盤陀莎訶(om vajraśṛṅkhale mahāsamaye bandha bandha svāhā)

是の法の印呪、若し道場壇所を建立すること有りて、一切諸仏般若菩薩金剛天等を請し供養せんと欲わば、聖衆一一に到る若く各華座の印呪を作し、承迎し本位に安置すること総て竟れ。然る後に此の法の印を作し呪を誦し、印を以て右転すること三遍七遍せよ。(『大正蔵』 vol.18, p.856a)

と三昧耶の大結界が示され、この結界を儀礼中の如何なる場面で用いるべきかが示されている。それによれば、曼荼羅を建立して、諸尊を奉請した後にこの結界法を行うことが説かれている。このことから、第十二巻では諸尊を奉請した後にこの結界法を導入したと考えられる。また、第十二巻に新たに加わった儀礼の一つである B-7-19.金剛軍荼利讚歎道場成就満願の印も第八巻に見ることが出来る。以下に両巻の同じ箇所を引用すると、

<第十二巻>

次に阿闍梨、一切の仏・般若・菩薩・金剛・天等の当部の法印を作せ。須く呪を誦すべからず。一一に次第に徒衆に顕示して供養を為せ。種種の法事総て周匝し已りて、

次に般若滅罪印を作して、心上に当て著け、口に過現の三業の罪を説きて、一一に具さに陳べて至心に懺悔して、相續を永断ぜよ。座して動搖すること莫れ。諸の弟子等、数数仏を礼すべし。次に阿闍梨、金剛藏軍荼利讚歎道場成就滿願の印を作して、其の神呪を誦せ。呪に曰く。唵薩婆菩駄阿提瑟恥帝頗囉醯迷伽伽那劍娑縵駄莎訶(om sarvabuddha adhiṣṭhite spharahīmaṃ gaganakhaṃ samanta svāhā)。是の如く誦すること七七遍満たし已りて、口に讚の声を出して、頌を説け。曰く。

那謨仏智慧精進　　那羅延力骨鎖身
此是般若波羅蜜　　八万四千法門藏
万行功德之根本　　及陀羅尼普門藏

是の頌を説き已りて各発願して云く。願わくは弟子等、一会の徒衆、一切の蠢動の衆生の類、及び諸の業道、今従り已去、若し人間に在れば、常に大乘甚深の經法陀羅尼藏、十方諸仏の大悲の名号を聞いて、悪事を見ず、悪法を聞かず、外道に遇わず、九横八難八苦に遭わんことを。若し命終の時には、十方の浄土に意に随いて往生し、常に一切諸仏を見んことを。一切衆生も亦復是の如くならんことをと。

(『大正藏』 vol.18, p.892b)

<第八卷>

次に酥蜜飲食等の物を焼いて供養を為せ。若し其れ日に日に香花飲食等の物を供養すべき者有ること無くば、即ち一切供養の印を作して之を供養すべし。其の印は前の般若部に説くが如し。呪に曰く。

唵薩婆菩駄阿提瑟恥帝悉頗囉醯迷伽伽那劍娑縵駄莎訶(om sarvabuddha adhiṣṭhite spharahīmaṃ gaganakhaṃ samanta svāhā)。次に般若印を作して、心上に当て著けて、口に三業所犯の罪を説き、発露懺悔すべし。正座して動くこと莫れ。数数仏を礼すべし。口に讚歎して云く。

諸仏智慧大勇精進　　那羅延力般若波羅蜜多等功德之行

次に発願して云く。願わくは弟子等、若し人中に在れば、常に大乘法及び陀羅尼印等の法藏を聞き、悪事を見ず、悪法を聞かず、外道諸悪人等に遇せず、九横に遭わんことを。若し命終の時ならば、十方浄土に意に随いて往生して、常に諸仏を見んことを。一切の衆生も亦復是の如くならんことをと。

(『大正藏』 vol.18, p.857a)

とあり、両者を比較すると、この儀礼も第八卷から第十二卷に導入されたことがわかる。第十二卷では、先ず諸仏般若菩薩金剛天等を供養し、般若滅罪印を心上に当て口に三業の罪を説き、懺悔をする。次に、礼仏の後に金剛軍荼利讚歎道場成就滿願の印を結び、その真言を誦すのである。そして、讚歎の頌として「那謨仏智慧精進　那羅延力骨鎖身　此是般若波羅蜜　八万四千法門藏　万行功德之根本　及陀羅尼普門藏」¹¹と説き、発願という次第である。第八卷は、先ず供養をなし一切供養の印を結んで、真言を誦す。次に般若の印¹²を心上に当て口に三業の罪を説き懺悔をする。そして、礼仏して「諸仏智慧大勇精進　那羅延力般若波羅蜜多等功德之行」と讚歎し発願という次第である。この両者は次第の順序に若干の違いは見られるが、印や真言や讚歎や発願の内容まで類似しているのである。

このように、第十二卷には第四卷の七日作壇法には見られない儀礼が増広されている。

しかし、その増広された儀礼は三箇所にあつて、『陀羅尼集經』のその他の卷の中に見いだすことができるのである。

第五項 まとめ

第四卷に説かれる灌頂儀礼と第十二卷に説かれる灌頂儀礼は、七日作壇の内容に若干の違いが見られるが、その構成要素である個々の儀礼は非常に近い構造を持っていた。よってこの二つの儀礼は同じ系統のものであると言える。また、第十二卷に関しては、第四卷の儀礼を発展させた形であることが確認できた。しかも、その個々の儀礼で発展されているものの幾つかを、同じ『陀羅尼集經』の他の卷に見いだすことが出来た。このことから、第四卷に説かれる灌頂儀礼を基に、『陀羅尼集經』の他の卷の要素を取り入れながら、普門壇の編纂を試みたものが第十二卷なのではないかと推測される。一方では、第十二卷は十一面觀世音の要素を色濃く残していると言えよう。

第三節 『陀羅尼集經』の普集会曼荼羅

第一項 この節の目的

『陀羅尼集經』第十二卷の七日作壇法が、第四卷の「七日供養壇法」の七日作壇法の枠組みの上に成立していることは上で述べた通りである。第十二卷に説かれる儀礼が第四卷からの発展であるのならば、曼荼羅についても共通する部分が見られるはずである。既にこの曼荼羅は、佐和(1975)によって前十一卷までに説かれる諸尊によって構成されていると指摘されている¹³が、上記の成果を踏まえ、改めてこの曼荼羅の成立について論じていきたい。

第二項 第四卷の曼荼羅

第四卷『十一面觀世音神呪經』の曼荼羅は、十一面觀世音を中尊とする二重の曼荼羅である。先ず十一面觀世音の上方（東方）を見てみると、内院は十一面觀世音の真上に阿弥陀仏、阿弥陀の右側（北方）に釈迦、反対側（南方）に般若波羅蜜が安置される。東方外院は、北方より南方にかけて曼殊室利菩薩・弥勒菩薩・栴檀徳仏・阿閼仏・相徳仏・普賢菩薩・月天・虚空蔵菩薩が配置される。阿弥陀・釈迦・栴檀徳仏・阿閼仏・相徳仏等があることから、この曼荼羅では東方が仏部ということになる。なおここに月天がいるのは、西方の日天との対比によるものと思われる。次に十一面觀世音の右側（北方）を見てみると、内院は中心に大勢至菩薩、大勢至の東方に馬頭觀世音、西方に觀世音母¹⁴が配置される。外院は東方より西方に向かって、摩訶稅多（大白觀世音(Mahāśvetā)）・摩訶室唎曳(Mahāśriye)・随心觀世音・一嗟三跋底伽羅(Icchāsampātika¹⁵)・阿牟伽幡睺（不空罽索(Amoghapāśa)）・苾俱致(Bhṛkuṭi)・毘摩羅末知(Vimalamati)と、觀音系の菩薩が列座して蓮華部を形成している。十一面觀世音の左側（南方）をみてみると、内院は中央に金剛王(Vajjarāja)、その東方に金剛母（摩麼雞(Māmaki)）、西方に跋折羅母瑟知(Vajramuṣṭi)が配置される。外院

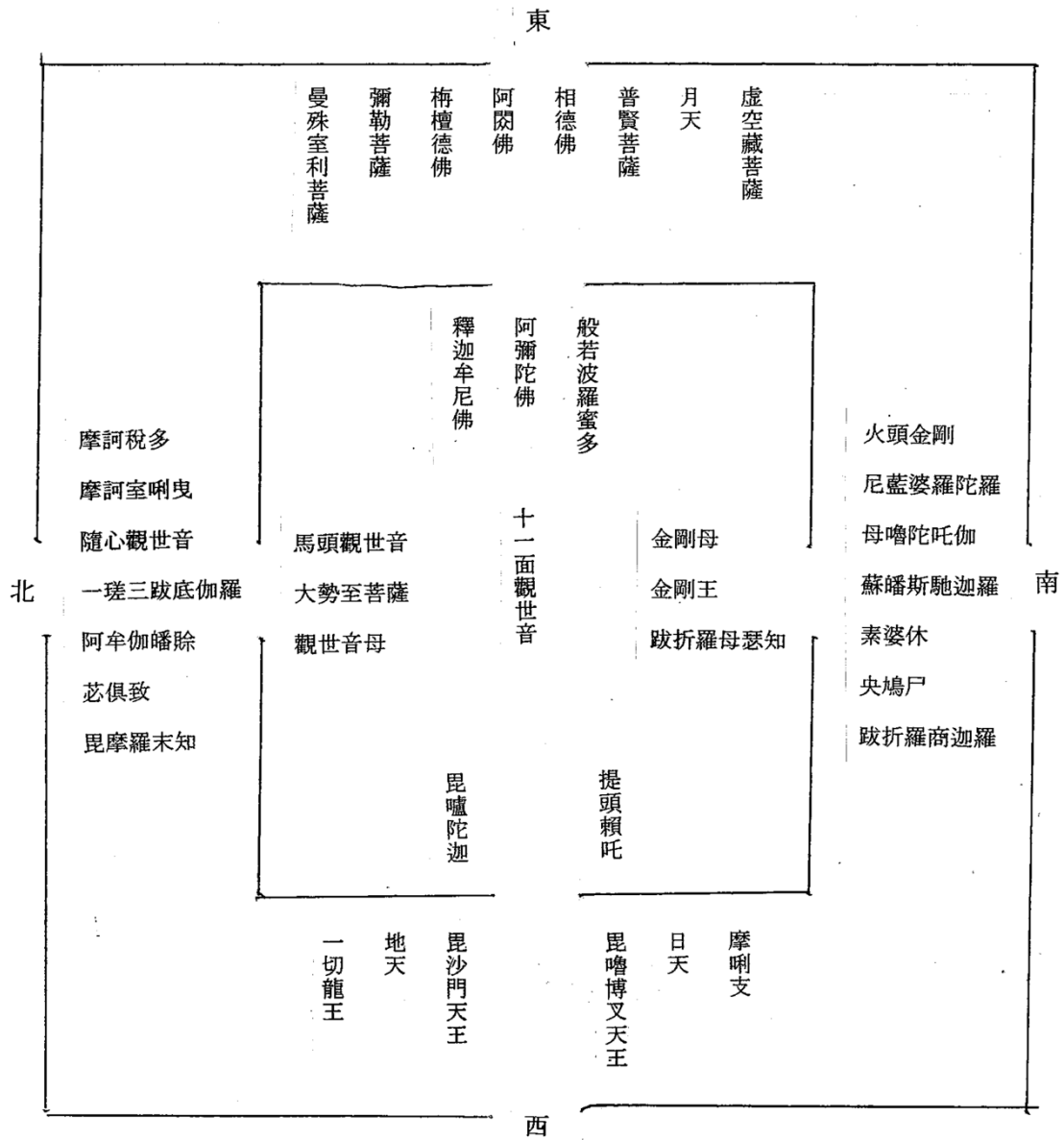
は東方より西方にかけて、火頭金剛（烏摺沙摩(Ucchuṣma)）・尼藍婆羅陀羅（青金剛(Nīlavajradhara)）・母嚕陀吒伽(Mūrdhaṭaka)・蘇幡斯馳迦羅(Susiddhikara¹⁶)・素婆休（金剛兒(Subāhu)）・央鳩尸(Aṅkuśa)・跋折羅商迦羅(Vajraśṛṅkhala)が列座して金剛部を形成している。最後に曼荼羅の西方をみてみると、内院の北方に毘盧陀迦（増長天(Virūdhaka)），南方に提頭賴吒（持国天(Dhṛtarāṣṭra)），外院は北方より南方に一切龍王・地天・毘沙門王・毘嚕博叉天王（広目天(Virūpākṣa)）・日天・摩利支の順に列座している。内院の西門を四天王で囲むようにして守護し、周りにその他の諸天を配置してこの部分は形成されている。そして外院の四隅に二跋折羅が安置される。この曼荼羅は右辺（北方）に観音系の諸尊、左辺に金剛系の尊格を配置し、西方に諸天を集め、東方に仏・菩薩を配置した構造の典型的な三部形式の曼荼羅といえる（図1¹⁷参照）。

第三項 第十二巻の曼荼羅

次に第十二巻の曼荼羅を第四巻の曼荼羅と対比してみると、両方の曼荼羅はおおよそ同じ構造をとるものといえる（図2¹⁸参照）。曼荼羅は三重で、中尊が帝殊羅施(TeJORāśi)か行者の任意の尊格と説かれている。内院は東方の中央に般若波羅蜜多，その北方に釈迦牟尼仏，南方に一切仏頂仏が並ぶ。内院の北方は中央に大勢至菩薩，その東方に観世音菩薩，西方に観世音母が並ぶ。内院の南方は中央に金剛羅闍(Vajrarāja)，その東方に摩麼雞(Māmakī)，西方に摩帝那の三尊が並ぶ。内院の残りは，西方の門の北方に弥勒菩薩，南方に普賢菩薩の二尊が配置され，四隅は北東・南東・南西・北西の順に阿舍尼・跋折羅蘇幡悉地迦羅(vajrasusiddhikara)・跋折羅健荼(Vajradanḍa)・火神が安置される。二重の東方は，中央に阿弥陀仏，その北方に阿閼佛・栴檀徳仏・十方一切仏・曼殊室利菩薩，阿弥陀の南方に相徳仏・虚空蔵菩薩・烏瑟尼沙(Uṣṇīṣa)・十方一切仏頂が並ぶ。二重の北方は，中央に随心観世音，その東方に一嗟三跋底伽(Icchāsampātika)・不空罽索・馬頭観世音・地藏菩薩・陀羅尼蔵，西方に摩訶室唎曳(Mahāśriye)・六臂観世音・毘俱知観世音(Bhṛkuṭi)が並ぶ。二重南方は中央に蘇摩訶(Subāhu)，その東方に跋折囉央俱施(Vajrāṅkuśa)・跋折囉母瑟知(Vajramuṣṭi)・跋折囉吒訶娑・烏摺沙摩(Ucchuṣma)，その西方に跋折囉商迦羅(Vajraśṛṅkhala)・迦儼俱嚕陀(Kaṅikrodha)・随心金剛・跋折囉阿蜜哩多軍荼利が並ぶ。二重の西方は，門の中央を避け門の北方に摩醯首羅(Maheśvara)・母鬱陀吒佉・毘梨訶唎知¹⁹が並び，南方に烏摩地毘摩(Umā)・尼藍跋羅・一切天が配置される。そして，北東に婆翕毘伽，南東に母鬱陀吒佉，南西に迦尼俱嚕陀(Kaṅikrodha)，北西に跋折囉室哩尼が安置されている。最外院には，一周にわたり諸天が安置される。この構造は第四巻に非常に近い構造をもっており，東方に仏部，北方に蓮華部，南方に金剛部，西方に諸天を配する三部形式の曼荼羅といえる。

図1

『陀羅尼集經』第4卷「七日供養壇法」の曼荼羅



第四項 両巻に共通して見られる尊格について

ここで、二つの曼荼羅に共通する内院と二重の尊格をみてみたい。第四巻の曼荼羅を構成する尊格と第十二巻の曼荼羅を構成する尊格を対照すると以下の如くである。

	第四巻	第十二巻	備考
中尊	十一面観世音	帝殊羅施	
内院 東面	釈迦仏牟尼仏 般若波羅蜜多 阿弥陀仏	釈迦牟尼仏 般若波羅蜜多 一切仏心仏	阿弥陀に変わり一切仏心 仏が配置される。
二重 東面	曼殊室利菩薩 梅檀徳仏 阿闍仏 相徳仏 虚空蔵菩薩 弥勒菩薩 普賢菩薩 月天	曼殊室利菩薩 梅檀徳仏 阿闍仏 相徳仏 虚空蔵菩薩 十方一切仏 阿弥陀仏 烏瑟尼沙 十方一切仏頂	弥勒・普賢・月天が移動し て、阿弥陀と仏頂系の尊格 が配置される。
内院 北面	馬頭観世音 大勢至菩薩 観世音母	観世音菩薩 大勢至菩薩 観世音母	馬頭に変わり観世音が配 置される。
二重 北面	摩訶税多（大白観世音） 摩訶室唎曳 随心観世音 一嗟三跋底伽羅 阿牟伽幡睪（不空罽索） 苾俱致 毘摩羅末知	陀羅尼蔵 摩訶室唎耶 随心観世音 一嗟三跋底伽 不空罽索 毘俱知観世音菩薩 地藏菩薩 馬頭観世音 六臂観世音	第四巻に近い構造を持ち、 新たに地藏・馬頭・六臂観 世音・陀羅尼蔵が配置され る。
内院 南面	金剛母 金剛王 跋折羅母瑟知	摩麼雞（金剛母） 金剛囉闍（金剛王） 摩帝那	跋折羅母瑟知に変わり摩 帝那が配置される。
二重 南面	火頭金剛（烏摺沙摩） 尼藍婆羅陀羅 母嚕陀吒伽 蘇幡斯馳迦羅 素婆休 央鳩尸	烏摺沙摩 跋折囉吒訶娑 母嚕陀吒伽 跋折囉蘇幡悉地迦囉 蘇摩訶 跋折囉央俱施	第四巻に近い構造を持ち、 新たに跋折羅母瑟知・迦爾 俱嚕陀・随心金剛・跋折囉 阿蜜哩多軍荼利が配置さ れる。

	跋折羅商迦羅	跋折囉商迦羅 跋折囉母瑟知 迦爾俱嚧陀 隨心金剛 跋折囉阿蜜哩多軍荼利	
--	--------	---	--

網掛けの部分が、両巻に共通して見られる尊格である。このように多くの一致が見られる。なお、第四巻の曼荼羅に配置される月天・摩利支天・日天・地天は、第十二巻の曼荼羅でも第四巻の曼荼羅と等しい位置のまま外院に配される。

第五項 第十二巻になり新たに参入した尊格

次に、新たに参入した尊格と、その尊格が『陀羅尼集経』の前十一巻の中に説かれていることを確認する。第四巻の曼荼羅に配置されず、第十二巻になって参入した尊格とその典拠は以下の如くである。

帝殊羅施

尊格が説かれる箇所	巻	大正蔵	備考
帝殊羅施金輪仏頂心法印呪第十四	1	790a	
金剛地印法	1	794b	曼荼羅の中尊として

一切仏心仏

一切仏心印呪第六	2	796c	
一切仏心印呪第七	2	797a	

十方一切仏頂

菩薩善陀烏瑟膩沙印呪第一	2	796a	
--------------	---	------	--

觀世音菩薩

仏頂法	1	785c	仏頂・觀音・金剛蔵の三尊を建立する
金剛地印法	1	794a	多くの觀音が説かれる
阿弥陀座禪印第四	2	801b	阿弥陀・觀音・大勢至を請喚
觀世音護身印第七～	4	817b	以下第四巻の印呪の多くは觀音系。但しここでの觀音は十一面の可能性がある。
～觀世音君馳印呪第四十五	4	823c	
千轉觀世音菩薩心印呪第一	5	825c	
持一切觀世音菩薩三昧印呪第五	5	827a	
画觀世音菩薩像法	5	828a	觀世音菩薩の書き方
文殊菩薩法印呪第三	6	839a	文殊・普賢・觀音が画かれる

地藏菩薩

金剛地印法	1	794b	曼荼羅の一尊として
-------	---	------	-----------

地藏菩薩法身印呪第六	6	839c	
地藏菩薩印第七	6	839c	
摩帝那			
跋折囉母瑟羝法印呪第二十二	7	845b	この印呪, 金剛兒法・使者法・摩帝那法という
跋折囉吒訶婆			
跋折囉吒訶婆身印呪第一	8	859a	跋折囉吒訶婆印呪法として
跋折囉吒訶婆大呪第五	8	859a	跋折囉吒訶婆印呪法として
迦爾俱嚧陀			
仏説金剛藏大威神力三昧法印呪品第一	7	841a	金剛藏菩薩の十四眷属 跋折囉迦尼矩嚧駄として
随心金剛			
金剛地印法	1	794a	曼荼羅の一尊として
金剛随心身法印呪第四十一～	7	849b	
金剛随心療一切難伏鬼大法身印第四十八	7	850b	
金剛随心大瞋法身印第五十	7	850b	
金剛随心大惡都身印第五十二	7	850c	
金剛阿蜜哩多軍荼利			
金剛地印法	1	794a	
甘露軍荼利辟除尾那夜迦法印真言	3	810a	
金剛藏軍荼利菩薩自在神力法印呪品	8	852b	
軍荼利香鑪法印呪第一～	8	852b	
軍荼利使者法印呪第二十七	8	856b	
軍荼利金剛受法壇	8	856b	
軍荼利金剛救病法壇	8	857c	

以上が内院と二重に配置される尊格の中で、第十二巻の曼荼羅になることによって参入した尊格であるが、その多くを『陀羅尼集經』前十一巻に求めることが出来る。

第六項 尊格の移動

次に、第四巻の曼荼羅から第十二巻の曼荼羅に至って移動した尊格を確認していきたい。
<中尊>

先ず中尊は十一面觀世音から帝首羅施に変化した。第十二巻では中尊に関して以下のよう

帝殊羅施を以て之を座主と為せ。中心に当たりて大蓮花座を敷け。座の主は即ち是れ釈迦如来の頂上の化仏なり。仏頂仏と号す。如し其れ仏頂を以て主と為さざれば、意の念ずる所の諸仏菩薩に随いて、位を替うることも亦得。其の座主を除きて以外の諸仏及び菩薩等は、皆本位に在りて供養を受く。諸仏般若及び十一面等の菩薩の相替るに非らざるより余は、皆得ずして都会法壇の主を作せ。(『大正蔵』 vol.18, p.888b)

このように、釈迦仏頂たる帝殊羅施を曼荼羅の中尊とすることを説く。多くの曼荼羅は中尊が決まっています、その尊格に合わせて諸尊の配置があるように思われるが、第十二巻の曼荼羅は帝殊羅施以外にも行者の随意の仏菩薩を中尊に変えることが出来るとも説かれている。恐らく、多くの仏菩薩やその儀礼が成立して来た中で、あらゆる場面に対応出来る教科書的な役割をこの『陀羅尼集経』に負わせようとしたのであろう。また、帝殊羅施以外の仏菩薩を中尊とする場合の例として十一面観世音の名を出している。これは、第四巻の曼荼羅の中尊が十一面観世音であったためであると考えられる。

<内院>

内院東面は、第四巻は釈迦牟尼・阿弥陀・般若波羅蜜多、第十二巻は釈迦牟尼・般若波羅蜜多・一切仏心仏頂である。第十二巻では阿弥陀が二重の東方の中尊に移動したために、般若波羅蜜多が中心になり、般若波羅蜜多がいた処に一切仏心仏が参入する。このことにより、第十二巻の曼荼羅では、東方に『陀羅尼集経』第一巻(『大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品』)・第二巻(『阿弥陀仏大思惟経説序分第一』)・第三巻(『般若波羅蜜多大心経』)を代表する尊格が中心に列をなすことになる。なお、両曼荼羅とも阿弥陀が東方に画かれることになるが、それはこの曼荼羅の場合は東方が仏部、北方が蓮華部、南方が金剛部、西方に諸天、と明確に方角に合わせて諸尊の配置が決まっているためである。

このことは阿弥陀に限ったことではない。本論では第十二巻の灌頂儀礼の中に説かれる十二肘壇の曼荼羅を取り上げているが、第十二巻には巻末にもう一つ、十六肘壇の曼荼羅が説かれる。この曼荼羅は十二肘壇が更に増広されたもので、微妙声仏頂・阿弥陀仏頂・阿閼仏頂・宝相仏頂の四方四仏が曼荼羅の中に配置される最初期のものである。これらの四方四仏は『陀羅尼集経』第十巻「功德天法」一卷に、

亦応に、東方阿閼如来、南方宝相如来、西方無量寿仏、北方微妙声仏に礼敬すべし。
(『大正蔵』 vol.18, p.876b)

とその名を確認することが出来る。そして、これらの四方四仏も十六肘壇の曼荼羅では東方第二重に一例に配置される。²⁰このことから、田中公明氏も指摘しているように『陀羅尼集経』の曼荼羅では仏の浄土の方角に関係なく仏部の諸尊を東面に配置したものと考えられる。

内院北面の尊格は、第四巻では観世音母・大勢至・馬頭観世音、第十二巻は観世音母・大勢至・観世音菩薩と、馬頭観世音が二重に移動し、そこが観世音菩薩に変わる。内院南面も同様に、第四巻では金剛母・金剛王・跋折囉母瑟知、第十二巻は摩麼雞(金剛母)・金剛羅闍(金剛王)・摩帝那と、跋折囉母瑟知が摩帝那に変わる。

内院西面は、第四巻では内院の西門を囲むように提頭頼吒(持国天)・毘嚧陀迦(増長

天)・毘嚕博叉天王(広目天)・毘沙門天王(多聞天)が配置されていた。この四天王は『陀羅尼集経』第十一巻にそれぞれ、「東方提頭頼吒天王法印呪第五」・「南方毘嚕陀迦天王法印呪第六」・「西方毘嚕博叉天王法印呪第七」・「北方毘沙門天王法印呪第八」として説かれ、第十二巻の曼荼羅にいたって最外院において各尊の守護すべき方角に配置された。その移動により、第四巻では二重の東面で梅檀徳仏・阿閼仏・相徳仏の諸仏の両脇にいた弥勒菩薩と普賢菩薩が内院西面の門の両脇に配置された。

<二重>

次に二重では、東面を第四巻と比べると真ん中に阿弥陀仏が配置され、仏の両脇にいた弥勒と普賢と月天が移動した。月天の移動は、諸天が最外院に配置されたためであろう。第十二巻の曼荼羅で新たに出来た最外院に移動したが、位置は第四巻の時と同じといえる。それにより、十方一切仏・烏瑟尼沙・十方一切仏頂が配置される。曼殊室利菩薩と虚空蔵菩薩は第四巻と同様の位置にいる。北面は、第四巻にいた摩訶税多と毘摩羅末知がいなくなり、馬頭観世音と六臂観世音が配置される。その上(東方)に第四・五・六巻に説かれる菩薩の中で曼荼羅に配置されていなかった地藏菩薩と陀羅尼蔵が参入する。南面は、第四巻にいた母嚕陀吒伽は二重の東南の角に、蘇幡斯馳迦羅は内院の東南の角へ移動し、火頭金剛(烏枢沙摩)・央鳩尸(跋折羅央俱施)・跋折羅商迦羅はそのままに、第七・八・九巻に説かれる尊格達が新たに配置される。

この箇所注目される尊格に跋折囉蘇幡悉地迦囉と蘇摩訶がいる。この二菩薩は『蘇悉地羯羅経』²¹の蘇悉地羯羅菩薩と『蘇婆呼童子請問経』²²の蘇婆呼童子を連想させる。第四巻の曼荼羅では蘇幡斯馳迦羅・素婆休として、第七巻『仏説金剛蔵大威神力三昧法印呪品』第一では金剛蔵菩薩の十四眷属としてその名を見いだすことが出来る。そのため、『陀羅尼集経』成立時には両経が成立していて、それをもとに『陀羅尼集経』が編纂された可能性が指摘出来よう。このことは、田中(2010)において、『陀羅尼集経』のこの二尊について、『蘇悉地羯羅経』と『蘇婆呼童子請問経』は『陀羅尼集経』より遅れて訳されたが、『陀羅尼集経』訳出時には成立していたであろうと述べられている。²³

次に二重西面の尊格は、第十二巻になり新たに配置された尊格である。門の両脇に摩醯首羅と烏摩地毘摩が配置されている。摩醯首羅は第十一巻に「摩醯首羅天法印第二」として説かれ、第十二巻の曼荼羅形成にあたり参入したのであろう。烏摩地毘摩を『陀羅尼集経』の中に確認することは出来なかったが、摩醯首羅と烏摩妃の関係によるものと思われる。摩醯首羅は第四巻「十果報印呪第十三」(『大正蔵』vol.18, p.819a)や第十一巻「摩醯首羅天法印呪第三」(『大正蔵』vol18, p.878a)に見られ、「十果報印呪第十三」は十一面観世音を中尊として、東方に阿弥陀、北方に大勢至、南方に馬頭観世音、西方に摩醯首羅を配置する曼荼羅を説く。この曼荼羅の影響により第十二巻の曼荼羅で摩醯首羅が二重の西方の中心的な尊格になったのかは不明であるが、少なくとも『陀羅尼集経』の中に摩醯首羅を西方に配置する曼荼羅が、第四巻にも説かれていることは注意すべきである。

<外院>

最外院は第十二巻の曼荼羅になり、大きく変化した特徴の一つである。『蕤呬耶経』などでは、曼荼羅の規定として、内院に主要尊格、二重にそれに次ぐ尊格、三重に護方の諸天

を画くことが規定される。しかし、ここに配置される多くの尊格は第十一巻に説かれるもので、その数は一面に十尊の計四十尊である。四天王を除けば第四巻にいた諸天はその位置のまま最外院に移動した。諸天の配置では、東面より南西北にかけて十二天が見られる。

・ 帝釈天	東	帝釈天法印呪第二
・ 火天	東南	火天法印呪第十六
・ 琰摩壇荼	南	閻魔壇陀呼召印呪法第三十四
・ 囉刹娑王	西南	一切囉刹法印呪第五十三
・ (水天)	西	水天呼召印呪第三十五
・ 風天	西北	風天法印呪第三十七
・ 毘沙門王	北	北方毘沙門天王法印呪第八
・ 伊沙那鬼王	東北	記述なし
・ 跋摩天	天	大梵摩天法印呪第一
・ 地天	地	地天法印呪第十五
・ 日天	日	日天法印呪第十一
・ 月天	月	月天法印呪第十三

しかし、水天は配置されない。第十一巻に「水天呼召印呪第三十五」と説かれていながら曼荼羅に見られないのは、西面には画くべき尊格が集中しているためであろう。第四巻から摩利支天と日天と地天を継承し、一切龍王を分けて二龍王で西門を護り、四天王の中で西方を守護する毘樓博叉を配置し、北西の守護天である風天を配置している。それに比べて東面には帝釈天と月天、北面には伊沙那鬼王と毘沙門王、南面には火天と琰摩壇荼と囉刹娑王、そして各方角を守護する四天王と数が少なく感じる。そのためか、尊格の数の増える十六肘壇では水天を確認することが出来る。

第七項 外院に配置された諸天について

次に、第十二巻の曼荼羅の最外院に新たに配置された諸天についてみていきたい。多くの諸天が以下の表の如く『陀羅尼集経』前十一巻に見ることが出来る。

毘那夜迦

一切毘那夜迦法印呪第四十九	11	884c	他にも毘那夜迦は多く登場する。
毘那夜迦呪法第五十	11	884c	
調和毘那夜迦法印呪第五十一	11	885a	

首陀会天

仏頂法	1	786a	仏頂尊作像の中で画かれる
文殊師利菩薩法印呪第三	6	839a	文殊菩薩作像の中で画かれる

帝釈天

金剛地印法	1	794b	
画大般若像法	3	850b	般若菩薩の左側に画かれる
般若壇法	3	808a	般若壇の南方に安置される
功德天像法	10	876a	功德天の右側に画かれる

諸天等獻仏助成三昧法印呪品	11	877b	
帝釈天法印呪第二	11	877c	
星天			
諸天等獻仏助成三昧法印呪品	11	877b	眷属として
星宿天法印呪第十四	11	879b	
火天			
諸天等獻仏助成三昧法印呪品	11	877b	
火天法印呪第十六	11	879c	
火天子助呪師天験印第十七	11	880a	
那羅延			
那羅延天身印呪第二十三	11	880c	
那羅延天無辺力印第二十四	11	881a	
琰摩檀荼			
焰摩檀陀呼召印呪法第三十四	11	881c	
緊那羅			
大神力陀羅尼經仏頂三昧陀羅尼品一	1	785b	対告衆として
阿弥陀仏大思惟經説序分第一	2	800a	対告衆として
緊那羅身印呪第二十六	11	881a	
毘舍遮王			
觀世音甘露印呪第十	4	818b	この印呪によって毘舍遮の所作による病が治る
羅刹沙王			
十一面觀世音神呪經	4	813a	
喚羅刹身印第四	9	868a	
一切羅刹法印呪第五十三	11	885b	
閻羅王			
閻羅王法身印呪第十八	11	880a	
阿素囉			
大神力陀羅尼經仏頂三昧陀羅尼品一	1	785b	対告衆として
阿弥陀仏大思惟經説序分第一	2	800a	対告衆として
阿修羅王法印呪第三十八	11	882a	
難陀龍王			
馬頭觀世音菩薩受法壇	6	838a	壇の南方に画かれる
憂婆難陀龍王			
一切龍王法身印呪第十九	11	880a	優婆難陀龍王印として
乾闥婆			

乾闥婆身印呪第二十五	11	881a	
風天			
風天法印呪第三十七	11	882a	
俱毘囉葉叉			
一切葉叉法印呪第五十二	11	885a	この真言，唵俱毘囉莎訶
遮文荼			
遮文荼法印呪第三十九	11	882a	遮文荼功能として以下印四十八まで
遮文荼印呪移腫法第四十八	11	884b	

この中には『陀羅尼集經』の中にその名称を見いだすことの出来なかった尊格もある。推測の域を脱しないが、恐らく尊格の数の問題であると思われる。最外院は一面十尊，四面で四十尊となるが、それほどの数の尊格の儀礼が整っていなかったことが考えられる。最外院の東面の門に帝釈天と帝釈天弟子の二尊が配されることや、最外院南面の門の西側に琰摩檀荼と琰摩檀荼弟子が並ぶこと、また二重の西面の門の両脇に摩醯首羅と烏摩地毘摩が配置されることは、帝釈天・琰摩檀荼・摩醯首羅が『陀羅尼集經』に説かれる中、足りない尊格の数を上手く補充した例といえる。このように第十二巻になり多くの諸天が、前十一巻より最外院に配置されたといえる。

第八項 『陀羅尼集經』の構成と曼荼羅の配置

これまで見てきたように、第十二巻の曼荼羅は、第四巻の曼荼羅を基に、更に各巻の尊格を補充した曼荼羅であった。『陀羅尼集經』に説かれる多くの曼荼羅も同様に、中心に仏、北方に蓮、南方に金、周りに諸天を配置する仏・蓮・金の三部形式である。しかし、『陀羅尼集經』全体に目を向けると、この經典が三部だけでなく五つのグループを意識していると思われる箇所が度々見受けられる。

(第一巻)

「仏頂三昧曼荼羅法」

手に香鑪を執りて是の言を作せ。我れ某甲，十方一切の仏・一切の般若波羅蜜・一切の觀世音菩薩・一切の菩薩・一切の金剛藏菩薩・天龍八部・護塔護法の諸善神等を供養せん。
(『大正藏』vol.18, p.787b)

「大三昧勅語結界印呪第八」

供養し已竟りて、仏に従いて薬を請す。之を服すること三度、日別に一度せよ。及び頂面身心の上に灑散し内外を清浄にせば、障難病苦皆な悉く消滅す。次に和南を作して至心に一切諸仏・般若波羅蜜・菩薩・金剛・一切賢聖に頂礼せよ。行者起立し礼拝の印を作せ。
(『大正藏』vol.18, p.789a)

「那謨悉羯囉印呪第九」

誦すること三遍し已りて頂礼すること一礼、是の如く三度せよ。是の如く礼拝せば、

一切の仏・般若・菩薩・金剛・賢聖を礼し、一切の十悪・五逆・四重等の罪を滅除し、一切の障難皆な悉く消滅せん。(『大正蔵』 vol.18, p.789a)

「一字仏頂法呪第三十二」

当さに知るべし。行者、一切の罪障皆な悉く消滅し、三昧陀羅尼力を得ん。以後即ち五色の壇法を設け、灯・食・香・華の種種の供養を一に前法に准ぜば、或いは仏・般若・菩薩・金剛・天等、行者の為に身を現じ其の見る時に随いて種種に乞願せよ。(『大正蔵』 vol.18, p.793a)

(第二卷)

「仏説作数珠法相品」

是の珠を作り已りて、此の壇中に於て更に種種の香水を以て珠を洒せ。又た、七盤の食を著き三七の灯を然し、仏・般若・菩薩・金剛及び諸天等を請し、仰啓し供養せよ。三宝の威神力を称讃するが故に、種種の法事皆な効験あり。(『大正蔵』 vol.18, p.803b)

「作跋折囉并功德法」

結界法事をし、道場の中に当たりて一水壇を作り、仏・般若・諸大菩薩・金剛・天等を請すべし。又た舍利一二七粒を請し、其の壇中に置け。(『大正蔵』 vol.18, p.804a)

(第三卷)

「般若壇法」

道場の残食、持明師及び受法人皆な喫することを得ず。若し喫すれば持明師及び受法人は並んで成就を失せん。其の嚙施錢、仏錢は作仏用に入れ、其の般若錢は写経用に入れ、菩薩錢は作菩薩用に、金剛・諸天錢は金剛・諸天処用に入るべし。(『大正蔵』 vol.18, p.808b)

「結虚空界法印真言」

道場を莊嚴し、種種の香花灯明飲食を悉く行列し竟りて、次に当に焼香すべし。若し仏を請せんと欲さば、仏印を作して請すべし。次に般若を請するに般若を作すべし。次に觀自在菩薩を請するに觀自在印を作すべし。次に金剛及び諸天等を請するも亦しかなり。(『大正蔵』 vol.18, p.811a)

(第四卷)

「七日供養壇法」

次に阿闍梨、手をもって香鑪・水等を印し、呪し已り、手に香鑪を執り、胡跪し焼香す。一切の諸仏・般若・菩薩・金剛・天等、及よび一切の業道冥祇に啓白す。今、此の地は是れ我れの地なり。我れ今七日七夜、都大道場法壇の会を立てんと欲す。一切の十方法界の諸仏世尊、及び般若波羅蜜多・諸菩薩衆・金剛・天等に供養し、諸もろの徒衆を領す。(『大正蔵』 vol.18, p.813c)

「華座印呪第六」

若し諸仏・般若・菩薩・金剛・天等を請ずんば、一一皆な此の大華座印呪を用いて以て承迎せよ。(『大正蔵』vol.18, p.817b)

(第八卷)

「金剛阿蜜哩多軍荼利菩薩自在神力呪印品」

若し復た人ありて、諸仏・般若・菩薩・金剛・天等の呪法印等を誦持し、日々に供養し、広く懺悔を為し、及び一切衆生の厄難を救護せんと欲するの時、汝等、鬼神の護助力をもって悩乱を得ず。(『大正蔵』vol.18, p.851c)

「軍荼利護身法」

凡そ人、金剛の法事を作さんと欲わば、先ず香鑪を印して焼香し已竟りて、手に香鑪を把り、十方一切の仏・般若・菩薩・金剛・冥聖・諸天・業道に啓告こと、一に上法の如し。(『大正蔵』vol.18, p.852c)

「軍荼利結虚空界法印呪第八」

第七に、諸仏・般若・菩薩・金剛・天等を請せんと欲わば、未だ請する以前に復た一遍の結界辟除を作せ。結界の中間に一一皆な大身法印を結ぶべし。跋折囉を把り護持して、大魔衆を降伏し已りて、次第に一一の身法を作せ。次に右手を以て香鑪を把り、右繞すること三匝して結護界を作せ。(『大正蔵』vol.18, p.853b)

(第九卷)

「烏枢沙摩呪法功能」

若し苾芻、優婆塞等ありて、意に烏枢沙摩金剛呪を受持せんと欲さば、当に水壇を作すべし。毎日平旦に諸の香華を以て、発心して十方の諸仏・般若・菩薩・金剛・天等を供養すべし。(『大正蔵』vol.18, p.866a)

(第十一卷)

「北方毘沙門天王法印呪第八」

是の四天王法印呪等、若し諸々の人輩、諸仏・般若・菩薩・金剛・天等の法呪を受持するの時、因に都会道場法壇の所を供養し、並びに此の印を作して呪を誦し天を喚し安置し供養することあらば、即ち一切の人等歡喜を得ん。(『大正蔵』vol.18, p.878c)

(第十二卷)

「仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品」

阿闍梨は手に香鑪及び浄水等を印し、馬頭印を用いて其の浄水を印し、呪すること三七遍せよ。而して香鑪を把り、胡跪して香を焼き、一切諸仏・般若・菩薩・金剛・天等及び一切の冥聖業道に仰ぎ啓す。今此の地は、是れ我の地なり。我れ今七日七夜の

都大道場法壇の会を立てて、一切十方世界の恒沙の仏等、一切の般若波羅蜜多、一切の大地の諸菩薩衆・金剛・天等を供養せんと欲う。仰ぎ請うらくは諸仏、諸の徒衆を領して、一切の秘密法蔵不可思議の大法門を決定したもうが故に、諸の證成を取りたまえ。我今、護身結界供養の法事を作せんと欲う。此の院内に在る東西南北四維上下、所有一切の悪神鬼等、皆我が結界の所七里の外に出去れ。若し善神鬼にして我が仏法の中に利益の有らん者は、意に随いて住せよと。 (『大正蔵』 vol.18, p.886a)

「仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品」

日没の後に至りて、阿闍梨は道場の中に入りて、仏・般若・菩薩・金剛及び諸天等を請し、壇に入れて安置すべし。仏の座は中心にして、觀世音等は北方に於て座せしめ、金剛蔵等は南方に於て座せしめよ。 (『大正蔵』 vol.18, p.887c)

「仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品」

次に阿闍梨、道場の内に入りて仏・菩薩・金剛等に啓して云く。是の諸の弟子、壇に入らんと欲して来たり。各各に証を取りたまえ。我れ弟子某甲の与めに法用を作して、総て遍く問い竟りぬ。諸の弟子等、明日壇に来入して供養せんと欲う。願わくは仏・般若・菩薩・金剛及び諸天等、今夜大悲をもって境界あらしめたまえ。徒衆の弟子某甲、明日普く一切の三宝及び諸の眷属を請して、広く供養を為さん。願わくは大慈悲、明日皆赴きて諸供養を受けて法事を証明したまえと。 (『大正蔵』 vol.18, p.888a)

以上の様に、『陀羅尼集經』は全体に渡って5つのグループを意識し、『陀羅尼集經』全十二巻の構成も以下の表の如く第一・二巻が仏部、第三巻が般若部、第四・五・六巻が菩薩(蓮華)、第七・八・九巻が金剛、第十・十一巻が諸天、と分類されている。²⁴

陀羅尼集經第一	大神力陀羅尼經釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於卷第一(仏部卷上)
仏説陀羅尼集經卷第二 (仏部卷下)	阿弥陀仏大思惟經説序分第一・仏説作数珠法相品・仏説跋折囉功能相品
仏説陀羅尼集經卷第三	般若波羅蜜多大心經
仏説陀羅尼集經卷第四 (觀世音卷上)	十一面觀世音神呪經
仏説陀羅尼集經卷第五 (觀世音卷中)	毘俱知菩薩降魔印呪法品・毘俱知菩薩使者法印品・毘俱知菩薩救病法壇品
仏説陀羅尼集經卷第六 (觀世音等諸菩薩卷下)	何耶揭唎婆觀世音菩薩法印呪品・諸大菩薩法会印呪品
仏説陀羅尼集經卷第七 (金剛部卷上)	仏説金剛蔵大威神力三昧法印呪品第一・金剛蔵眷属法印呪品第二
仏説陀羅尼集經卷第八 (金剛部中巻)	金剛阿蜜哩多軍荼利菩薩自在神力呪印品・金剛蔵軍荼利菩薩自在神力法印呪品
仏説陀羅尼集經卷第九	金剛烏枢沙摩法印呪品・烏枢沙摩金剛法印呪品一卷

(金剛部卷下)	
仏説陀羅尼集經卷第十 (諸天卷上)	仏説摩利支天經一卷・功德天法一卷
仏説陀羅尼集經卷第十一 (諸天卷下)	諸天獻仏助成三昧法印呪品
仏説陀羅尼集經卷第十二	仏説諸仏大陀羅尼都會道場印品

そして、この『陀羅尼集經』の構成は第十二卷の曼荼羅にも当てはめられる。すなわち、中尊の帝殊羅施を第一卷より、その上(東方)の般若波羅蜜を第三卷より、その上(東方)の第二重の中心に第二卷の阿弥陀仏、中尊の右辺(北方)に第四～六卷に説かれる蓮華部の諸尊、中尊の左辺(南方)に第七～九卷に説かれる金剛部の諸尊、西方及び最外院に第十・十一卷に説かれる諸天を配置し、五つのグループと『陀羅尼集經』全体の構成を考慮した構造であるといえる。

第九項 まとめ

『陀羅尼集經』には七日作壇法による灌頂儀礼が第四卷と第十二卷に説かれる。この二つの儀礼が同じ系統のものであることから曼荼羅についても考察したわけである。第四卷の曼荼羅は十一面觀世音を中尊とする二重の曼荼羅であった。この曼荼羅は東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部を配し西方に諸天を並べる三部形式の曼荼羅である。第十二卷は都會壇であり、帝殊羅施か行者の任意の仏菩薩を中尊とする。曼荼羅は二重から三重に増広されたが、多くの尊格の一致が見られた。これは、第四卷の曼荼羅から第十二卷の曼荼羅へと発展したものであり、尊格の一致は第四卷の名残であるといえよう。また、第十二卷の曼荼羅になることで新たに参入した尊格の多くが『陀羅尼集經』前十一卷の中より確認することが出来た。このことから、様々な儀礼や曼荼羅をもとに新たに仏頂尊たる帝殊羅施を中尊とし、あらゆる儀礼や尊格を配置した教科書的な經典がこの『陀羅尼集經』であったと考えられる。さらに、曼荼羅の配置や『陀羅尼集經』全体の構成も考慮すれば、推測の域を脱しないが、多くの尊格を五つのグループに分類し、それを普集會壇にまとめる過程の中で第十二卷が編纂されたと見る事が出来る。

第四節 『陀羅尼集經』の灌頂儀礼の特徴

第一項 初日の儀礼について

この節では、『陀羅尼集經』第十二卷に説かれる灌頂儀礼を取り上げ、その特徴と意義について検討していきたい。まず初めは、七日作壇法初日の儀礼である。その内容は第二節の「用例1. 初日の儀礼」である。上記の表ではB-1-1からB-1-5に相当する。

さて、この初日の儀礼から読み取れることは、この灌頂儀礼が、弟子の入門儀礼として行われるということである。七日作壇法の初日に、弟子に対して「汝等、必ず能く決定して我が諸仏等の説きたまえる秘密法蔵を受けん。疑惑を生ぜざるや不や」と、「秘密の法

蔵」を学ぶことの確認、及びそれに対して疑惑を生じることがないかの確認が行われることは、『蕤呬耶經』などには見られない。注目すべきは、次の阿闍梨がこの地において曼荼羅を画くことを宣言する所作である。この作法は、『大日經』の儀礼では「驚発地神」に相当すると考えられる。しかし、『陀羅尼集經』の段階では、地神ではなく、その地にいる鬼神に対して、善鬼神にして利益をもたらすならばこの地にいてもいいが、そうでなければ出て行くことを強要していると理解される。どちらかという、結界を行う前に障害となる者などを取り除く儀礼の一つといえる。ただ、曼荼羅建立に際して、地神などに言葉を語る儀礼が見られるのは、『大日經』の他に『蕤呬耶經』の漢訳と、『金剛手灌頂タントラ』があるが、どちらの經典も語る内容は不明である。よって、『陀羅尼集經』の儀礼は実際に語りかける内容を知ることのできる貴重な例と言えよう。結界が終われば、その土地の障害物を取り除き、好土によって埋め直し、曼荼羅を画くために土地を平らに整えていく。

第二項 弟子受持について

この弟子を受持する儀礼は、第六日目に行われるもので、上記の次第では、A-6-9 から A-6-18, B6-6 から B6-11 に相当し、その内容は、第二節の「用例 2. 弟子を受持する次第」である。この儀礼は、『蕤呬耶經』の律儀を授与する儀礼や、『大日經』の三世無障礙智戒を授与する儀礼に相当すると考えられる。各所作の構成は『蕤呬耶經』と近い関係にあると言える。では、以下に『蕤呬耶經』と比較しながら『陀羅尼集經』の弟子を受持する次第を見ていくこととする。

『陀羅尼集經』では、最初に弟子を結護するにあたり、護身をしてから東向きに座らせる。次に、白芥子で弟子の頭を打ち、続いて馬頭の呪によって更に弟子の護身を行う。続いて、弟子に秘密法蔵を学ぶ決意を確認する。『陀羅尼集經』における律儀の授与に相当するのはこの一文のみである。經典には説かれていないが、恐らく弟子に秘密法蔵を学ぶ決意の確認を取る時には、初日と同様に疑惑を生じないことの確認も行われていたことが予想される。つまり、本經における弟子を受持する儀礼では、弟子の決意と、これから授かる秘密の法蔵に対して疑惑を抱かないことを誓わせる儀礼であったと思われる。これは、『陀羅尼集經』の灌頂儀礼が、密教参入を果たすための入門儀礼であるという性格を考えると、当然のことと言えよう。『蕤呬耶經』の相当箇所には、三帰と發菩提心の所作があるが、『陀羅尼集經』の段階では、未だ發菩提心などは説かれぬ。

さて、弟子の誓いが終わると、再び結護を行う。その方法は、まず弟子に香水を洒ぎ、続いて弟子の胸の上に手を乗せ馬頭の呪を誦す。弟子はこの後、A-6-3, B-6-1 において予め制作した呪索を腕につける。これが終わると再び弟子に洒水をして、炬火を用いて右邊する所作が説かれる。この所作が如何なる儀礼なのか不明であるが、『蕤呬耶經』と比較すると焼香に相当すると考えられる。

次に齒木の所作に移る。齒木は長さ八指の柳の枝であり、それを弟子に嚙ませてから前方に投げさせる。嚙んだ頭の向いた方角によって弟子の吉凶を占うのである。

齒木の所作が終わると、弟子は金剛杵によって印ぜられた香水を飲むこととなる。香水の作法が終わると、弟子を就寝させることになるのだが、第四巻では、その前に諸仏に対

して啓白が行われる。しかし、第四巻に見られる A-6-13 の啓白は、弟子を就寝させた後の A-6-17 の啓白と同じ時に行うものと見なされる。何故なら、A-6-13 のように啓白後に発遣してしまうと、A-6-17 の啓白の前にもう一度奉請を行うことになるためである。よって、実際は第十二巻のように行われていたことが予想される。一方で、『蕤呬耶經』の次第と比較した場合には、第四巻の A-6-13 の啓白の次第の方が一致することが確認できる。

さて、弟子を就寝させると、阿闍梨は曼荼羅に入り、三度諸仏たちに対して啓白を行う。三度啓白を行うことも『蕤呬耶經』と一致する。

以上が『陀羅尼集經』に見られる弟子を受持する次第である。では次に、この次第を『蕤呬耶經』と比較してみたい。

『陀羅尼集經』	『蕤呬耶經』
護身を行う	弟子白衣を着る
東向きに弟子を座らせる	東向きに弟子を座らせる
弟子を結護する	(漢訳) 弟子を護身する
秘密法蔵を学ぶ誓いを行う	三帰
	發菩提心
香水を洒水	忿怒尊で加持した香水を洒水
	弟子の頭に手を置き念誦
弟子の胸に手を置き馬頭の呪を誦す	弟子の心(漢訳)に手を置き明王念誦
呪索を腕につける	
洒水	洒水
炬火を用いて右邊	焼香
	灌頂に用いる瓶の準備
齒木の所作	齒木の所作
香水を飲ませる	香水を飲ませる
啓白(第四巻)	三度啓白
就寝	就寝
三度啓白	

このように、『陀羅尼集經』の七日作壇法は、既に『蕤呬耶經』にかなり近い構造を具えていると言える。しかし、未だ發菩提心などは見られず、原初的な形を保持している。

また、『陀羅尼集經』の六日目の所作の中で特筆すべき点がこの弟子を受持する次第の後にみられる。それは、曼荼羅作画である。『蕤呬耶經』では、七日目に曼荼羅作画が行われるが、本經では受者が就寝した後に行われる。

そのため、『陀羅尼集經』の曼荼羅作画は、阿闍梨と灌頂の受者が一緒に画くのではない。經典には、以前に入壇を終えている弟子と共に曼荼羅を画くことが指示される。すなわち第十二巻には、

次に阿闍梨、曾て入壇したる弟子二三人等と与もに、一夜中に於いて、五色の粉を以て壇の中に敷置して其の地を莊嚴せよ。(『大正蔵』 vol.18, p.888b)

とあり、また第四卷には曼荼羅を画き終わった後に、「壇内に旧弟子を遣わして、守護して住せしめよ」（『大正蔵』 vol.18, p.815b）とあり、第十二卷の該当箇所は、「曾て入壇したる弟子を留めて守護せしめ、余人をして輒わち道場に入らしむること莫れ」（『大正蔵』 vol.18, p.889b）と説かれている。このことから、弟子は投華得仏の後、覆面を取るまで曼荼羅を見ないことになる。このことは、『陀羅尼集経』の灌頂儀礼が入門儀礼であることを示す例であり、またその特徴であるとも言えよう。

第三項 瓶の準備・加持・配置

次に、灌頂儀礼を構成する要素の中でも、瓶水灌頂と直結する、瓶の準備について確認していきたい。これは、B-7-3とB-7-5とB-7-6に該当する。

次に金銀の瓶盃を取りて、一一に各浄水を満たし盛り已りて、一一の盃の中に少しの五穀、并に龍腦香、及び前の絹に裹める七宝物を著け竟り、即ち柳枝・竹枝・梨枝・柏枝、各に并葉を以て諸の盃瓶の口を塞げ。仍お、七宝の裏の線の頭を露し出して、灌頂の時に、一一の弟子此の宝を承著るに擬す。其の一一の水缶の塞げる中に於て、各一顆の好石榴を著け已り、一一の水缶の塞げる上に、各生絹の三尺なるを以て其の枝葉に繫けよ。（中略）然して後に、香鑪を放ち著き出で、自ら手で一金水缶を取りて、壇の西門に至りて胡跪して至心に觀世音十一面菩薩の呪を誦すること一百八遍せよ。若し諸仏をして座主と為せば、其の当部に随いて各本呪を誦すること一百八遍せよ。入壇して座主の位の上に放ち著け。続いて後に弟子は一一の缶を撃げて阿闍梨に与えよ。次に内院の四角と東面の中心に於て各一缶を著け。又、外院の四角に於て各一缶を著け。又、更に外院の東南北の門に各一缶を著け。（『大正蔵』 vol.18, p.891c）

『陀羅尼集経』の瓶の準備は、金銀の瓶の中に浄水・五穀・香・七宝を入れ、口の部分に柳や竹などの枝を挿し、白絹によってその枝を束ねるようである。通常瓶の準備に用いられるのは五宝であるが、第十二卷は曼荼羅建立の時の五宝を埋める所作でも七宝にしていた。これは、第十二卷の曼荼羅の中尊が、第一卷に説かれる帝殊羅施仏頂を想定していることがその要因²⁵といえる。

次に、瓶を加持していく箇所であるが、第十二卷でも第四卷と同様に、十一面觀世音の呪で行われるが、中尊を他の尊格とした場合には、それに従って本呪を誦して瓶を加持することが示されている。第四卷に関しては、曼荼羅の中尊を十一面觀世音としていることから当然と言える。第十二卷の場合には、帝殊羅施か任意の仏菩薩を中尊とするため、その尊格に随って瓶を加持する真言が異なるのであろう。問題は、第十二卷においても最初に十一面觀世音の呪を誦すことが説かれる部分であるが、これは上記で述べた通り、第四卷の儀礼を基に第十二卷の儀礼が成立したことを示す用例となるであろう。後の灌頂儀礼では、この灌頂に用いる瓶の加持の仕方に変化がみられるが、『陀羅尼集経』は、未だ曼荼羅の中尊一尊で加持を行う最も明快な方法を採用している。

瓶の配置に関しては、三重構造の曼荼羅に対して、中央と、内院の四角と、東面の中心と、外院の四角と四門に安置される。両者の違いは、第十二卷の東面の中心に配置される瓶のみで、その他に関しては多くの儀礼に共通して見られる配置と言える。第十二卷にお

いて東面に瓶が配置された明確な理由は分からないが、曼荼羅の配置から考えると、中心から東面にかけて帝殊羅施・般若波羅蜜・阿弥陀が列座する。この三尊は、『陀羅尼集経』ではそれぞれ第一巻・第三巻・第二巻を代表する主要尊格といえる。このため、特に瓶を配置したことが予想される。以上が『陀羅尼集経』にみられる瓶の準備儀礼である。

第四項 投華得仏について

次に、第二節の用例3で示した投華得仏について見ていきたい。投華得仏は、曼荼羅に弟子を迎え入れるにあたり、手を洗い、口を漱がせるところから始まる。

次に、弟子に観世音三昧印を結ばせ、その印に投華に用いる華を置く。そして、弟子が曼荼羅を見ることがないように、その眼を帛によって包むのである。帛によって覆面された弟子は、印を結び、華を持った状態で曼荼羅の西門に導かれる。続いて、観世音三昧呪²⁶「唵般母婆幡夜莎訶 (om padmodbhavāya svāhā)」を七遍誦す。第四巻ではここで弟子に、「前に向いて華を散ぜよ。散じ竟らば好く見るべし。花は何座に墮せや」と語り、投華した弟子に、自分が投華で得た仏菩薩をよく念じて忘れるなど説くのである。第十二巻では、弟子に投華させて、壇の中に入れ、弟子の眼を覆っていた絹を解き、その場所を見せて三礼させる。その後、投華で得た仏菩薩を忘れてはならないと説く。第十二巻の本儀礼において観世音三昧呪が用いられる背景は上記で述べた通りである。

また、『陀羅尼集経』では、『蕤呬耶経』のように、華の落ちた所によって弟子の成就の相を見ること²⁷が詳細には説かれていない。本経の段階では、三回投げても壇に華が入らない者は覆面を解かず、入壇もさせないということに留まるのである。

第五項 瓶水灌頂について

『陀羅尼集経』の灌頂儀礼が、弟子の入門儀礼を目的にしていることから、ここでの儀礼の特徴をいくつか指摘することが出来る。

瓶水灌頂の儀礼は、第四巻によれば、先ず阿闍梨が灌頂に用いる瓶を持って壇を三匝し、弟子とともに灌頂壇の中に入るところから始まる。ここで、阿闍梨が灌頂に用いる瓶は、先に曼荼羅に安置され、十一面観世音の真言を百八遍誦した瓶である。次に、阿闍梨が弟子に投華で華が落ちた尊格を聞く。弟子がそれに答えたら、その尊格の印を結ばせて、その印で弟子自身の頂上を印じさせる。阿闍梨は弟子の印の中に華をつけて、弟子が投華で縁を結んだ尊格の呪を誦す。そして、灌頂が終われば印の中にある華を散らして、印を解かせるのである。次に衣を着て壇に入り、仏に謝すのである。

第十二巻でも同様のことが行われるのであるが、灌頂の所作が第四巻に比べて具体的に説かれている。即ち弟子が縁を結んだ尊格の印を結ばせ、印を頂戴させた後、印の中に華をつけ、その印で水を承けて、呪を誦し水を頂に灌ぐのである。第四巻では簡略に説かれているが、第十二巻と同様に行うものであると考えられる。

ここから導き出される『陀羅尼集経』の灌頂の特徴は、灌頂に用いる瓶は、曼荼羅の中尊の真言を誦した瓶であるが、灌頂の場面では、弟子の結縁の尊格の真言を誦すことである。灌頂の時に受者の結縁の尊格の印を結ばせ、その真言を誦すことは、入門儀礼におけ

る印と真言の伝授の役割も具えていると言える。瓶の加持を曼荼羅の中尊で行うことは、瓶の準備の時点では、受者の結縁の尊格が未だ明らかでないこともその要因と考えられる。

第五節 まとめ

第一章では、七日作壇法が見られる最初期の經典である『陀羅尼集經』の灌頂儀礼についてみてきた。『陀羅尼集經』は偽撰説があったものの、収録されている個々の經典には異訳經典もあり、また内容的にもインド的な要素を残しており、一經典とする梵本はないが、全くの偽撰とも言えない經典である。この經典には第四卷と第十二卷に、詳細な七日作壇法による灌頂が見られた。そこで、この二つの儀礼を対照させたところ、第四卷の七日作壇法に、その他の卷に説かれる儀礼を挿入し、中尊を変えてあらゆる場面に対応出来るような、教科書的な經典へ発展させたものが第十二卷であることが分かった。そして、それは曼荼羅についても同様のことが言えた。そのため、『陀羅尼集經』第十二卷は、第四卷の観音の要素が残ったままの状態となり、それが曼荼羅の中尊と結びつかない点など、多少の混乱も残っていた。

さて、『陀羅尼集經』の灌頂儀礼は、弟子が新たに秘密法蔵を学ぶ時に行われる入門儀礼であった。そのため、これから学ぶ秘密の法蔵に対して疑惑を生じないことを再三確認させられる。では、入門儀礼に用いられる曼荼羅が如何なる構造であったかという点、三部を基調とした曼荼羅であった。すなわち東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部の諸尊を配置するのである。ただ、『陀羅尼集經』の場合は經典全十二卷の内容も影響し、五つのグループを曼荼羅に表示していた。それにより、内院東方の中心に般若波羅蜜多を配置し、西方と外院に諸天を配置していた。第十二卷の曼荼羅は、第四卷の曼荼羅を基に、各卷に説かれる多くの諸尊を補充して成立している。この背景には、入門儀礼に用いる曼荼羅ということもあり、儀礼を執行する立場である阿闍梨が所持している尊格の印や真言を、満遍なく曼荼羅に配置し、その門戸を広げるといえる意味があるように思われる。そして、灌頂儀礼に関しては、その瓶は曼荼羅の中尊の真言によって加持されていた。ところが、実際の頭に瓶水を灌ぐ場面では、受者が投華得仏によって結縁した尊格の真言が誦えられていた。これは、入門儀礼の特徴の最たるものであろう。

1 「此の經、金剛大道場經に出づ。大明呪蔵分の少文なり」(『大正蔵』vol.18, 785b)

2 松長(1980, p.119)参照。

3 頼富(1988, p.132)参照。

4 『開元積教録』や『貞元新定積教録』に、「此の集の中の、大般若呪經等に、別行のもの有り。録の具わらざるは、人の多く疑を生ずるを顯し、恐らくは正典に非ず。今、疑を除かんが為の故に、別の條末に之を列すること、後の如し」(『大正蔵』vol.55, p.599a)と、インド由来の正典でないことが既に指摘されていた。『陀羅尼集經』の本文中には、その指摘通り多分に編纂されたと思われる形跡を見いだすことが出来る。以下にその箇所を引用してみたい。

・ 其の仏の右辺に觀自在菩薩を作れ。(一本には十一面觀世音像と云う)。(『大正蔵』vol.18,

p.785a)

- ・三昧大結界呪を誦せ。呪に曰く。唵商迦禮（一本には羯唎と云う）摩訶三昧焰槃陀槃陀文闍文闍莎訶。（『大正蔵』 vol.18, 788c）
- ・行者起立し礼拝印を作せ。（十一面部の礼拝印に同じ）。（『大正蔵』 vol.18, p.789a）
- ・散華呪第十八。呪に曰く。唵蘇雞羅夜莎訶。更に一本有り，呪に曰く。（『大正蔵』 vol.18, p.863b）
- ・左の蓮華の上に阿闍伽像を作れ。（一本には釈迦仏と云う）。（『大正蔵』 vol.18, p.864b）
- ・七日の中，日に日に苦楛樹の枝を取れ。一本には菩提樹の枝と云う。（『大正蔵』 vol.18, p.874a）
- ・七日の中，日に日に古溜草を取れ。（一本には固漏草と云う）。（『大正蔵』 vol.18, p.874a）
- ・呪師は呪を誦して其の香鑪を印せよ。手に香鑪を把り，焼香し啓白せよ。法用は前の如し。即ち護身・辟除・結界・召請等の法を作せ。一衣に前の十一面の説の如し。（『大正蔵』 vol.18, p.857a）
- ・次に当に行道すべし。次に酥蜜・飲食等の物を焼いて供養を為せ。若し日に日に香花・飲食等の物を供養すべき者有ること無ければ，即ち一切供養の印を作して之を供養すべし。其の印は前の般若部の説の如し。（『大正蔵』 vol.18, p.857a）
- ・南無仏陀耶南無達摩耶南無僧伽耶怛姪他遏囉迦末斬摩囉迦末斬蘇途末斬支鉢囉末斬摩訶支鉢囉末斬摩唎支夜末斬安怛陀那夜末斬那謨粹都底莎訶。又，別本に云わく。那謨仏陀耶那謨達摩耶那謨僧伽耶哆姪他遏囉迦末斬末迦摩斬阿豆摩斬至婆囉摩斬安檀駄那夜摩斬摩唎支婆囉摩斬那謨率都羝莎訶（注に云わく。梵本の多くは前本に同じ。西国の諸徳，前を誦する者多し。古今に受持相伝し験を得。前後の両呪，効有らざること無し。然れば則ち，文句周悉し，前本周匝す。是非を決定するに，凡そ境界に非ず。前を用うか，後を用うかは自らの便する所に任す。以下仏言なり）。（『大正蔵』 vol.18, p.869c）

下線部の箇所を見てみると「一本には」「又別本あり」と幾つかのテキストを校訂した形跡が見られる。また、「前の十一面の説の如し」「前の般若部の如し」と，さらには「以下仏言なり」と編集の後を示す文章を見ることが出来る。これらのことが中国撰述と疑われる要因の一つになったといえる。佐々木(2005)参照。

⁵ 頼富(1988)参照。

⁶ 佐々木(2003)参照。

⁷ 佐々木(2003)参照。また、『陀羅尼集経』各巻の異訳経典に関しては，佐々木(2005)に詳しい。

⁸ 船山(2013)では，このような経典を編輯として，真経である漢訳経典と，偽作経典の間に位置づけている。（船山 2013, pp.149-176）

⁹ 上記の通り，『陀羅尼集経』が『金剛大道場経』から一部を取り出したものであり，第四巻を先行する異訳経典と比較すると，『陀羅尼集経』のみ七日作壇法が説かれていることから，『金剛大道場経』からの導入との見方もある。しかし，耶舎崛多訳の『仏説十一面觀世音神呪経』の後書には，「此の経，金剛大道場神呪経と名づく。十万偈の部より成る。十一面觀世音一品を略出す」（『大正蔵』 vol.20, p.152a）と書かれている。即ち，『仏説十一面觀世音神呪経』は『金剛大道場神呪経』十万偈の中の一部であることが分かる。これは，阿地瞿多が『金剛大道場経』より『陀羅尼集経』を撮要したことに類似している。『金剛大

道場神呪経』と『金剛大道場経』が同一のものであるのか、そもそも存在したことさえ確認できないが、このような伝説にしたがえば、『金剛大道場神呪経』から訳出された耶舎崛多訳に七日作壇法が見られないことから、『陀羅尼集経』に新たに導入された多くの儀礼は、『金剛大道場経』からの導入ではないと考えることも出来るであろう。一方で、耶舎崛多が訳さなかった可能性や、耶舎崛多が訳出した後に、インドにおいて『十一面觀世音神呪経』が展開した可能性も指摘できる。

10 五段護摩は、護摩法を五段階用いて供養する方法で、『陀羅尼集経』では一段目から四段目までに以下の尊格を請して供養を行い、五段目に衆生たちのために護摩を行う。そして、五段目の護摩に用いる真言が、両巻とも十一面の真言になっている。

	第四卷	第十二卷
一段目	火天	火天
二段目	馬頭	馬頭
三段目	十一面觀世音	曼荼羅の中尊
四段目	曼荼羅の諸尊	曼荼羅の諸尊
五段目	十一面觀世音の真言	十一面觀世音の真言

11 この偈は他にも、第一卷の仏頂三昧曼荼羅法にみることが出来る。「南無仏智慧精進 那羅延力骨鎖身 波羅蜜多六度行 大慈悲父常為人」(『大正蔵』 vol.18, p.787b)

12 この第八卷の儀礼は、第三卷にも説かれる。両者を比較すると、第三卷の方が原初的な形態を有していると言える。第三卷と第八卷の関係については、駒井(2012b)参照。

13 佐和(1975)参照。

14 ここでの觀世音母が、如何なる尊格を指しているのかは不明である。『蘇悉地経』では蓮華部の部母を白衣觀音(Pāṇḍaravāsini)としている。本論第二章第二節参照。

15 大村(1918)参照。「一蹉三跋底伽觀音あり、其の名(Icchāsampātika)即ち所願成就の義なり」大村(1918, p.229)。

16 この蘇幡斯馳迦羅は、音写を見る限りでは、Susiddhikaraではなく、Svasiddhikaraにするべきか。しかし、尊格としてはSusiddhikaraを指していると考えている。

17 この図の制作にあたっては、大村(1918, p.224)を参照した。

18 この図の制作にあたっては、大村(1918, p.252)、『密教大辞典』の「普集会曼荼羅」の項目(p.1919)、田中(2010, p.88)を参照した。大村(1918)、『密教大辞典』、田中(2010)の図は、何れも北方の第二重の中心を随心觀世音としているため、筆者もそれに随った。しかし、その場合、随心觀世音の左(東方)に五尊、右(西方)に三尊という配置になり、左右のバランスがよろしくない。第四卷の曼荼羅(図1)では、一蹉三跋底羅を中央に配置し、左右に三尊ずつ諸尊が並ぶ。第十二卷の曼荼羅も、一蹉三跋底伽を中心にするればその問題も解消されるため、この曼荼羅の諸尊の配置は未だ改善の余地があると考えている。

19 母鬱陀吒佉、及び毘梨觀唎知の詳細は不明。

20 『陀羅尼集経』第十二卷の十六肘壇の曼荼羅については、大村(1918, p.253)、及び田中(2010, p.89)参照。

21 『大正蔵』 No.893

22 『大正蔵』 No.895

23 田中(2010, p.87)参照。

24 『陀羅尼集経』の分類に関して、松長(1980, p.120)は仏・菩薩・金剛・天・普集会壇法に分けて整理したと述べ、頼富(1990, p.117)は仏部・經部・觀音部・金剛部・諸天部・諸仏大陀羅尼都会道場としている。

25 『陀羅尼集経』第一卷の仏頂尊は、以下のように説かれている。「若し行ぜんと欲せば、

浄室中に仏頂像を安置せよ。其の作像法、七宝の華の上に結加趺坐す。其の華座の底を二師子が戴き、其の二師子、蓮華上に坐せり。其の仏の右手、臂を伸ばし掌を仰げ、右脚の膝の上に当て、指頭を下に垂れ華上に至れ。其の左手、臂を屈して掌を仰げ、臍下に向け横に著けよ。其の仏の左右の両手の臂上に、各の三箇の七宝の瓔珞を著けよ。其の仏の頸中にも亦、七宝の瓔珞を著けよ。其の仏の頭頂上に、七宝の天冠を作れ。其の仏の身形、真金色に作り、赤袈裟を被らせよ。(『大正蔵』 vol.18, p.785c)」

²⁶観世音三摩耶呪は第十二巻では観世音三昧呪となる。語源が同じことは容易に想像できるが、同じ訳者が別の漢字を用いて訳している点には注意が必要である。

²⁷『蕤咽耶経』の該当箇所については、金本・伊藤(2007)に詳しい。

第二章 『蘇悉地經』の灌頂儀礼について

第一節 はじめに

『蘇悉地羯羅經』(以下『蘇悉地經』)は善無畏(637-735)によって漢訳された。梵本は残されていないが、漢訳三本と藏訳とがある。

【漢訳】

正本 『蘇悉地羯羅經』(三卷三十七品) 高麗版一切經本 No.893

別本一 『蘇悉地羯羅經』(三卷三十八品) 南宋思溪版一切經本 No.893

別本二 『蘇悉地羯羅經』(三卷三十四品) 応永二十五年惠淳刊本 No.893

【藏訳】

Legs par grub par byed pa'i rgyud chen po las sgrub pa'i thabs rim par bhye ba.
(**Susiddhikaramahāntrasāadhanopāyikāpaṭala*, 善く成就させる大タントラより成就法の章) Toh.807, Ota.421

漢訳は全て上・中・下の三巻からなるが、正本・別本一と別本二では中下巻が入れ替わっている。また、正本には「扇底迦法品第十三」「補瑟微迦法品第十四」「阿毘遮嚕伽品第十五」があるが、別本一・別本二にはない。他にも三本の間で真言が異なるなど、幾つかの異同がある。藏訳は正本と最も対応している¹⁾。

本経は、現在一般的となった Bu ston のタントラ四分類法では、『蕤呬耶經』・『蘇婆呼經』と並んで所作タントラに分類されている。真言宗においては、空海が『真言宗所學經律論目録』の中で本経を律部に録し、真言行者の修行の規範とした。

日本の天台宗では、特に胎金両部に並んで蘇悉地を大法として重視している。しかし、蘇悉地部の成立やその内容は、必ずしも明確ではないようである。三崎(1988)は、蘇悉地部が胎金と並んで三部の大法とされるには、灌頂か灌頂に準ずる根本印信やその教理がなければならぬとして考察をしている。その中で、まず、蘇悉地灌頂が両部の灌頂と同じく、阿闍梨位灌頂であるかという問題に関して、円仁の『蘇悉地經略疏』第七の「本尊灌頂品」より以下の一文を引いている。

凡そ曼荼羅に入るに必ず四種の灌頂あり。一は除難、二は成就、三は増益己身、四は得阿闍梨位なり。今此の品中の所説の灌頂は、即ち成就の義なり。除難及び増益を兼ね。義旨知るべし。

(『大正藏』 vol.61, p.472c)

これに関連して円珍撰の『請弘伝真言止観両宗官牒款状』を見る限り、両部の学法灌頂を受け、併せて両部諸尊瑜伽と蘇悉地大法を受け、両部の阿闍梨灌頂を授伝しているが、蘇悉地灌頂のことは記されていないと三崎(1988)では問題提起している²⁾。また、蘇悉地灌頂の本尊が何であるかという問題にも言及している。そこでは、曼荼羅や灌頂図を寓目する機会がなく、僅かにあるもその伝承が不明瞭であるとし、この灌頂の本尊が明らかでないことは、蘇悉地部が極めて重要なものとされながら、その実態が明確でない最大の課題と

している³。

勿論、それらの問題については『蘇悉地經』のみではなく、供養法やその他の經典・儀軌などとの関連を考慮し、時代の流れや伝統教学と共に考察していく必要があるであろう。また、木内(1984)によれば、『蘇悉地經』自体が台密の蘇悉地を構成する要素となっているわけではないようである⁴。そのため、台密に於いて傳承されている蘇悉地灌頂に対する考察についてはここでは立ち入ることはしない。この章では、後に上記のような問題を孕む蘇悉地灌頂の根本たる『蘇悉地經』に説かれる灌頂儀礼が、どのような構造を持ち、また如何なる意義を有するのかについて考察していきたい。

第二節 『蘇悉地經』における真言の分類

第一項 部母・明王・大忿怒の分類

『蘇悉地經』では、後に第四節で示す如く、曼荼羅に仏部の部母や、蓮華部の心真言(部心)を配置し、灌頂に用いる瓶の加持もそれらの尊格で行うことがある。そこで、本章の内容に入る前に、『蘇悉地經』において分類されている、各部の明王・忿怒・部母など確認しておきたい。

「真言相品第二」では、仏部・蓮華部・金剛部の三部に、それぞれ部母・明王・忿怒(弁事)の真言の分類がされている。該当箇所は以下の通りである。

【漢訳書き下し文】

諸余の尊者諸説の真言は是れ三種なり。事法は、一に扇底迦法、二に補瑟迦法、三に阿毘遮嚕迦法なり。凡そ是の三事、三部の中に於いて各各皆あり。応に須く善く知りて次第を分別すべし。仏部の中には仏眼を用う。号して仏母と為す。此の真言を用て扇底迦を為せ。仏母真言に曰く。(真言略) 誦すること三遍せよ。

蓮花部の中には観音母を用う。号して半拏囉縛悉寧と為す。此の真言を用て扇底迦を為せ。観音母の真言に曰く。(真言略)

金剛部の中には執金剛母を用う。号して忙莽雞と為す。此の真言を用て扇底迦を為せ。金剛母の真言に曰く。(真言略)

又た仏部の中には、明王真言明王を用う。号して最勝仏頂と曰う。此の真言を用て補瑟迦を為せ。明王の真言に曰く。(真言略)

蓮花部の中に亦た明王を用う。号して訶野鉦利囉と曰う。此の真言を用て補瑟迦を為せ。明王の真言に曰く。(真言略)

金剛部の中に亦た明王を用う。号して蘇囉と曰う。此の真言を用て補瑟迦を為せ。真言に曰く。(真言略)

又た仏部の中には大忿怒を用う。号して阿鉢囉氏多と曰う。此の真言を用て阿毘遮嚕迦を為せ。真言に曰く。(真言略)

蓮花部の中の大忿怒、号して施囉去囉平訶と曰う。此の真言を用て阿毘遮嚕迦を為せ。真言に曰く。(真言略)

金剛部の中の大忿怒、号して軍荼利と曰う。此の真言を用て阿毘遮嚕迦を為せ。真言

に曰く。(真言略)

(『大正蔵』 vol.18, p.603c)

【蔵訳】

zhi ba dang ni rgyas pa dang// gang yang drag shul spyod pa dang//
rigs gsum la yang de dag kun// gsang sngags dbye pas shes par bya//
rigs sngags rgyal pos rgyas pa bya// khro bo rnam kyis drag shul spyad//
spyan la sogs pas zhi ba bya// rang bzhin gsum gyi cho ga yin//

(D f.169r4-5, P f.231v4-5)

【試訳】

息災と増益と調伏のいずれであれ、三部族に於いてまた、それら全ての真言を区別することが知られるべきである。

明王 [の真言] によって増益をなし、諸忿怒尊 [の真言] によって調伏を行じ、
仏眼母をはじめとする [仏母の真言] によって息災をなすべし。[これらは] 三つの本性に基づく儀軌である。

この箇所は、漢訳と蔵訳で大きく異なる部分である。先ず、双方に共通する部分から述べれば、仏母・蓮華部・金剛部の三部それぞれに、部母・明王・大忿怒の区別があり、それらは順に息災・増益・調伏の事業を行う時に用いる。漢訳では、仏母・蓮華部・金剛部における部母・明王・大忿怒の尊格名、及びその真言を説いている。それをまとめれば以下のようなになる。

	仏母	蓮華部	金剛部	事業
部母	仏眼	半拏囉縛悉寧 (Pāṇḍaravāsini)	忙莽雞 (Māmaki)	息災
明王	最勝仏頂	訶野鉞利嚩 (Hayāgrīva)	蘇嚩 (Śumbha)	増益
大忿怒	阿鉢囉氏多 (Aparājita)	施嚩 _去 嚩 _平 訶 (Sivāvaha)	軍荼利	調伏

このように、『蘇悉地經』においては真言の分類が明確にされている。しかし、これらの分類が見られるのは漢訳のみであり、蔵訳には見られない。これはおそらく、漢訳者による挿入であろうと考えられている。しかし、高田順(1998)によって、漢訳に見られる分類が、蔵訳においても『蘇悉地經』の中から回収出来ることが報告されている。その一例を示すと、

【漢訳書き下し文】

諸事を作す時は、常に須く右手に珠索を帶持し、香を以て之に塗り、真言を之に誦すること一百遍、或いは一千遍すべし。

珠索の真言に曰く。

唵句蘭達哩滿馱滿馱訶泮吒_{二合} (oṃ kulamdhari bandha bandha hūṃ phaṭ)⁵

此の明王の大印，忙莽雞と名づく。能く一切の明王の真言を成ず。亦た，能く増益し，及び真言の字句を満足す。

亦た，能く余諸の法，乃至護身等の事を成就す。直但，是れ諸の明王の母なるのみに非ず。亦た，是れ金剛の母なり。

若し金剛部の珠索ならば，一の鳴嚙捺囉叉を著け，線の中を穿ち，後に繋げて結を為せ。金剛部中，既に爾り。余の二も随いて知るべし。仏部の珠索，応に仏母の真言を用いべし。若し蓮華部の珠索ならば，応に半拏囉嚙斯泥の真言を用いべし。金剛部の珠索ならば，応に忙莽雞の真言を用いべし。三部母の真言，前に准て之を説く

(『大正蔵』 vol.18, p.607c)

【蔵訳】

sgrub pa bzlas brjod byed pa na// rig sngags 'di ni brgyar bzlas pa'i//
spos kyis byugs pa 'i gdu bu dag/ rtag tu lag la gdags par bya//
om ku la ndha rī bandha bandha hūṃ pha ṭa/
rig sngags phyag rgya chen po 'di// mā ma kī zhes bya bar grags//
rig sngags thams cad sgrub pa dang// de bzhin byin skyed skyong bar byed//
'dis ni bsrung ba la sogs pa'i// las rnams thams cad byar yang rung//
'di ni rig sngags thams cad dang// rdo rje 'dzin pa'i yum yin no//
phyag na rdo rje'i rigs las ni// *ru drā kṣa(D; ru rag sha) yi gdu bu bya//
*bgrang(P;'brang D) phreng la sogs dbye ba yis// rig sngags gzhan la'ang she's par
bya//
gtsug tor pad ma'i rigs dag la// rig sngags chen mo *spyan(D;can P) dang ni//
gos *dkar(D; dgar P) can ni gang yin *pa(D;ga P)// de yis *de(D;da P) yi mdun du
bzlas//
om ru ru sphu ru dzwa la ti ṣṭa si *ddha lo tsa ni/ sarba artha sā dha ni swā hā /
dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo//
byang chub sems dpa' sems dpa' chen po spyan ras gjigs kyi dbang phyug la phyag
'tshal lo//
mthong ba dang ni thos pa dang// reg pa dang ni dran pa'ang rung//
bdag ni sems can tams cad kyi// nad rams kun gyi gsos gyur cig/
ta dya thā/ ka ṭe / bi ka ṭe/ ni ka ṭe / ka ṭa/ bi ka ṭa/ ka ṭam/ ka ṭe bha ga ba ti dza ye
swā hā/

(D f.175r2-6, P ff.237r6-v3)

【試訳】

成就法や念誦を行うならば，この明呪を百遍誦した，
香が塗られた腕輪などを，常に手につけるべし。

「オーン。種族を永続させるものよ！縛れ縛れ！フーン，パット！（om kulamdhari
bandha bandha hūṃ phaṭ）」

この明呪の大印は，Māmakī と称される。

一切の明呪を成就し，同様に加持を生じ守護をなす。

これによって護身をはじめとする一切の所作をなすこともまたよい。

これは、一切の明呪と、持金剛の母である。

金剛部の所作は、*rudrākṣa* の腕輪をなすべし。

念珠などを区別することによって、他の明呪についても知るべし。

仏頂と蓮華部における大明妃は、仏眼と、

白衣であり、それによって、その前で念誦すべし。

「オーン。ル、ル、焰よ。燃えよ、立ち昇れ。悉地を得たローチャナーよ。あらゆる目的を成就した女よ。スワーハ。(om ru ru sphuru jvala tiṣṭha siddhalocane sarvārthasādhani svāhā.⁶)」

三宝に帰依します。観自在菩薩摩訶薩に帰依します。

見て、聞いて、触れて、臆念するのをもまたよい。

私は一切衆生の、すべての病の医師となる。

「即ち、恐るべき死者の近くで、死者を死から離れさせる者よ！活性化する女よ⁷！世尊よ！勝者よ！スワーハー。(tadyathā kaṭe vikaṭe nikaṭe kaṭa vikaṭa kaṭamkaṭe bhagavati vijaya svāhā.)」

とあり、この引用文から漢訳・蔵訳ともに部母の尊格名と真言を確認することが出来る。それに依れば、仏部は仏眼であり、蓮華部は白衣であり、金剛部はマーマキーである。真言について、漢訳では前に示したために説かれず、蔵訳にのみ見られる。そして、この蔵訳に説かれる真言は、上記の「真言相品第二」の漢訳に見られた仏母の真言とほぼ一致する。このように、明王と忿怒についても確認をし、上記の漢訳に見られる分類が、『蘇悉地経』の分類であることを明かしている。本論でもその知見によって、上記の分類にそって論を進めていく。

第二項 『蘇悉地経』の明王について

『蘇悉地経』では、以上の分類が規定されているが、必ずしも経典中に現れる「明王」がこの三尊を指し示さない用例が見られるので、ここで確認しておきたい。というのも、この後に確認していく曼荼羅の中心に安置される尊格が、「真言念誦者の明王 (gsang sngags zlos pa po'i rig sngags rgyal po)」と説かれ、さらに曼荼羅の中心の瓶を、明王の真言によって加持するためである。その用例は、補欠曼荼羅にみることが出来る。

【漢訳書き下し文】

東*面[西]に観自在を置き、右辺に馬頭明王を置き、左辺に毘首嚙波を置け。右辺に二眼を置き、左辺に四臂を置け。右辺に六臂を置き、左辺に十二臂を置け。(後略)

(『大正蔵』 vol.18, 627c)

【蔵訳】

de dbus pad ma bris nas su// rig sngags rgyal dang rta mgrin dang//

sna tsoḡs gzugs dang spyān gsum pa// phyag bzhi phyag drug bcu gnyis phyag//

(D f.210r6, P ff.72v8-73r1)

【試訳】

その中央に蓮華を画き、明王と馬頭と、

毘首嚙波 (*viśvarūpa) と三眼と、四臂・六臂・十二臂 [と], (後略)

これは、蓮華部の補欠曼荼羅の諸尊配置を示す箇所である。漢訳において、観自在の配置が東西とあるが、別本一の黄檗版と、別本二の該当箇所が「東面」となっており、さらに金剛部の補欠曼荼羅の執金剛が東面に安置されることから、ここでも東西を東面に改めた。

この曼荼羅は、蓮華部の補欠曼荼羅であり、三部の諸尊ではなく、蓮華部の尊格のみで構成される曼荼羅である。まず蔵訳に注目すると、この曼荼羅の諸尊として明王が挙げられ、以下に馬頭や毘首嚙波などの尊格が配置されていく。ここでは、明王と馬頭を区別していることが分かる。漢訳は、蓮華部の曼荼羅ということで、その主尊に観自在を挙げている。次が馬頭明王となっているのは、蔵訳に見られるように、明王と馬頭が並んで説かれているため、漢訳者は「明王」と「馬頭」ではなく、「馬頭明王」と理解したのであろう。続いて金剛部の補欠曼荼羅をみていきたい。

【漢訳書き下し文】

然して須く方に作るべし。其の量随意なり。東面に執金剛を置き、右辺に明王を置き、左辺に忙莽計を置け。右辺に軍荼利忿怒を置き、左辺に金剛鉤を置け。右辺に金剛棒を置き、左辺に大力を置け。右辺に拳を置き、左辺に孫婆を置け。(後略)

(『大正蔵』 vol.18, p.628a)

【蔵訳】

ci ltar 'dod par dkyil 'khor ni// gru bzhi par yang legs bris te//
sngon bzhin snying po'i dkyil 'khor du// rig sngags rgyal po *gzthag(D;gzthag P) par
bya//
rig pa chen mo mA ma ki// khro bo bdud rtsi *thab(D;thabs P) sbyor dang//
rig pa chen *mo(P;po D) lcags kyu ma// dbyug pa dang ni stobs po che//
rdo rje khu tshur rig rgyal mo// gnod mdzes go rims bzhin du bzhag//

(D ff.210r7-210v2, P f.73r2-3)

【試訳】

適宜に曼荼羅は四角形によく画いて、
前のように中心の曼荼羅に、明王を安置すべし。

マーマキー大明妃と、忿怒甘露軍荼利と、

[金剛] 鉤大明妃 [と], [金剛] 棒と大力と、

金剛拳明妃と、孫婆を順序通りに安置すべし。(後略)

蔵訳をみてみると、金剛部の主尊として明王を挙げ、続いてマーマキーや軍荼利を配置している。そしてその後に孫婆が配置されることを考えると、ここでの明王は孫婆ではない別の尊格を想定していると言える。漢訳では、金剛部の曼荼羅の主尊として執金剛を挙げ、以下に明王や忙莽計を配置していく。蓮華部の曼荼羅の際は、明王と馬頭が並んでいた為に、「馬頭明王」としたが、金剛部の曼荼羅の場合は、明王と孫婆が離れているために、漢訳者はただ「明王」としたと考えられる。

このように、蔵訳だけをみると、明王を主尊と捉え、馬頭や孫婆と区別していると言える。漢訳は、観自在と執金剛の二尊をそれぞれの主尊として補い、明王の位置づけが蓮華

部と金剛部で異なっている。この用例をみると、ここでの「明王」は、『蘇悉地經』に規定されている馬頭・孫婆ではなく、觀自在・金剛手と理解することも可能と思われる。

同じことは『蕤呬耶經』にも言える。『蕤呬耶經』も『蘇悉地經』と同様に、明王を以下のように分類している。

【漢訳書き下し文】

輪王仏頂の一字真言，是れ其の仏部の明王なり。馬頭大尊の十字真言，是れ蓮華部の明王なり。嚩婆忿怒，其の彼の真言に呬発の字有れば，是れ金剛部の明王なり。

(『大正蔵』 vol.18, p.763a)

【蔵訳】

rgyal ba'i rigs la *rig(D;rigs P) sngags rgyal// 'khor los sgyur ba'i yi ge gcig/
pad ma'i rigs la *rig(D;rigs P) sngags rgyal// rta *mgrin(D;'grin P) yi ge bcu pa'o//
rdo rje rigs la *rig(D;rigs P) sngags rgyal// de bzhin gnod mdzes mthu bo che//
yi ge hūṃ ni bzhi dang ldan// las rnams kun la rab tu drag/

(D f.146r1-2, P f.207r1-2)

【試訳】

勝者の部族（仏部）の明王は，転輪仏頂の一字であり，

蓮華部の明王は，馬頭の十字である。

金剛部の明王は，同様に大力のある孫婆の，

フーン字を四つ具えたものであり，全ての事業に威力がある。

これによれば，仏部は転輪仏頂，蓮華部は馬頭明王，金剛部は孫婆明王となる。この真言が、『蘇悉地經』に説かれる明王の真言と，ほぼ一致することが高田順(1998)によって報告されている。すなわち，"bhrūṃ"が仏頂の一字の真言であり，"oṃ amṛtodbhava hūṃ phaṭ."が馬頭の十字真言であり，"namo ratnatrayāya namaś caṇḍavajrapāṇaya mahāyakṣasenāpatya oṃ sumbha nisumbha hūṃ gr̥hṇa gr̥hṇa hūṃ gr̥hṇāpaya hūṃ ānaya ho bhagavan vidyārāja hūṃ phaṭ svāhā."が孫婆の四呬字の真言である。

このように、『蕤呬耶經』においても明王の真言が部族ごとに分類されているが，一方でこの明王を，曼荼羅の中尊と解釈出来る記述がある。それは，六日目の就寝前に，諸尊を奉請し啓白する場面に見られる。

【漢訳書き下し文】

某甲の明王大尊に帰命す。我今，明日，大慈悲を以て曼荼羅を作らん。弟子を愍れんが為の故に。及び，諸の大尊を供養せんが為の故に。

(『大正蔵』 vol.18, p.763b)

【蔵訳】

'di zhes bya ba'i bcom ldan 'das// *rig(D;rigs P) sngags rgyal la phyag 'tshal lo//
bdag ni brtse bar gyur nas su// slob ma rnams la *brtseb(D;rtseb P) dang//
khyed rnams la yang mchod pa'i phyir// sang ni dkyil 'khor 'dri bar 'tshal//

(D f.146v2-4, P f.207v2-3)

【試訳】

某という世尊明王に帰命します。

私は慈愛の心を抱き、弟子たちを慈愛し、

また、あなた方を供養するために、明日曼荼羅を画こうと思います。

この部分を見てみると、明王はこれから作る曼荼羅の中尊を指し示しているようにも思える。

以上のことから、『蘇悉地経』や『蕤呬耶経』では、部族ごとに明王を分類しつつも、曼荼羅に画かれる様々な真言尊の王という意味で、部主尊や曼荼羅主を明王と呼称している可能性も考えていく必要があるであろう。

第三節 『蘇悉地経』の灌頂の次第

『蘇悉地経』の一連の灌頂儀礼は「除一切障大灌頂曼荼羅法品三十一」⁹に説かれる。この品に説かれる記述に沿って灌頂儀礼の次第を示せば以下の如くである。

・浄地→曼荼羅作画→瓶配置→曼荼羅供養→三種護摩→瓶加持→灌頂→護摩

これらの次第は、『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』の灌頂儀礼と比べると、曼荼羅作画以前の準備儀礼が非常に簡略に述べられている。また、七日作壇を用いるのかも分からない。ただ、上記に示した「浄地」の部分に関しては、より詳細な記述が「前の所説の明王曼荼羅」に説かれているとしている。以下にその部分を引用してみたい。

【漢訳書き下し文】

次に灌頂の大曼荼羅を説かん。能く一切の諸事を成就することを得ん。前の所説の明王の曼荼羅の如く、浄地等の法は皆応に是の如くすべし。

(『大正蔵』 vol.18, p.623c)

【蔵訳】

te nas gzhan yang zlos pa dag/ dngos grub phyir ni dbang dskur ba'i//
dkyil 'khor las rnams kun byed pa// gang dag rab tu bsgrags bshad pa//
rig pa'i rgyal po'i dkyil 'khor gyi// cho ga gang dag sngar bstan pa//
des ni sa gzhi sbyang la sogs// thams cad de bzhin kho nar bya//

(D f.202r2-3, P f.264v1-3)

【試訳】

次に、さらにまた念誦者たちが、悉地のために灌頂の

曼荼羅の全ての事業を作すことを説明しよう。

前に示した明王の曼荼羅儀軌などによって、

土地を清める[所作]をはじめとする一切の[所作]を、まさにその通りになすべし。

このように、「浄地」の作法は「前に示した明王の曼荼羅」と同じように行う事が指示されている。しかし、『蘇悉地経』に説かれる曼荼羅をみてみると、

『蘇悉地經』卷中

- A. 灌頂曼荼羅 「除一切障大灌頂曼荼羅法品三十一」¹⁰
B. 光物曼荼羅 「光顯諸物品第三十二」¹¹

『蘇悉地經』卷下

- C. 奉請成就曼荼羅 「諸尊加被成就品第三十五」¹²
D. 補欠少法曼荼羅”(仏部) 「補欠少法品第三十六」¹³
E. 補欠少法曼荼羅”(蓮華部) 「補欠少法品第三十六」¹⁴
F. 補欠少法曼荼羅”(金剛部) 「補欠少法品第三十六」¹⁵
G. 成就諸物曼荼羅”(仏部) 「補欠少法品第三十六」¹⁶
H. 成就諸物曼荼羅”(蓮華部) 「補欠少法品第三十六」¹⁷
I. 成就諸物曼荼羅”(金剛部) 「補欠少法品第三十六」¹⁸
J. 通三部秘密曼荼羅 「補欠少法品第三十六」¹⁹
K. 被偷成物却微曼荼羅 「被偷成物却微法品第三十七」²⁰
L. 通三部成弁諸事曼荼羅 「被偷成物却微法品第三十七」²¹

と、上記の通り、『蘇悉地經』に於いて曼荼羅が説かれる初出は「除一切障大灌頂曼荼羅法品三十一」である。すなわち、「前の所説の明王の曼荼羅」は經中には存在しない。また、明王の曼荼羅といった場合の「明王」が、如何なる尊格を指し示しているのか全く分からない。七日作壇法が説かれるのは「諸尊加被成就品第三十五」の奉請成就曼荼羅であり、別本二の場合には、中巻と下巻が入れ替わっているため、初出の曼荼羅が、まさに七日作壇法を説く曼荼羅となる。このような意味においては、別本二の構成のほうが整っていると言える。この問題に関して、ロルフ・ギーブル(2000)では、

- ・ 想定される経題である、**Susiddhikaramahātantrasādhanopāyikāpaṭala*は、「『妙成就大タントラ』中「成就法方便品」という意味で、現行の『蘇悉地經』がより大部な広本からの抽出を示唆している。
- ・ 不空訳『聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』（『大正蔵』no.1222）の明本の題下に、「出蘇悉地經大明王教中第六品」とある。そして、この経典は、現行の『蘇悉地經』の正本・別本一・別本二、全ての「第六」の品とも内容が一致しない。そのため、『聖迦柁忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經』は、現行の『蘇悉地經』の第六品ではなく、大部の広本である「蘇悉地經大明王教」の第六品なのではないか。

として、現行の『蘇悉地經』が、広本の『蘇悉地經』の一部を訳出した可能性を想定して見る必要があることを指摘している²²。そして、この「前の所説の明王の曼荼羅」も、「作壇法などの説明を含めた広本を想定しなければ、この一文は理解に苦しむことになる」²³としている。

このような状況から、『蘇悉地經』の灌頂儀礼に用いられる七日作壇法が如何なる構造をとるものであるのか、詳しくはわからない²⁴。

第四節 『蘇悉地經』の曼荼羅

第一項 曼荼羅の諸尊の配置

浄地法が終わって、灌頂に用いる曼荼羅の作画が始まる。上記で示した C・D・E・F・J・K・L の曼荼羅は大村西崖氏が経典の記述から組み立てた図がある。また田中公明氏も C・L の曼荼羅に言及している²⁵。灌頂曼荼羅について言及しているものは少ない²⁶が、以下にその曼荼羅の構造を確認していきたい。

『蘇悉地經』の灌頂の曼荼羅は、漢訳に依れば三重構造、藏訳では二重の構造と理解できる。しかし、尊格の異同・増減はごくわずかである。漢訳の三重構造とした場合に、どの尊格が二重に配置されるのかが分からない。予想されるのは、中心の八葉蓮華を内院、三部主を中心とする尊格を二重、諸天を外院とする理解であろう。藏訳は、中心の八葉蓮華、及び三部主を中心とする諸尊を内院、諸天を外院に配している。およその配置は以下の通りである。なお、() 内の尊格名は漢訳に基づく。

- ・中心
受者の所持する真言の部主
- ・内院東面（北から南にかけて）
阿難・槍（鑠底）・部母・世尊（仏頂）・部心・牙・須菩提
- ・内院北面（東から西にかけて）
勢至・白衣（多羅）・部心・蓮華手（觀自在）・部母・ラクシュミー（落澁弥）・義成就
- ・内院南面（東から西にかけて）
金剛（拔折羅）・金剛拳・部母・金剛手・食金剛・金剛棒
- ・内院西面
[ルドラ] 妃（達羅妃）・ルドラ（達羅神）・西門・梵天・吉祥女（梵吉祥明）
- ・内院の西門
難陀竜王・優波難陀竜王
- ・外院
四維と四方を守護する諸天（八方神）
→帝釈天（東）・火天（東南）・閻魔（南）・羅刹（西南）
水天（西）・風天（西北）・毘沙門天（北）・伊沙那天（東北）と思われる。
- ・外院の門
孫陀竜王・優波孫陀竜王
- ・西門
甘露軍荼利（甘露瓶）

第二項 曼荼羅の中尊について

この曼荼羅の中尊は、何か特定の尊格が指示されるわけではない。受者自身の本尊に随って、その本尊の部族を示す印を画くのである。中尊に関する記述は以下のように説かれ

ている。

【漢訳書き下し文】

持誦する所の真言，及び明等に随いて，其の台内に本尊の印を画き，並びに一瓶を置け。所持の真言は，その部類に随いて，本尊主の印を画け。所謂，仏頂と蓮花と金剛なり。応に知るべし。此の法をもつて置くを秘密とす。

(『大正蔵』 vol.18, p.623c)

【蔵訳】

dbus su gsang sngags zlos pa po'i// rig sngags rgyal po gang yin pa//
de yi phyag rgya bris nas su// de yi steng du bum pa bzhag//
ji ltar rigs la rnam bstan pa'i// phyag rgya gtsug tor padma dang//
rdo rje 'di gsum rim bzhin du// rab tu gsang ba'i dam pa yin//

(D ff.202r7-202v1, P ff.64v8-65r1)

【試訳】

中心には，真言念誦者の明王の印を画いて，その上に瓶を置くべし。
部族を示す印は，仏頂と蓮華と金剛である。このように，三部に随つて「印を画くこと」が秘密の最勝である。

上記の如く，蔵訳の「真言念誦者の明王」が、『蘇悉地経』に規定されている仏頂・馬頭・蘇嚩などの明王であるのか，それとも曼荼羅に画かれる様々な真言尊の王という意味で明王と呼称されているのか，その実態は不明である。ただ，漢訳と併せて解釈を施せば，受者自身が受持している真言尊が属する部族の部主の印を画くことになるであろう。またこれは、『蘇悉地経』の灌頂においては既に受者の本尊が決まっていることを示唆している。このことは，後に改めて述べていきたい。

第三項 漢訳と蔵訳の相違点

次に，諸尊の配置に目を向けてみると，漢訳・蔵訳共に配置される諸尊はほぼ一致している。相違する部分として，以下の二点をあげることができる。

- ・東方の仏部の主が漢訳は仏頂であるのに蔵訳は世尊である。
- ・北方の尊格が，漢訳は多羅であるのに対して，蔵訳は白衣である

三崎(1988)では，この曼荼羅を仏頂部・蓮華部・金剛部の三部とし，仏頂尊を部主尊と理解し，更に曼荼羅の中尊としている²⁷。しかし，一つ注意しなくてはならないのは，漢訳が「仏頂」と示している箇所は，仏頂尊ではなく仏頂の印ということである。部主を画く部分は，以下のように説かれる。

【漢訳書き下し文】 東面に仏頂の印を画け。(『大正蔵』 vol.18, p.623c)

【蔵訳】 shar du bcom ldan phyag rgya bzhag// (D f.202v2, P f.265r1)

【試訳】 東に世尊の印を安置すべし。

この両訳と，上記の中尊の記述の「本尊主の印を画け。所謂，仏頂と蓮花と金剛なり」・

「部族を示す印は、仏頂と蓮華と金剛である」を併せて読むと、仏部・蓮華部・金剛部の三部があり、それを表す印は、それぞれ仏頂・蓮華・金剛であると読み取れる。蔵訳に随えば、画かれる印は仏頂の印であるが、その印が表す尊格は世尊釈迦牟尼とも理解出来る。このことは、例えば『蕤呬耶經』の次の一文によっても理解される。

【漢訳書き下し文】

天尊の印契は即ち是れ仏頂なり。心を以て彼の真言を持誦せよ。白色を以て觀世音自在の印契を画け。即ち是れ蓮華なり。其の執金剛の印契は、即ち是れ五股跋折羅_{二合}なり。

(『大正蔵』 vol.18, p.765b)

【蔵訳】

de las sangs rgyas bcom ldan gyi// phyag rgya gtsug tor go rims bzhin//
yid la *de yi(D;de'i P) sngags zlos *shing(D;shig)// phye ma dkar pos bri bar bya//
'phags pa spyān ras gzigs dbang gi// phyag rgya padmar rab tu bsgrags//
phyag na rdo rje'i phyag rgya ni// rdo rje rnon po rtse gsum 'bar//

(D f.150v6-7, P ff.211r8-211v1)

【試訳】

次に、仏世尊の印である仏頂を、次第の通りに、
意に彼の真言を誦しながら、白い粉によって画くべし。
聖觀自在の印である蓮華を、よく顯すべし。
金剛手の印は、燃え上がる三鈷金剛である。

『蕤呬耶經』に見られる、三部の主尊の印を説く箇所である。この引用文によれば、三部の主尊は仏部が釈迦で、蓮華部が觀自在で、金剛部が金剛手であり、それぞれの印が仏頂・蓮華・金剛と理解できる。即ち、仏頂の印で釈迦を表示しているのである。

また、『蘇悉地經』の漢訳の中からも、このことを裏づける記述が見られる。「C. 奉請成就曼荼羅」には次のように説かれている。

【漢訳書き下し文】

先ず、内院に三部の主を置け。西面の門の北には摩醯首羅、及び妃を置け。仏の右辺には帝殊羅施を置き、左辺には仏眼を置け。次に觀自在の右辺に摩訶室利を置き、左辺に六臂を置け。次に金剛の右辺に忙奔計を置き、左辺には明王心を置け。

(『大正蔵』 vol.18, p.627a)

【蔵訳】

der ni bdag po gsum dag dang// nub tu bdud rtsi *thab(D;thabs P) sbyor bzhag/
dkyil 'khor gnyis pa'i nub phyogs su// dbang phyug chen po chung mar bcas//
gcig tu gzi brjid phung po ste// gcig tu yang na sgrub pa'i spyān//
gcig tu dpa' mo chen mo ste// phyag drug ma yang gcig tu bri//
gcig tu rig sngags mā ma kī// rig sngags rgyal snying *gcig(Dcig P) tu bri/

(D f.208v5-6, P ff.271r8-271v1)

【試訳】

そこに三部の主尊を安置し、西方に甘露軍荼利を安置すべし。

第二院の西方に、妃を共なつた摩醯首羅 [を安置すべし]。

[仏の] 一方には帝殊羅施，もう一方には成就の [仏] 眼 [を画くべし]。

[観自在の] 一方には大吉祥女，六臂女をもう一方に画くべし。

[金剛手の] 一方にはマーマキー明妃，明王心をもう一方に画くべし。

この箇所は、特に漢訳に注目すると、三部主が、仏と観自在と金剛手であることがわかる。

以上のことから、ここでの曼荼羅の東方に画かれる仏頂の印は、仏頂尊ではなく釈迦を表していると言える。

次に、二番目の相違点である。内院北面の白衣が、漢訳では多羅になっている。『蘇悉地経』の曼荼羅では、三部の部主尊のとなりに部母を配置している。この部母がどのような尊格かといえば、仏部は仏眼，蓮華部は白衣，金剛部はマーマキーである。そのため、蔵訳のまま曼荼羅を画くと内院の北面に白衣が二尊画かれることになる。梵本が未発見の今、蔵訳と漢訳の原典が異なっていたのか、或いは、白衣が二尊になってしまうことに気づいた漢訳者が白衣を多羅に変更したのかは分からない。しかし、漢訳において白衣が多羅となっていることは注意が必要である。何故なら、田中(1989)によって、*Guhyasamājatantra* の四部母は、『蘇悉地経』の部母に多羅を加えて成立したことが指摘されている²⁸からである。もし、漢訳者が白衣を多羅に変更したのであれば、善無畏は *Guhyasamājatantra* 系の四部母を知っていた可能性を指摘できるであろう。漢訳当時 *Guhyasamājatantra* が成立していたことは難しいとしても、不空の『十八会指帰』を考えれば、後に *Guhyasamājatantra* に展開する可能性のある原初的なものがあつたことを推測することも不可能ではないだろう。

『蘇悉地経』の灌頂儀礼の曼荼羅は以上の通りである。この曼荼羅は、内院の東方に仏部，北方に蓮華部，南方に金剛部の系統に属する諸尊配置し，外院を一週に渡り護方天が取り囲み，門を龍王が守る形式を取っている。その配置の方法は、『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』と同様に，三部の曼荼羅の構造といえる。

第五節 『蘇悉地経』の灌頂

第一項 瓶の配置

第一章で確認した『陀羅尼集経』では、曼荼羅の中尊の真言で瓶を加持するが、『蘇悉地経』では、曼荼羅に配置されたある瓶が、それぞれ何かしらの尊格と対応し、それらの瓶が灌頂に用いられる。後代のタントラ²⁹ではそのような瓶と尊格の対応関係を見ることが出来るが、初期密教経典の中では管見の及ぶ限り『蘇悉地経』のみであり、本経の特徴と言えるであろう。瓶と尊格の対応関係を明らかにする前に、瓶の配置を確認していきたい。『蘇悉地経』の灌頂では、七つの瓶を配置していたようである。

【漢訳書き下し文】

四門の中に於て拔折羅を画け。復た諸の角に於て、吉祥瓶を安け。外の灌頂の曼荼羅に於ても亦是の如く作すべし。凡そ灌頂せんと欲せば、必ず四種に置かれる所の瓶処を須い、函界の角に並べよ。持誦する所の真言、及与び明等に随いて、其の台内に本尊の印を画き、並びに一瓶を置け。

(『大正蔵』 vol.18, p.623c)

【蔵訳】

dbang bskur ba yi dkyil 'khor du// bum pa gang ba bzhi rnams ni//
grwa yi ri mo'i nang rol du// nges pa nyid du gzhaq par bya//
dbus su gsang sngags zlos pa po'i// rig sngags rgyal po gang yin pa//
de yi phyag rgya bris nas su// de yi steng du bum pa bzhaq//

(D ff.202r6-202v1, P ff.264v7-265r1)

【試訳】

灌頂の曼荼羅に於ける、四つの満たされた瓶は、隅の画の内側に、決定してまさに安置すべし。中心には、真言念誦者の明王の印を画いて、その上に瓶を置くべし。

この中心に一瓶、四角に一つずつの計五瓶は、『陀羅尼集経』・『蕤呬耶経』・『金剛手灌頂タントラ』にも共通して見られる、一般的な瓶の配置と言ってよいであろう。六つ目の瓶は、西門の前に配置された軍荼利の瓶である。同様な記述は、『陀羅尼集経』には見られないが、『蕤呬耶経』と『金剛手灌頂タントラ』に見られる。さて、最後の七つ目の瓶であるが、これは曼荼羅の中尊の前に置かれる。

【漢訳書き下し文】

所持の真言主は、台の曼荼羅の内の部尊の下に於て安置せよ。

(『大正蔵』 vol.18, p.624a)

【蔵訳】

sgrub pa'i rig sngags gang yin de// rang gi bdag po'i mdun du bzhaq//

(f.203r3-4, P f.65v4-5)

【試訳】

修法者の明呪であるそれを、自身 [の真言] の主の前に安置すべし。

「台の曼荼羅の内の部尊」・「自身 [の真言] の主」とは、曼荼羅の中心に安置された、受者自身の真言に随い画かれた部主尊であり、その前に、今度は受者が所持している真言の尊格を安置するのである。この記述は、曼荼羅を画き終わり、供養をなし、三種の護摩を行った後のものである。そのように考えると、所持の真言は曼荼羅を構成する尊格では無いようにも思える³⁰。しかし、最終的にはこの自身の所持の真言によって灌頂を行うこととなる。

また、これは軍荼利の瓶にも言えることだが、上記の記述のみでは、ここに瓶が配置されるか否かは、全く分からない。しかし、後に示す瓶を加持する場面においては、既に軍

荼利と所持の真言尊に対して瓶が置かれているため、この二尊に対しても瓶が安置されたと考えてよいであろう。そして、この瓶は他の六瓶と違い、他の經典には見られない、『蘇悉地經』の灌頂を最も特徴づけるものといえる。

第二項 瓶の加持について

瓶の準備が整うと、次にこれらの七つの瓶に対して加持が行われていく。

【漢訳書き下し文】

如法に諸の真言を供養し已り、及び護摩し已り、前の安ける瓶を、為す所の者に随いて彼の真言を誦して、用て加被せよ。①本尊の前に於て安ずる所の瓶は、還りて彼の真言を用いて之を加被せよ。其の②台の内の瓶は、応に明王の真言を用いて、加被を作すべし。門に当りて③軍荼利の為に安置する所の瓶も亦、須く彼の真言を用いて加被すべし。台の曼荼羅の東面の両角に於て安置する所の瓶の④東北の角は、部心の真言を以てし、⑤東南の角は、部母の真言を用てし、⑥西北の角は、能弁の諸真言を用てし、⑦西南の角は、一切の真言を用てせよ。

(『大正藏』 vol.18, p.624b)

【藏訳】

lha rnam thams cad legs mchod de// sbyin sreg ci dgar byas nas ni//
sngar bkod pa yi bum pa la// rang gi sngags kyis mngon par bsngags//
① lha yi mdun na gang 'dug pa// gcig ni rang gi sngags kyis bzlas//
② dkyil 'khor dbus na gang 'dug pa// rig pa'i rgyal pos bzlas brjod bya//
③ sgo yi drung na gang 'dug pa// rdo rje khro bos bzlas brjod bya//
snying po'i rigs kyi rig sngags kyis// ④⑤ shar gyi grwa gnyis bzlas brjod bya//
las kun byed pa'i gsang sngags dang// de bzhin gsang sngags gzhan kun gyis//
⑥⑦ nub kyi grwa gnyis 'dug pa yi// bum pa la ni tshul bzhin bzlas//

(D f.203r4-7, P f.265v5)

【試訳】

全ての諸尊をよく供養し、随意に護摩をなして、以前に安置した瓶に、自身の真言を唱えるべし。

① 〔本〕尊の目の前に安置する一つの〔瓶〕に、自身〔の尊〕(本尊)の真言を唱えるべし。

② 曼荼羅の中心に安置する〔瓶〕に明王〔の真言〕を唱えるべし。

③ 門の前に安置した〔瓶〕に、金剛忿怒〔の真言〕を唱えるべし。

部心の明呪を④⑤ 東の両角〔の瓶〕に唱えるべし。

弁事の真言と、同様にその他の全ての真言を、

⑥⑦ 西の両角に安置する瓶に対して、作法通りに唱えるべし。

下線部の箇所が、上記で確認した七つの瓶である。上記の記述によれば、七つの瓶はそれぞれ異なる真言で加持されることになる。

①の瓶は、曼荼羅の中尊の前に安置した受者が所持している尊格の瓶である。その瓶に

対しては、その尊格の真言で加持を行う。②の曼荼羅の中心の瓶は、曼荼羅の箇所を確認した通り、受者の本尊に随って選ばれた、三部主の何れかの尊の瓶である。漢訳・蔵訳共に明王の真言で加持することが説かれているが、ここでの明王が『蘇悉地経』が規定する仏頂・馬頭・蘇嚩の明王であるのか、釈迦・観自在・金剛手の三部主であるのかは判断がつかない。③の瓶は西門に画かれた軍荼利のために安置した瓶である。軍荼利の瓶はそのまま軍荼利の真言で加持が行われる。以下の曼荼羅の四角に安置された瓶は、若干漢訳と蔵訳で相違が見られる。灌頂に用いる瓶と、その瓶を加持する真言をまとめると以下のようになる。

瓶	漢訳	蔵訳
①本尊の前	本尊の真言	自身の尊の真言
②曼荼羅の中心	明王の真言	明王の真言
③門の前	軍荼利の真言	金剛忿怒(軍荼利)の真言
④東北の角	部心の真言	部心の真言
⑤東南の角	部母の真言	
⑥西北の角	能弁の諸真言	弁事の真言
⑦西南の角	一切の真言	他の一切の真言

後期密教では、所謂「尊勝瓶」(vijayakalaśa)・「一切羯磨瓶」(sārvakarmikakalaśa)・「曼荼羅尊瓶」(maṇḍalayakalaśa)の三種の瓶を灌頂儀礼に用いるようになる。桜井(1996, p.391)では、初期密教ではこのような記述がないことから、瓶と尊格を殊更関連づける解釈はないとしている。しかし、①の本尊の前に配置される瓶は、受者自身の本尊の真言で加持が行われることから「尊勝瓶」と同じ役割を予想させるし、④⑤の部心・部母の瓶は、「曼荼羅諸尊瓶」の役割を備え、③の忿怒尊によって加持される瓶、及び⑥⑦の弁事の真言の瓶は「一切羯磨瓶」と捉えて問題ないと思われる。このように、名称こそないものの、加持の方法やその役割からその芽生えをここに見ることが出来る。また、既に『蘇悉地経』に説かれる真言に関しては、田中(2010)により、初期密教經典でありながら、『大日経』・『金剛頂経』を介せずに後期密教に直結する要素をもっているとの指摘もされている。このことから、『蘇悉地経』は後の後期密教と結びつく要素もあると考えることも出来よう。

第三項 瓶水灌頂

しかし、これらの瓶が灌頂においてどのように用いられるかという点、

【漢訳書き下し文】

諸の作障を除遣せんと欲わんが為の故に、先ず軍荼利の瓶を用いて灌頂に用よ。第四に応に所持の真言を用いて、灌頂に用よ。其の余の二瓶は意に随いて用いよ。

(『大正蔵』 vol.18, p.624b)

【蔵訳】

dang po bgegs rnams bsal ba'i phyir// dbang bskur ba ni rab tu sbyar//

bar du bar ma dag gis ni// mjug tu rang gis bzlas par bya//

(D f.203v2, P f.66r3)

【試訳】

- ①はじめに、障碍等を取り除く為に〔軍荼利の瓶によって〕灌頂が行われるべきである。
②③中間に中間の〔真言〕等〔を誦すこと〕よって〔灌頂をすべし〕。④最後に自身の〔尊の真言〕を誦して〔灌頂すべし〕。

蔵訳はかなりの部分を補ったが、漢訳と合わせるとおよそこのようになる。最初は軍荼利の真言により加持した瓶を用いて受者の障碍を取り除き、最後は自身の本尊の真言で加持した瓶によって灌頂を行う。しかし、その他の瓶はどうかと言え、漢訳では「余の二瓶を意に随いて用いよ」と説かれ、蔵訳では「中間に中間の〔真言〕等〔を誦すこと〕」によって〔灌頂をすべし〕と説かれるのみである。蔵訳では幾つの瓶を用いるか定かではないが、漢訳に従えば四瓶で、二番目と三番目に関しては定まった規定がないようである。『蘇悉地経』の灌頂儀礼で確かなことは、最初は受者の障碍を取り除く為に軍荼利の瓶によって灌頂されること、そして最後に自身の本尊であるところの瓶によって灌頂されるということである。最後が自身の本尊による瓶の灌頂である理由は、まさしく受者がその尊による成就法の悉地を得るためであろう。

- (1) 軍荼利の瓶……障碍を取り除くため
- (2) (3) 他の瓶のうちのどれか二つ……詳細不明
- (4) 受者の本尊の瓶……本尊の成就法の悉地を得るため

第六節 『蘇悉地経』の灌頂の意義

では、『蘇悉地経』が想定する灌頂儀礼の意義について考えてみたい。「除一切障大灌頂曼荼羅法品」の冒頭には以下のように説かれている。

【漢訳書き下し文】

復た次に広く諸物を成就する秘密の妙法を説きて、速やかに悉地せしめん。若し成就の法を起首せんと欲わば、先ず応に諸々の悉地の具を備え弁ずべし。次に応に護摩の法を以て威を本尊と真言とに加えて、及び自ら灌頂すべし。灌頂せんと欲わば、曼荼羅を作り、如法に供養すべし。灌頂を作し已りて、然る後に起首して成就法を作せ。

(『大正蔵』 vol.18, p.626b)

【蔵訳】

de nas gzhan yang gang zhig gis // dngos *grub(P;sgrub D) myur du thob 'gyur ba'i //
rdzas sgrub pa yi cho ga dag // gsang chen rgyas par bshad par bya //
sgrub pa'i phyir ni dgos pa rnams // thog mar yid la legs bsams te //
blo dang ldan pas yo byad ni // thams cad legs par bsog par bya //
sbyin *sreg(D;bsreg P) las kyi cho ga yis // gsang sngags yongs su tshim byas te //

dbang bskur cho ga gsungs pa'ng bya // de nas *sgrub(P;bsgrub D) pa btsam par
bya //

dang por dkyil 'khor bris nas su // cho ga bzhin du legs mchod de //

der ni bdag nyid tshul bzhin du // dbang bskur nas ni las rnam brtsam //

(D f.202r2, P f.264r7)

【試訳】

次に、さらにまた、悉地を速やかに得ることとなる儀軌や、物事を成就する儀軌など、偉大な大秘密を説明しよう。

成就の為に必要なこと等は、先ず初めに、意によいことを思い、賢者が、一切の支具をよく集めるべきである。

護摩作法の儀軌によって、真言を悉く満足させてから、灌頂を儀軌に説かれているようになして、次に成就法を始めるべきである。

先ず曼荼羅を画いて、儀軌通りによく供養して、そこで自ら如法に灌頂をし、諸々の作法を始めよ。

これをまとめると、成就法を始める時には、

1. 悉地の支具を集める。
2. 護摩を行い、真言を満足させる。
3. 灌頂を行う。
4. 成就法をおこなう。

という順序があり、その灌頂の次第として、

1. 曼荼羅作画。
2. 曼荼羅諸尊供養。
3. 自ら灌頂する。
4. 成就法。

と示され、全ての次第は最後の成就法を行うためのものと言える。成就法を行うために、自ら行う灌頂が如何なるものかは、例えば『金剛手灌頂タントラ』の以下の用例から知ることが出来る。

*de nas(D;n.e. P) 'jam dpal gzhon nur gyur pas byang chub sems dpa' zhi ba'i blo
gros la yang 'di skad ces smras so// rigs kyi bu bcom ldan 'das 'khor los sgyur ba
chen po 'jig rten pa dang 'jig rten las 'das pa'i gsang sngags thams cad kyi gong nas
gong du stobs dang pha rol gnon pa dpag tu med pa gsang sngags kyi mgon po'i
sgrub pa nyon sig/ zhi ba'i *gros(P;glos D) thog ma nyid du sngar spyad pa byas pa
dkyil 'khor *mthong(D;'thong P) ba/ dam tshig thob pa gngang ba rdo rje 'khor los
sgyur ba chen po'i dkyil 'khor du dbang bskur ba des/ bcom ldan 'das kyi dkyil
'khor bris la rin po che dang spos dang sman thams cad kyi *bkang(D;bgang P)
ba'i bya ma bum bcu drug 'khor los *sgyur(D;bsgyur P) ba chen po'i sngags brgya
rtsa btgyad bzlas brjod byas pa dag gis spyi bar dbang bskur bar bya'o// dus thams
cad du lha'i gzugs mthong bar *bya'o(D;'gyur ro P)// de nas ri'i rtse mor song la
*slong(D;slongs P) mo'i zas bza' zhing dus gsum du khros byab/

【試訳】その時、文殊師利法王子は寂慧菩薩にまた、次のように語った。善男子よ、世間と出世間の、一切の真言の最上となる力と、他を制圧することに無量なる、真言の守護者たる世尊大転輪の成就法を聞け。寂慧よ、最初に、前行をなして曼荼羅を見て、三昧耶を得て許可され、金剛大転輪曼荼羅で灌頂された者が、世尊の曼荼羅を画き、一切の宝と香と薬によって満たされた十六の瓶に、大転輪の真言を百八遍念誦して、それらによって頂に灌頂すべきである。一切時に本尊の姿を見るべし。次に、山の頂上に行き、乞食を食して、三時に沐浴し、(後略)

この場面は、入壇を終えた者に成就法を説くところである。ここでの成就法を行うには、最初に、「前行をなして曼荼羅を見て、三昧耶を得て許可され、金剛大転輪曼荼羅で灌頂された者が、世尊の曼荼羅を画き、一切の宝と香と薬によって満たされた十六の瓶に、大転輪の真言を百八遍念誦して、それらによって頂に灌頂すべき」ことが必要とされている。『蘇悉地経』の灌頂も同様に、既に入壇を終えた者が成就法を行う前に行う灌頂といえる。『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』、また『大日経』や『金剛頂経』など、灌頂儀礼を説く密教経典には投華得仏が説かれるが、『蘇悉地経』には説かれない。さらに上記の通り、瓶水灌頂では「所持の真言」・「自身の本尊」というように、受者の本尊が定まっていた。このことは、『蘇悉地経』の灌頂の受者が、既に別の灌頂により自身の本尊が決まっているか、或いはそれに準ずる何かしらの方法により予め本尊が定まっていることを示している。

第七節 まとめ

以上『蘇悉地経』の灌頂についてみてきたが、『蕤呬耶経』等の説く阿闍梨位灌頂、『蘇婆呼童子請問経』の説く除難灌頂とは趣の異なるものであった。それは、既に他の経典などにより灌頂を受けた者の修法が成就しない時に、『蘇悉地経』の規則に則り、自身の本尊によって加持した瓶により灌頂することで成就を得るというものである。『蕤呬耶経』の示す四種灌頂に当てはめるならば、正しく成就の灌頂といえる。このような灌頂の目的により、『蘇悉地経』の灌頂には特定の本尊は存在せず、修法者にしたがって本尊が決定するのである。また、所謂台密の三部の大法としての蘇悉地灌頂が如何なるものかという問題に触れないことは冒頭で述べた通りであるが、三崎(1988)が問題にしていることに関して、『蘇悉地経』の性格のみで考えた場合には、この経典が阿闍梨位の灌頂を行わないこと、蘇悉地の灌頂の本尊が定まっていないことが理解される。

1 各品の異同に関しては、大山(1982)、高田順(1996)などに詳しい。また漢訳三本と蔵訳の各品の対応箇所に関しては、伊藤(2000)参照。

2 三崎(1988, p.496)参照。

3 三崎(1988, p.517)参照。

4 木内(1984, p.386)参照。

5 この真言は『陀羅尼集経』にみられる Māmakī の真言「金剛摩磨雞法印呪第十九」とほぼ一致する。「唵 孤蘭怛哩 盤陀盤陀 莎訶」(om kulamdhari bandha bandha svāhā) (『大

正蔵』vol.18, p.845b)

6 この真言の訳は、松長(1998, p.113)を参照した。また、蔵訳の音では *siddhalocani* となるところを、松長(1978, p.60)を参考に *siddhalocane* にした。

7 *kaṭamkaṭe* を「活性化する女よ」とする訳は、松長(1998, p.114)を参照した。

8 別本一の該当箇所は『大正蔵』vol.18, p.657b, 別本二の該当箇所は『大正蔵』vol.18, p.675c。

9 別本一では「灌頂品第三十一」、別本二では「灌頂品第三十三」、蔵訳では「*dbang bskur ba'i cho ga rim par phye ba*」(灌頂儀軌品)

10 別本一では「灌頂品第三十一」別本二では「灌頂品第三十三」、蔵訳では「*dbang bskur ba'i cho ga rim par phye ba*」(灌頂儀軌品)

11 別本一では「光物品第三十二」別本二では「光物品第三十四」、蔵訳では *rdzas byin bskyed pa'i cho ga rim par phye ba*」(事物の威光を起こす儀軌品)

12 別本一では「奉請成就品第三十五」別本二では「奉請成就品第十四」、蔵訳では「*rdzas sta gon bnas pa'i cho ga rim par phye ba*」(事物を準備する儀軌品)

13 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」。蔵訳ではこの品は四つに分かれている。この曼荼羅は、「*de bzhin gshegs pa'i rigs kyi rdzas bsgrub pa'i dkyil 'khor gyi cho ga rim par phye ba*」(如来部の事物の曼荼羅儀軌品)に説かれる。

14 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」。蔵訳ではこの品は四つに分かれている。そして、この曼荼羅も「*de bzhin gshegs pa'i rigs kyi rdzas bsgrub pa'i dkyil 'khor gyi cho ga rim par phye ba*」(如来部の事物の曼荼羅儀軌品)に説かれる。

15 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」。蔵訳ではこの品は四つに分かれている。そして、この曼荼羅も「*de bzhin gshegs pa'i rigs kyi rdzas bsgrub pa'i dkyil 'khor gyi cho ga rim par phye ba*」(如来部の事物の曼荼羅儀軌品)に説かれる。

16 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」。蔵訳ではこの品は四つに分かれている。そして、この曼荼羅も「*de bzhin gshegs pa'i rigs kyi rdzas bsgrub pa'i dkyil 'khor gyi cho ga rim par phye ba*」(如来部の事物の曼荼羅儀軌品)に説かれる。

17 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」。蔵訳では漢訳と以下章立てが異なり、この曼荼羅は、「*padma rigs kyi rdzas sgrub pa'i dkyil 'khor gyi cho ga rim par phye ba*」(蓮華部の事物の曼荼羅儀軌品)に説かれる。

18 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」。蔵訳では漢訳と以下章立てが異なり、この曼荼羅は、「*rdo rje rigs kyi pho nya rdzas sgrub pa'i dkyil 'khor gyi cho ga rim par phye ba*」(金剛部の使者事物の曼荼羅儀軌品)に説かれる。

19 別本一では「補闕少法品第三十六」別本二では「補闕少法品第十五」、蔵訳では漢訳と以下章立てが異なり、この曼荼羅は、「*rdzas sgrub pa'i cho ga rim par phye ba*」(事物の儀軌品)に説かれる。

20 別本一では「被偷成就物却微法品第三十七」別本二では「被偷成物却微法品第十六」、蔵訳では「*rdzas 'phrog pa mod la dgug pa'i cho ga rim par phye ba*」(盗まれた物を即座に集める儀軌品)

21 別本一では「被偷成就物却微法品第三十七」別本二では「被偷成物却微法品第十六」、蔵訳では「*rdzas 'phrog pa mod la dgug pa'i cho ga rim par phye ba*」(盗まれた物を即座に集める儀軌品)

22 ロルフ・ギーブル(2000, p.103)参照。

23 ロルフ・ギーブル(2000, p.104)参照。

24 灌頂儀礼に適用されるかどうかは分からないが、「諸尊加被成就品第三十五」の儀礼の構造を示せば以下の如くになる。浄地法・結護・五宝を埋める・洒水・啓白・供養・地の成就・曼荼羅作画・奉請・供養・護摩・洒水。この最後の洒水は、灌頂儀礼では瓶水灌頂に相当する。

25 大村(1918, pp.412-413), 及び田中(2010, p.93)参照。

²⁶ 大塚(2013, pp.771-772)参照。

²⁷三崎(1988)では、「所持の真言は、その部類に随いて、本尊主の印を画け。所謂、仏頂と蓮花と金剛なり。応に知るべし」の一文に注目し、「胎蔵界の綱格の基本である仏・蓮・金の三部は蘇悉地経によるものであり、そこに蓮華部・金剛部と並んで「仏部」とあるべきところを「仏頂」としているところに注目すべきであろう。すなわち仏頂部の主尊を本尊としているのである。」(三崎 1988, p.518) と、仏頂尊を本尊に推定している。

²⁸ 田中(1989, pp191-192), 及び田中(2010, p.95)参照。

²⁹ 後期密教では「尊勝瓶」(vijayakalaśa)・「一切羯磨瓶」(sārvakarmikakalaśa)・「曼荼羅尊瓶」(māṇḍalayakalaśa)の三種の瓶を灌頂儀礼に用いるようになる。本章第五節第二項参照。例えば、*Vajrāvalī*が規定する瓶に関しては桜井(1996, pp.382-392)に詳しい。

³⁰ 例えば『蘇悉地経』の「請尊加被成就品第三十五」には、曼荼羅を作り、その中央に成就させたい事物を安置し、洒水を行い成就させるという、所謂プラティシュターの儀礼が説かれるが、その対象と考えられるのであろうか。プラティシュターについては、森(2011, pp.179-223)に詳しい。

第三章 『蕤呷耶經』の灌頂儀礼について

第一節 はじめに

『蕤呷耶經』は、不空(705-774)により漢訳された。また、漢訳の他に蔵訳がある。

【漢訳】 『蕤呷耶經』三卷 不空訳

【蔵訳】 *Dkyil 'khor thams cad kyi spyi'i cho ga gsang ba'i rgyud. (*Sarva-maṇḍalasāmānyavidhīnām guhyatantra, 一切の曼荼羅の共通の儀軌の秘密タントラ)*
Toh.No.806, Ota.No.429

『蕤呷耶經』は、その名の通り一切の曼荼羅に適応できる初期密教灌頂儀礼を説く、教科書的な経典¹である。そのため、初期密教灌頂儀礼を知る上で重要な存在と言えるだろう。この経典を確認すると、本經の灌頂儀礼の目的は阿闍梨位を得るための灌頂儀礼と言える。この節では、四種灌頂の内の阿闍梨位を得るための灌頂の次第の確認を行い、その特徴について論じていきたい。

第二節 『蕤呷耶經』の七日作壇法

『蕤呷耶經』に見られる七日作壇法は、『陀羅尼集經』のように、日毎に行うべき所作を説いていない。これは、どちらかという『陀羅尼集經』が特殊なのであって、基本的には『金剛手灌頂タントラ』や『大日經』においてもその事情は同様である。

『蕤呷耶經』の七日作壇法に関しては、高田仁(1970)や大塚(1996, 2013)において既に紹介されている。しかし、両者の儀礼の分け方には相違が見られる。これは、『蕤呷耶經』の内容にその原因を求めることが出来る。経典のみを頼りに、一連の儀礼を再構築しようとする、初日から五日目までの儀礼の区分けが分からないのである。高田仁(1970)は、「第一日より第四日までにおいて曼荼羅を画くべき地面を浄化するため、護身してのち鋤をもって地を深さ一肘量堀（後略）」²というように、初日から四日目までの儀礼を区切ることなく説明していく。それに対して、大塚(1996, 2013)では、日毎に詳細な七日作壇法の再構築をおこなっている。しかし、経典の記述のみからではこのような再構築は不可能である。経典の記述から見て、日にちを確定できるのは六日目と七日目である。そこで、ここでは初日から五日目までと、六日目と、七日目の三つに分けて、以下七日作壇法の内容を確認していきたい。

C. 『蕤呷耶經』の七日作壇法

一日目から五日目	C-1-1. 【蔵訳】 七日間守護 【漢訳】 自身と弟子を結護する 【漢訳】 地神とその地に供養
	C-1-2. 土地の障害物を取り去る
	C-1-3. 土を細かく砕いて埋め直す
	C-1-4. 牛の尿を注ぎ平らにする
	C-1-5. 牛糞を水と和して地面に塗る
	C-1-6. 中央に五穀・五宝を安置

	<p>C-1-7.三日間土地を受持</p> <p>C-1-7-1.【蔵訳】香水を注ぐ 【漢訳】 三日已前に香水で灑浄</p> <p>C-1-7-2.【蔵訳】手で地面を清める 【漢訳】 土地を受持する</p> <p>C-1-7-3.真言を誦す</p> <p>C-1-8.弁事真言で弟子を受持</p> <p>C-1-8-1.童女が作った糸を四十九遍念誦</p> <p>C-1-8-2.弟子を心に念じ三昧に入る</p> <p>C-1-8-3.糸に結び目を作る</p>
六日目	<p>C-6-1.日が昇る時、土地の観察</p> <p>C-6-2.弟子と共に食事</p> <p>C-6-3.日没に沐浴し、新浄衣を着て曼荼羅造壇の地へ行く</p> <p>C-6-4.その土地に大忿怒の真言を誦した香水を洒水</p> <p>C-6-5.塗香を用いて十二量の壇をつくる（白檀曼荼羅）</p> <p>C-6-5-1.手をその壇に按じて曼荼羅主の真言を七遍</p> <p>C-6-5-2.主要尊（ch.諸大尊）の名を心に念じる</p> <p>C-6-5-3.塗香・華・心真言・飲食・焼香・香水・散華などで供養</p> <p>C-6-6.齒木の準備</p> <p>C-6-7.土地と自身（阿闍梨）と弟子の守護</p> <p>C-6-8.諸尊供養</p> <p>C-6-9.護摩</p> <p>C-6-10.食事</p> <p>C-6-11.弟子の結護（護身・三帰・発菩提心・洒水など）</p> <p>C-6-12.瓶の準備</p> <p>C-6-13.齒木の所作</p> <p>C-6-14.香水を飲む</p> <p>C-6-15.供養</p> <p>C-6-16.諸尊を勧請し啓白</p> <p>C-6-17.諸尊を發遣</p> <p>C-6-18.弟子に離貪の法を説き、寝かせる</p>
七日目	<p>C-7-1.夢の内容を聞き吉祥か不吉か占う（不吉な夢をみた場合は護摩を行う）</p> <p>C-7-2.晨朝に、曼荼羅の全ての諸尊の真言を念誦</p> <p>C-7-3.弁事の真言を誦した香水を洒水</p> <p>C-7-4.曼荼羅拵ち</p> <p>C-7-5.僧伽に説法を請う</p> <p>C-7-6.僧伽か比丘に供物を捧げる</p> <p>C-7-7.忿怒を念誦して、師と弟子は沐浴（午後）</p> <p>C-7-8.白衣を着て全ての資具を持って曼荼羅の前へ行く</p> <p>C-7-9.地面に牛尿と牛糞を和して塗る</p> <p>C-7-10.香水を曼荼羅の周りに洒水し掃除</p>

<p>C-7-11.散華</p> <p>C-7-12.道場莊嚴</p> <p>C-7-13.北面一箇所に資具を集め、忿怒王の真言で守護し、安置するべき場所に安置</p> <p>C-7-14.洒水して土地の障を取り除く</p> <p>C-7-15.自身（阿闍梨）と曼荼羅（【漢訳】四方）を守護する</p> <p>C-7-16.吉祥な相があれば、曼荼羅作画を夕方に始める →どちらの相もなければ、三部の諸尊に礼拝して始める →不吉の相があれば、始めない。それでも始める時は息災護摩を行う。</p> <p>C-7-17.曼荼羅主に闍伽を献じる</p> <p>C-7-18.弟子の結護（香水によって浄化・般若経を読み聞かせる）</p> <p>C-7-19.曼荼羅作画</p> <p>C-7-20.召請の台座を安置（北方...如来部，北方...蓮華部，南方...金剛部，西方...諸天）</p> <p>C-7-21.諸尊を召請</p> <p>C-7-22.諸尊供養</p> <p>C-7-23.曼荼羅観察</p> <p>C-7-24.灌頂壇を建立</p> <p> C-7-25.沐浴して諸尊を礼拝</p> <p> C-7-26.曼荼羅の外で東向きになり、吉祥な相がでるまで念誦</p> <p> C-7-27.弟子結護</p> <p> C-7-28.闍伽を献じる</p> <p> C-7-29.瓶の準備（二回目）</p> <p> C-7-30.水瓶の配置</p> <p> C-7-31.道場の準備（幢幡・香炉・門の莊嚴など）</p> <p> C-7-32.曼荼羅の外側に台を安置</p> <p> C-7-33.召請</p> <p> C-7-34.諸尊供養（塗香・華・焼香・飲食など）</p> <p> C-7-35.諸鬼神に施食</p> <p> C-7-36.手洗い沐浴</p> <p> C-7-37.曼荼羅の外で焼香</p> <p> C-7-38.曼荼羅の中に入って闍伽を献じて、焼香</p> <p> C-7-39.観念による供養</p> <p> C-7-40.布供養</p> <p> C-7-41.曼荼羅諸尊の真言念誦</p> <p>C-7-42.護摩</p> <p>C-7-43.弟子結護</p> <p>C-7-44.投華得仏</p> <p>C-7-45.護摩</p> <p>C-7-46.灌頂</p>
--

C-7-47.護摩
C-7-48.曼荼羅説示
C-7-49.布施

以上が、おおよその『蕤呬耶經』に見られる七日作壇法である。漢訳の区分に随えば、それぞれ、

- 「浄地品第四」 C-1-1 から C-1-7
- 「召請品第五」 C-6-1 から C-6-9
- 「揀択弟子品第六」 C-6-10 から C-6-18
- 「摩訶曼荼羅品第七」 C-7-1 から C-7-24
- 「奉請供養品第八」 C-7-25 から C-7-41
- 「分別印相品第九」 C-7-42 から C-7-45
- 「分別護摩品第十」 C-7-46

に当たる。上記の七日作壇法の構成において、C-7-25 から C-7-41 までは、一連の灌頂儀礼に用いるか不明である。この C-7-25 から C-7-41 までは、「奉請供養品第八」に説かれており、その冒頭において、

【漢訳書き下し文】

次に奉請、及び供養の法を説かん。 (『大正蔵』 vol.18, p.766c)

【蔵訳】

de nas gzhan yang lha rnam ni// spyang drang *ba yi(D;ba'i P) cho ga dang//

mchod *pa'i(P;pa D) go rims ji bzhi du// yang dag mdor bsdu bshad par bya//

(D f.154r2, P f.214r6-7)

【試訳】

次に、さらに諸尊を奉請する儀軌と供養の次第を、次の様に簡潔に説こう。

とあり、一連の儀礼を示している可能性がある一方で、C-7-20 から C-7-22 を別立てて詳細に説いている可能性もある。本論では、一連の儀礼として考えているが、別立てしていることも視野に入れ、区別して示した。

さて、『蕤呬耶經』の七日作壇法の枠組みに関しては、『陀羅尼集經』と大きく異なる部分はないであろう。最も異なる部分は、曼荼羅作画の日にちが、『蕤呬耶經』では最終日におかれている所である。この点に関しては、『金剛手灌頂タントラ』や『大日經』と比べた場合には、『陀羅尼集經』の方が特異と言える。

また、『陀羅尼集經』と違い、初日から五日目の所作が区分されていない。七日作壇法における最初の五日間は、『陀羅尼集經』を見るかぎりでは、特に曼荼羅を画くための土地を整える為の作業が中心となるため、厳密な日毎の区分がないように思われる。長文になるが、以下に初日から五日目までに相当すると考えられている箇所を引用し、可能な限り初日から五日目までの所作について考えてみたい。

【漢訳書き下し文】

次に浄地の法を説かん。曼荼羅を作らん時には、七日已前に其の地に往きて、如法に

身を護り、及び弟子を護り、地神、及び其の地を供養し、方に起こりて地を掘り、地の過を除去すべし。若し過を去らずして法を作さば、必ずしも成就せず。是の故に、当に其の地の骨・石・炭灰・樹根・虫窠、及び瓦礫等を除き、尽く去りて浄しめるべし。次に、当に細かに其の掘りし所の土を埴ち、還た其の処を埴ずめ、打ちて堅実ならしめよ。復た、牛尿を以て散じて灑ぎ潤わしめよ。灑ぎ已りて還た打ち、搥ちて平正ならしむること、猶お手掌の如くせよ。次に牛糞を以て水に和し、東北の角より右旋して泥れ。復た、中心を穿つに小抗を以てし、五穀、及び五種の宝・五種の葉草を持誦し、抗中に安じ、還た平正ならしめよ。是の如く宝を置き、及び浄治し已らば、次に応当に是の受持地法を作せ。又た、三日已前に各の本部の弁事の真言を用いて、香水を持誦せよ。日没の時に用いて其の処に灑げ。次に右手を以て其の地上を按じ、曼荼羅主の真言を持誦して、心を以て受持せよ。此れを受持地法と名づく。次に復た、応に弁事の真言を以て弟子を受持すべし。童女を用いて線を合わせ、弁事の真言を以て各の持誦すること七遍せよ。心を以て一一の弟子を観念し、及び名号を称て、更に持誦すること七遍し、一誦一結し乃至七結せよ。是のごとく弟子を受持せば、諸もろの諸難無からん。

(『大正蔵』 vol.18, p.762b)

【藏訳】

de nas gzhan yang sa dag ni// sbyang bar bya *bar(D;ba P) rab tu bshad//
 zhag bdun gyi ni nang logs su// ji ltar rigs pas bsrung byas te//
 *'jor(D;gzhor P) gyis(D;gyi P) sa ni bzlog byas shing//de nas zug rngu dbyung bar
 bya//
 zug rngu bcas pa'i sa gzhi ni// las byas pa dag 'grub mi 'gyur//
 zug rngu nyes pa rus pa dang// gyo mo dang ni thal ba dang//
 sdong dum dang ni tsher ma dag// rab tu *sgrims(P;bsgrems) te ma lus dbyung//
 de nas tho bas bong ba *dag(P;dang D)// bkrum nas zhib mor byas te *bcag(D;gcag
 P)//
 de nas *ba yi(D;ba'i P) gcin gyis ni// yang nas yang du gdab bya zhing//
 lag mthil lta bur mnyam byas shing// ba yi lci ba chur sbyangs nas//
 shar phyogs nas ni mgo btsugs te// blo dang ldan pas legs par byug/
 de nas *de yi(D;de'i P) dbus su ni// khung bu cung zhig brkos nas der//
 'bru rnamdang ni rin chen kun// sngags kyis btab *ste(D;de P) gzhug par bya//
 de ltar sbyangs shing dbyig dag *gis(P;gi D)// dbyig dang ldan par byas nas ni//
 blo dang ldan pas ci rigs par// sa gzhi yongs su *gzung(D;bzung P) bya ba//
 yang dag *bsdams(P;bsnams D) pas zhag gsum na// las kun byed pa'i gsang sngags
 dang//
 gang *gi(D;gis P) dkyil 'khor gang yin pa// de dag gis ni yongs gzung bya//
 gcig gis dri yi chu yis ni// dngos su *bsang(D;bcang P) gtor bya ba ste//
 *cig(D;gcig P) shos kyi ni lag pa yis//sa la bram ste mngon par *bsngags(D;sngags
 P)//
 blo yis yongs su gzung bya na// gnas ni yongs su *bzung(D;gzung P) ba yin//

las kun byed pa'i gsang sngags kyis// de nas slob ma yongs su * bzung(P:gzung D)//
bu mo gzhan nus bkal ba'i skud// blangs nas bzhi bcu rtsa *dgu(D:dgus P) bzlas//
slob ma rnams ni blos bsams nas// mnyam par *gzhag(D;bzhag P) ste mdud pa
bor//

de nas slob mas yongs bzung nas// las la bgegs ni med par 'gyur//

*sang(D:sad P) ni dkyil 'khor bri ba'i tshe// do nub lta bu sta gon gnas//

(D f.144r2-7, P ff.205r3-205v1)

【試訳】

次に、さらにまた地を浄化する所作を説明しよう。

七日の間、如応に守護して、

鍬で地を掘って、次に異物を取り出すべし。

異物を有する土地では、事業などが成就しないであろう。

過失のある異物たる骨と瓦礫と灰と、

倒木と棘などを、注意深く残り無く取り出すべし。

次に、槌によって土塊を砕き、細かく粉碎すべし。

次に、牛の尿によって、繰り返し撒くべし。

そして、掌のように均一にして、牛の糞を水で清め、

東方から始めて、賢者はよく塗るべし。

次に、その中央に小さな穴を掘り、そこに

諸もろの穀物と全ての宝を、真言によって印じて安置すべし。

このように清めて、宝によって宝を有する [土地] にして、

賢者は [仏・蓮・金の] 部族に応じて土地を受持すべし。

[部族ごとの] 制限によって、三日間弁事真言と、

ある [尊格の] 曼荼羅の [真言]、それらによって受持すべし。

最初に、[牛の] 尿を洒いで、

二番目に手で地面を按じて真言を誦すべし。

賢者は、受持をなすならば、場所を受持して、

弁事真言によって、次に弟子を受持すべし。

童女が紡いだ糸を取り、四十九遍念誦して、

弟子達を心によって観念して、結び目をつくるべし。

次に弟子を受持すると、事業の障礙が無くなるであろう。

翌日曼荼羅を画く時、今夜のように備えているべし。

以上が『蕤呬耶經』に説かれる七日作壇法の初日から五日目までの儀礼である。上の引用からその間に行われる儀礼は、以下のように整理できる。

- ・ C-1-2.地面を掘って、骨・瓦礫などの障害物を取り除く。
- ・ C-1-3.土を細かく砕いて埋め直す。
- ・ C-1-4.牛の尿をその土地に撒く。
- ・ C-1-5.牛糞を水と混ぜて地面に塗る。
- ・ C-1-6.土地の中央を掘り、五穀・五宝・五薬を埋める。

- ・ C-1-7.土地を受持する。
- ・ C-1-8.弟子を受持する。

この記述に対して高田仁(1970)は、第一日より第四日までにおいて C-1-2.から C-1-6.までの所作を日毎に分けることなく述べ、五日目の所作として C-1-7.と C-1-8.の所作を示している³。大塚(1996, 2013)は、初日に C-1-2 から C-1-4 の所作、二日目に C-1-5.の所作、三日目に C-1-6.の所作、四日目に弁事真言で加持した香水を洒水する所作、五日目に C-1-7.と C-1-8.の所作という次第を示している。四日目の所作に関しては、漢訳に「三日已前に各の本部の弁事の真言を用いて、香水を持誦せよ。日没の時に用いて其の処に灑げ」とあることから、七日目より数えて三日前の第四日に、香水を洒水する儀礼を示したものである。高田仁(1970)は蔵訳のみを参照して儀礼構築をしたため、その所作を示さなかったのであろう。漢訳のその部分における蔵訳の該当箇所は、「三日間弁事真言と、ある[尊格の]曼荼羅の[真言]、それらによって受持すべし。最初に、[牛の]尿によって洒水をなして、二番目に手で地面を按じて真言を誦すべし」というように、五日目の土地を受持する儀礼の中に組み込まれている。また、漢訳で「三日已前」となっている箇所も、蔵訳では「三日間」となっているなど、漢訳と蔵訳を対照させただけでも、両者に違いが見られるため、儀礼の構成を考えることが困難と言える。

文献上でのみの確認となるため、本来の七日作壇法の姿を再構築することは不可能であるが、ここでは同じく七日作壇法が説かれる『陀羅尼集経』や『瞿醯经』を引用している『大日経疏』と比較しながら、上記の引用分を理解していきたい。

初日

第一章で確認した『陀羅尼集経』の七日作壇法では、上記の「C-1-2.地面を掘って、骨・瓦礫などの障害物を取り除く」、「C-1-3.土を細かく砕いて埋め直す」、「C-1-4.牛の尿をその土地に撒く」の三つの所作が初日に見られた。また、『大日経疏』では、

最初の日に於て、阿闍梨は当に大日如来の自性に住して、然る後に地神を警発すべし。嚴身の方便、皆な供養次第の中に説くが如し。警発し已らば、即ち不動尊の真言を用いて之を加護すべし。然る後に地を掘り、如法に扱治すべし。彼、応に先ず中心を一肘量掘り扱ひ畢らば、還復之を填めるべし。若し盈満して余有れば上地と為し、旧の如くならば中と為し、満たざるならば下と為す。是の如く次第に諸過を除き已りて、掘りし所の土を細かに治して、稍稍之を填めて、潤すに牛液を以てし築きて堅固ならしめよ。平正なること猶手掌の如し。

(『大正蔵』 vol.39, p.621a)

とあり、『陀羅尼集経』と『大日経疏』の二つの初日に関する記述から、『蕤呬耶经』も C-1-2 から C-1-4 までの所作を初日に想定できるであろう。

二日目

次に「C-1-5.牛糞を水と混ぜて地面に塗る」の作法について見ていく。『陀羅尼集経』では、二日目に般若の呪を誦した香泥を地に塗り、牛糞を塗る作法は三日目と四日目になっている。『大日経疏』では、前の引用箇所に続き「次に瞿摩夷(牛糞 gomaya)と瞿摸怛囉(牛

尿 gomūtra)とを用いて和合し之に塗れ」(『大正蔵』 vol.39, p.621a)とあり、この作法を初日に行うべきか、或いは「次に」を翌日の意味にとって二日目に行うべきか判然としない。日本の真言宗では、伝統的にこの作法は二日目のような⁴。大塚論文でもこの作法を二日目としている。

三日目

次は、「5.土地の中央を掘り、五穀・五宝・五薬を埋める」所作である。『陀羅尼集経』ではこの作法は三日目に行われていた。そして、『大日経疏』でも、

凡そ扱地平治し了らば、其の方分を知りて、即ち曼荼羅の中心深さ一肘許りを穿ち、成弁諸事の真言を用いて、五宝と五穀と五薬とを加持して其の中に安置すべし。

(『大正蔵』 vol.39, p.621a)

とあり、初日などの所作によって造壇の土地が平らになったら、曼荼羅の中心に一肘量くらいの穴をあけ、その中に五宝と五穀と五薬とを加持して安置するのである。次に、

是の如く安置し了らば、更に復た浄く塗り極めて平正ならしめよ。応に灌頂せんと欲する瓶を取りて、貯るに浄水を以てせよ。大いに満たしむること勿れ。諸の花菓を挿し、中に五の宝と穀と薬とを置き、宝を埋めたる処に之を置くべし。

(『大正蔵』 vol.39, p.621a)

とあるように、五宝等を埋めた場所の上に、灌頂の時に用いる瓶を安置するのである。そして、その灌頂の瓶に対して、

第三日に瓶を置く自り以後は、当に日日三時に、弁事の真言を誦すること一百八遍し、此の瓶を加持し、然して後に余の事業を作すべし。

(『大正蔵』 vol.39, p.621b)

とあることから、瓶を安置する日が第三日目であり、その瓶は五宝などを埋める直後に行われることから、この五宝などを埋める所作も三日目と理解される。

四日目・五日目

四日目と五日目の所作は、漢訳と蔵訳で異なると考えられる部分である。蔵訳の場合は、三日間土地を受持することが示され、その手順として、「C-1-7-1.香水を注ぐ」・「C-1-7-2.手で地面を清める」・「C-1-7-3.真言を誦す」ことが説かれている。このことから、三日目から五日目の三日間、C-1-7-1 から C-1-7-3 までの所作を毎日行うことが予想される。これは、『陀羅尼集経』が二日目から五日目までの間地面に香泥などを塗り続けることに類似している。これに対して、漢訳では、「三日已前に各の本部の弁事の真言を用いて、香水を持誦せよ。日没の時に用いて其の処に灑げ。次に右手を以て其の地上を按じ、曼荼羅主の真言を持誦して、心を以て受持せよ。此れを受持地法と名づく」とあるため、「C-1-7-1.香水を注ぐ」が四日目の所作になり、次の右手で土地を按じて真言を誦す所作が五日目と解釈される。これは、特に『大日経疏』と一致する。『大日経疏』では、

第四日の暮に至り、次に香水の真言を用いて香水を加持すること、或は一百八遍、乃至千遍し、然して後に灑浄すべし。

(『大正蔵』 vol.39, p.621b)

と、灑浄を四日目の所作にしている。その一方で、

第五日の暮に至り、復た当に次第に諸の法則を具すべし。好く自ら厳身して曼荼羅の位に入ると観じて、奉請結護等、一周備し竟りて、当に不動明王か、或は降三世尊を誦して、密印と相応して一百八遍満たし此の地を加持すべし。阿闍梨の言く、第三日より以去、毎日、三時の念誦の時には、皆な不動真言を誦すること一百八遍し、用て地を加持すべし。

(『大正蔵』 vol.39, p.623b)

五日目の暮れに地の加持を行うが、この作法を、第三日目より毎日行うことが阿闍梨の口伝として示されている。後者の場合には、三日目・四日目・五日目の三日間地を受持する所作が行われると言える。このように考えると、蔵訳のように三日間行うことも想定出来る。ただし、灑浄と土地の受持の所作は別の作法のようである。

以上のことから、二日目～五日目に関しては、下の二通りが考えられる。

	二日目	三日目	四日目	五日目
A	C-1-4	C-1-5, C-1-6	C-1-6	C-1-6
B	C-1-4	C-1-5	C-1-6-1	C-1-6-2, C-1-6-3

A. 漢訳、『大日経疏』系統

B. 蔵訳、『陀羅尼集経』、阿闍梨の口伝系統

『蕤呬耶経』の七日作壇法を、可能な限り再構成しようと試みたが、その試みは上手くいかなかった。七日作壇法においては、六日目と七日目の区分ははっきりしているが、その他の日程については、未だ不詳である。ただし、初日の儀礼に関しては、『陀羅尼集経』や『大日経疏』と比較する限りでは、上記の通りと言えよう。

第三節 『蕤呬耶経』の曼荼羅

『蕤呬耶経』の曼荼羅は、田中(2010)と大塚(2013)において言及⁵されているように、西方を正面とする三重構造をとる。諸尊の配置は、『陀羅尼集経』や『蘇悉地経』と同様に、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部を配置する三部立ての曼荼羅である。また、三重構造に対して以下のような規定も説かれている。

【漢訳書き下し文】

一切の本尊を内院に置き、其の次の諸尊を第二院に置き、其の諸の護世天を当に外院に置くべし。此れは是れ、都ての曼荼羅法を説かんが為なり。或いは本法の如く、彼に依って安置せよ。

(『大正蔵』 vol.18, p.764b)

【藏訳】

lha yi gtso bor gyur pa rnams// rtag tu dkyil du dgod par bya//
*de yi(D:de'i P) lhag ma'i dkyil 'khor ni// gnyis pa dag tu dgod par bya//
'jig rten skyong ba la sogs pa// dkyil 'khor gsum pa bsdu bar bshad//
de las gzhan rnams ji skad du// bshad pa de bzhin kho nar dgod//
(D f.148r7-148v1, P f.209r5-7)

【試訳】

主要な尊格などは、常に中心に安置すべし。
余り [の諸尊] の曼荼羅は、二重などに安置すべし。
護世 [天] などは、曼荼羅の第三重に集めるべきと説かれた。
それ以外の諸尊は、所説の通りに安置すべし。

これによれば、曼荼羅の中心には主尊を安置し、二重にはそれ以外の尊格を安置し、護方天などの諸天を外院に安置する。そして最後の「それ以外の尊格」は、經典の所説通りに安置することが指示されていることが分かる。この諸尊配置の方法は、『陀羅尼集経』や『蘇悉地経』の曼荼羅にも当てはまる。

本経の曼荼羅に配置される諸尊は、おおよそ以下の通りである⁶。

- ・内院
 - 曼荼羅主
- ・二重東面
 - 仏世尊・無能勝(Aparājita)・仏眼(Buddhalocanā)・如来毫相(Tathāgatorṇā)・如来舍悪底(Tathāgataśakti)・輪王仏頂・超勝仏頂・如意宝幢・諸使者
- ・二重北面
 - 観自在・馬頭・白衣(Pāṇḍaravāsini)・耶輸末底(Yaśomatī)・大白尊(Mahāśvetā)・一髻尊(Ekajaṭī)・多羅(Tārā)・徹唎(Gaurī)・大吉祥(Mahāśrī)・円満尊
- ・二重南面
 - 金剛手・甘露軍荼利・莽摩計(Māmaki)・金剛鉤(Vajrāṅkuśa)・金剛拳(Vajramuṣṭi)・遜婆(Śumbha)・般坦尼訖涅婆(Pādanikṣepa⁷)・金剛棒(Vajradaṇḍa)・不淨忿怒(Krodhacchuṣma)
- ・二重西方 (門)
 - 難陀・優波難陀
- ・外院東面
 - 文殊師利・大勢至・仏長子・虚空蔵・成就義・無垢慧・弥勒・賢劫千菩薩
- ・外院
 - 一周に渡って護方天などの諸天を配置

曼荼羅の中尊であるが、本経は本尊を特定しないようである。經典中には、「曼荼羅主」と説かれるものの、曼荼羅を画く箇所ではその尊格に対する言及はない。これは、本経が

一切の曼荼羅の通則を説く経典であるためであろう。これまで見てきた『陀羅尼集経』第十二巻の曼荼羅に於いても、『蘇悉地経』の曼荼羅に於いても、受者や修法者によって中尊は異なっている。これに関して『蕤呬耶経』の C-6-16 の啓白の内容を見ると、

【漢訳書き下し文】

某甲の明王大尊に帰命す。我今、明日、大慈悲を以て曼荼羅を作らん。弟子を愍れんが為の故に。及び、諸もろの大尊を供養せんが為の故に。

(『大正蔵』 vol.18, p.763b)

【蔵訳】

'di zhes bya ba'i bcom ldan 'das// *rig(D;rigs P) sngags rgyal la phyag 'tshal lo//
bdag ni brtse bar gyur nas su// slob ma rnams la *brtseb(D;rtseb P) dang//
khyed rnams la yang mchod pa'i phyir// sang ni dkyil 'khor 'dri bar 'tshal//

(D f.146v2-4, P f.207v2-3)

【試訳】

某という世尊明王に帰命します。

私は慈愛の心を抱き、弟子たちを慈愛し、

また、あなた方を供養するために、明日曼荼羅を画こうと思います。

とある。内容を見てみると、特に曼荼羅の中尊に対する帰命を表す箇所であるが、その尊格名が「某という世尊明王」となっている。これは恐らく、その時々造壇する曼荼羅によって中尊が異なるためであろう。以上のことから、本経の曼荼羅に特定の本尊が説かれないことが分かる。

第四節 『蕤呬耶経』の灌頂の特徴

第一項 灌頂の目的

『蕤呬耶経』の灌頂儀礼の特徴について論じていきたい。曼荼羅を画く日にちについて『陀羅尼集経』第十二巻では、六日目の夜の受法の弟子が寝ている間、既に入壇を済ませている弟子とともに画いていた。これに対して、『蕤呬耶経』では七日目に受法の弟子と共に画くようになる。『陀羅尼集経』の場合は、入門儀礼という性格上、投華の後まで弟子に曼荼羅を見せないために上記のような次第構成ができたと考えられる。しかし『蕤呬耶経』の場合は、阿闍梨位を得るための灌頂であり、教誡の詞⁸に注目すると、

【漢訳書き下し文】

汝は今、已に曼荼羅阿闍梨、持明蔵者と成る。諸々の仏・菩薩、及び真言主・一切天神が、已に共に汝を知れり。若し人有りて法を作す器に堪えたりと見れば、彼を愍愍せんが故に、与に曼荼羅を作り、教えて持誦せしめよ。

(『大正蔵』 vol.18,p.771a)

【蔵訳】

*da(D;de P) ni dkyil 'khor slob dpon 'gyur// gsang sngags rgyud kyang 'dzin par

'gyur//
 sangs rgyas byang chub sems dpa' dang// lha rnams kyang ni kun gyis
 *bkur(D;bskur P)//
 sems can rnams la snying brtse'i phyir// khyod kyis dkyil 'khor cho ga bzhin//
 nan tan bskyed de bri bar byos// sgrub pa po yang rgyud la sbyor//
 (D f.163r6-7, P f.223r3)

【試訳】

今、曼荼羅阿闍梨となり、真言とタントラをもまた持つ者となった。
 仏と菩薩と諸天もまた、全てが尊敬をなす。
 衆生たちを憐愍せんが故に、汝は曼荼羅儀軌の通りに、
 努力してそれを画きなさい。成就者はまた、タントラに相応すべきである。

と説かれ、この灌頂が阿闍梨位を得るために行われたことと、阿闍梨になった者は、衆生たちのために曼荼羅を画いていくことが示されている。これは受者が、灌頂の後に阿闍梨となれば、当然曼荼羅を画くことが可能であることを示している。つまり、阿闍梨位の灌頂の受者は、灌頂を受ける前に既に曼荼羅を画く訓練を積んでいるものと思われる。ここで阿闍梨と共に曼荼羅を造壇することが可能な理由も、そのためであろう。このように、曼荼羅を画くことや、多くの曼荼羅の違いを知っていることは阿闍梨の資格として「阿闍梨相品第二」にも見られる⁹。灌頂の目的が阿闍梨位を得るためであることは、以下の引用文からも知られる。『蕤呬耶經』は一連の灌頂儀礼を説いた後に、四種の灌頂について以下のように説いてる。

【漢訳書き下し文】

凡そ曼荼羅に入るに必ず四種の灌頂あり。一には除難、二には成就、三には増益自己、
四には得阿闍梨位なり。是の如きの灌頂の法は前に已に広説せり。

(『大正藏』 vol.18,p.722a)

【藏訳】

*lha yi(D;lha'i P) rigs rnams mthong ba las// dbang bskur ba ni rnam pa bzhi//
 bla ma mnyam par bzhag pa yis// de dag shes nas ci rigs bya//
 slob dpon go 'phang thob pa'i phyir// dang po yongs su bsgrags pa yin//
 rig sngags rnams ni bsgrub bya'i phyir// gnyis pa legs par bshad pa yin//
 bgegs rnams rab tu gzhom pa'i phyir// gsum pa rab tu bsgrags pa yin//
 bzhi pa 'byor pa thob pa'i phyir// cho ga rgyas pa de bshad do//
 dang po cho ga rgyas par ni// nga yis thog mar bshad pa yin//

(D f.166r5-7, P ff.225v7-226r1)

【試訳】

尊の部族等を見ることより灌頂は四種である。
 師は三昧によってそれらを知り、部族に応じてなすべし。
阿闍梨位を得るために第一が述べられた。
 諸々の明呪を成就するために第二が説かれた。
 障碍等をよく降伏するために第三が述べられた。

第四は富を得るのためにその廣大儀軌が説かれる。

第一の廣大儀軌を我は最初に説いたのである。

下線部に注意すると、『蕤呬耶經』で説いてきたのは阿闍梨位灌頂である、と読み取ることが出来る。そして、阿闍梨位灌頂を中心に説きながらも、他の三つの灌頂についても言及しているという点では、經題通りあらゆる儀礼に共通する規則を説く經典と言えよう。以下に見ていく箇所においても、本經の灌頂が阿闍梨位を得るためのものであることに注意しながら見ていきたい。

第二項 灌頂の方法について

次に、阿闍梨位を得るための灌頂の儀礼の方法についてみていきたい。

【漢訳書き下し文】

其の阿闍梨は普く応に曼荼羅中の一切の諸尊を頂礼すべし。灌頂の為の故に、至誠に啓請せよ。即ち応に前に持誦すること百遍せし所の瓶を持し奉るべし。徐徐に当に曼荼羅を遶るべし。遶ること三匝し已らば、復た三種の真言を以て其の瓶を持誦せよ。其の頂上に於いて手印を作り、並びに根本の真言を誦せ。還つて此の真言を誦して、彼に灌頂を与えよ。

(『大正蔵』 vol.18,p.770c)

【藏訳】

mdor na de la sogs pa yi// cho ga rgyas pa byas nas su//
yid kyis dkyil 'khor lha kun la// mkhas pas gsol ba btab nas ni//
bum pa bzlas brgyar byas la// de ni legs par blangs nas su//
dkyil 'khor dal *bus(D;bas P) lan gsum bskor//
rtsa ba'i gsangs kun 'don cing// blo dang ldan pas dbang bskur bya//
de nas phyag rgya bcings nas su// gsang sngags blos ni spyi pos *gtugs(D;gtug P)//
(D f.163r1-3, P f.222v5-7)

【試訳】

略説すれば、それらの儀軌を広く行うには、
観想によって全ての曼荼羅諸尊を、賢者は勧請して、
念誦を百遍なした瓶をよく持ち、ゆっくりと曼荼羅を三度遶る。
すべての根本真言を唱え、智者によって灌頂がなされる。
次に印を結び、真言の智者は頭頂につけるべし。

この記述に依ると、阿闍梨は灌頂に際して、まず曼荼羅の諸尊全てを勧請し、瓶を持ち出し、曼荼羅を三度巡り弟子の所に来る。漢訳のみここで三種の真言によって改めて瓶の加持が行われる。そして、根本の真言を誦して印を弟子の頭上につけるのである。この一連の次第は、『陀羅尼集經』に共通する部分が多い。そこで、両者を比較しながら、目的の違いによって生じた相違点を指摘し、それを以て阿闍梨位を得るための灌頂の特徴を探りたい。

第三項 『陀羅尼集經』との比較

『陀羅尼集經』では、灌頂を行う時、曼荼羅から瓶を取り弟子の所に至り、投華得仏によって結縁した尊格を確認する。そして、弟子が答えた尊格の印を頭上につけ、その印中に華を入れ、結縁の尊格の真言を誦しながら灌頂を行うという次第であった。『蕤呬耶經』では、印中に華は置かないものの、次第の構成としては一致する部分が多い。両者において相違する部分は、『陀羅尼集經』が受者結縁の尊格によって灌頂がされたのに対して、『蕤呬耶經』では「すべての根本真言」となっている。漢訳の該当箇所でも「根本の真言を誦せ」となっている。以下にこの根本の真言について考察していきたい。

第四項 根本の真言について

まず、ここでの「根本真言」が何であるか確認していきたい。『蕤呬耶經』では、

【漢訳書き下し文】

曼荼羅主の根本真言、或は心真言を用いて護身を作せ。

(『大正蔵』 vol.18, p.766c)

【蔵訳】

bsrung ba rtsa ba'i gsang sngags sam// yang na *de yi(D;de'i P) snying pos bya//

(D f.154r6, P f.214v2)

【試訳】

護身は、根本真言か、またはその心真言によってなすべし。

と、根本の真言か心真言か、或いはその両方を用いて行う所作がいくつか説かれる。このように、ここでの根本真言は、何か特定の真言を指しているのではなく、心真言に対しての根本真言という意味である。では、「根本の真言すべて」が何を意味しているのか。以下の用例から探していきたい。「奉請供養品」第八には、以下のように説いている。

【漢訳書き下し文】

次に奉請、及び供養の法を説かん。曼荼羅を作り畢り、及び觀視し已らば、外に出て灑浄せよ。面を東に向け、一切諸尊を礼して好相を取れ。曼荼羅主の真言を念誦するか、或は部の心真言を誦して、心をして散乱せしめることなかれ。

(『大正蔵』 vol.18,p.766c)

【蔵訳】

de nas gzhan yang lha rnam ni// spyang drang *ba yi(D;ba'i P) cho ga dang//

mchod *pa'i(P;pa D) go rims ji bzhi du// yang dag mdor bsdu bshad par bya//

dkyil 'khor cho ga bzhi bris nas// nye reg byas shing gtsang bar bya//

lha rnam la yang phyag byas nas// bzang ngam mi bzang *brtag(D;rtag P) par bya//

phyi rol shar phyogs kha bltas nas// yid la dkyil 'khor bdag po yi//

snying po 'am gsang sngags kun zlo shing// mtshan ma dag ni brtag par bya//
(D f.154r2-3, P f.214r6-8)

【試訳】

次に、さらに諸尊を奉請する儀軌と供養の次第を、次の様に簡潔に説こう。曼荼羅を儀軌通りに画いたら、沐浴して清浄になるべし。諸尊をまた礼拝して、[画いた曼荼羅の] 良し悪しを觀察すべし。[曼荼羅の] 外で東方に顔を向け、意において曼荼羅主の心真言か、或はすべての真言を唱えて、出来栄えを觀察すべし。

これは、曼荼羅を画き終わった後、諸尊を奉請し供養する前に、画いた曼荼羅に不備がないか觀察するところである。この部分を見てみると、漢訳と蔵訳で根本真言と心真言が入れ替わっているものの、曼荼羅主の真言によるか、別の方法によるかの二択が指示されている。曼荼羅主の真言を唱える以外の方法は、漢訳ならば「部の心真言」であり、部主尊の心真言を用いるのであろう。『蕤呬耶經』の場合は、釈迦と観音と金剛手である。蔵訳ならば「すべての真言」とあるので、曼荼羅諸尊各々の真言を全て唱えるということになるであろう。他にも奉請の場面では、

【漢訳書き下し文】

前の如く弁ぜし所の闕伽を執持して、各々本真言を以て諸尊を奉請せよ。或は、また都て曼荼羅主の真言を用いて、都て諸尊を請え。或は、本法の諸説に依りて是の如く奉請せよ。

(『大正蔵』 vol.18,p.767a)

【蔵訳】

mchod yon cho ga snga ma bzhin// ma yengs par ni sbyar nas su//
so so sngags kyis ci rigs par// mkhas pas spyen ni drang bar bya//
dkyil 'khor bdag po'i gsang sngags sam// yang na thams cad snying pos bya//
sngags rgyud las ni ci bshad pa// de bzhin du ni spyen drang ba'o//

(D f.155v1-4, P f.215v3-5)

【試訳】

闕伽を、前の儀軌通りに集中して用い、
各々の真言によって部族に依りて、賢者は[諸尊を]奉請すべし。
曼荼羅主の真言か、或は心真言によって一切[諸尊の奉請を]なすべし。
真言タントラに説かれている通りに招くのである。

と説かれている。曼荼羅の諸尊の奉請の方法は他にもいくつか説かれる¹⁰が、ここで注目したいのは、その方法として、曼荼羅主の真言を用いるか、或いはそれぞれの諸尊の真言によって行かうかという点である。このような、曼荼羅に画かれた全ての諸尊の真言を唱える所作が『蕤呬耶經』には見られる。他にも、七日目の朝には、

【漢訳書き下し文】

次に晨朝時に於いて、自ら心に念誦すべし。新浄衣を著て、曼荼羅に於いて用いる所の真言を、先ず須く熟誦すべし。

(『大正蔵』 vol.18, p.764a)

【蔵訳】

dkiyl 'khor gyi ni gsang sngags kun// nang par rjes su dran byas nas//
gos dkar *bgos(D;dgos P) shing ma yengs par// dkiyl 'khor gyi ni drung du 'gro//
(D f.147v5, P f.208v4)

【試訳】

曼荼羅の全ての真言を、早朝に念誦して、
白衣を着て、集中して曼荼羅の前に行くべし。

と、曼荼羅の諸尊すべての尊格の真言を念誦することが説かれている。さらに、灌頂儀礼が終わり、諸尊を発遣する所作をみると、

【漢訳書き下し文】

各各本真言を以て如法に発遣せよ。(『大正蔵』 vol.18, p.772a)

【蔵訳】

so so'i sngags kyis ci rigs par// de nas slar ni gshegs su gsol// (D f.164r7, P f.224r3)

【試訳】

各々の真言によって部族に応じて、その時再び発遣すべし。

以上のことを念頭に、灌頂の場面を改めて見てみたい。すると、ここで考えられる蔵訳の「すべての根本真言」は、文字通り曼荼羅の諸尊各々すべての真言で灌頂を行うことを意味していると思われる。

漢訳の「三種の真言」と「根本の真言」は、なお未だ詳細不明であるが、蔵訳で「曼荼羅主の心真言か、或は真言のすべてを唱えて」となっている箇所を漢訳では「曼荼羅主の真言を念誦するか、或は部の心真言を誦して」と「真言のすべて」の箇所を「部の心真言」としていることから、曼荼羅諸尊すべての真言を唱える代わりに、仏・蓮・金の各部の真言の三種と、曼荼羅主の根本真言を意味しているとも考えることも可能である。何れにしても、『蕤呬耶経』の灌頂儀礼では、その瓶加持に曼荼羅の諸尊すべてが関わっていると言えるであろう。

第五節 まとめ

『蕤呬耶経』の一連の灌頂儀礼は、第一章で確認してきた『陀羅尼集経』と同様の構造をとることが確認できる。その一方で、菩提心を発す行為など、『陀羅尼集経』の段階では見られなかった所作もあった。

『陀羅尼集経』と比較した場合に大きく異なることは、灌頂の目的と瓶水灌頂の方法と言える。これは『蕤呬耶経』の灌頂が阿闍梨位灌頂であることが大きな要因であろう。上記で見てきた他の経典のように、結縁の尊格、或は受者の本尊によって加持された瓶ではなく、曼荼羅の全ての尊格による灌頂となる。弟子がこの灌頂によって阿闍梨になれば、後には当然弟子を取ることになる。そして、その弟子が入壇した際に、曼荼羅上に画かれた全ての諸尊の印や真言を伝授出来る立場でることが求められる。即ち、阿闍梨位の灌頂

において、全ての諸尊の真言によって灌頂されるのは、この灌頂によって阿闍梨となる弟子が、曼荼羅上の諸尊を全て成就するためであろう。

1 曼荼羅の造壇については高田仁(1970)、七日作壇法による灌頂儀礼の全体像については大塚(2013)、及び曼荼羅については田中(2010)参照。

2 高田仁(1970, p.6) 参照。

3 高田仁(1970, p.6)参照。

4 『密教大辞典』「七日作壇法」の覧(pp.974-975) 参照。

5 田中(2010, pp.90-92), 及び大塚(2013, pp.943-946)参照。

6 田中(2010, pp.90-92), 及び大塚(2013, pp.943-946)参照。

7 般坦尼訖涅婆を Pādanikṣepa と想定することについては、大塚(1996, p.127)参照。

8 該当箇所梵文が、*vajrāvalī*に見られることが、桜井(1996)によって報告されている。(桜井 1996, p.474)参照。

9 【漢訳書き下し文】「復、善巧有りて深く大乘を信じ、経典を愛慕し、普く秘密真言行門を学ぶ。並びに一切の曼荼羅法に明るく、善く分量を知る。(中略)明らかに大手印等の一切の諸印を解し、及び善く曼荼羅を画く法を解す」(『大正蔵』 vol.18, p.760c)

【蔵訳】「rtag tu dam pa'i chos la dga'// theg pa che la mos pa can// gsang sngags spyod pa la bsabs shing// dkyil 'khor dag gi bye brag shes// (中略) phyag rgya la sogs bcing ba dang// dkyil 'khor bri ba'i las rnam dang// gsang sngags spyod pa'i mchod pa la// slob dpon gyis ni mkhas par bya//」(D f.141vr5-7, P ff.202r8-202v2)

【試訳】「常に正法を喜び、大乘を信解し、真言行を教わり、曼荼羅などの区別を知っている。(中略)諸の印を結び、曼荼羅を画く所作と、真言行の供養を、阿闍梨は巧みに行う」

10 この他にも、例えば以下の方法を用いることなどが説かれている。

【漢訳書き下し文】

仏部の中に於いては、輪王仏頂を用い、及び部母の真言を以て本部の諸尊を請え。蓮華部に於いては、湿縛婆訶明王、及び吉祥部母の真言を用いて本部の諸尊を請え。金剛部に於いては、遜婆明王、及び莽麼計部母の真言を用いて本部の諸尊を請え。

(『大正蔵』 vol.18, p.767a)

【蔵訳】

mkhas pas de bzhin gshegs rigs la// 'khor los sgyur bas spyang drang ngo//
yang na spyang drang cho ga ni// sangs rgyas spyang gyis byar yang rung//
phyag na pad mo'i rigs kun la// rig pa'i rgyal pos spyang drang bya//
yang na spyang drang cho ga la// dpal mo(P;mos P) las kun byed pas bya//
mkhas pas rdo rje 'dzin rigs la// gnod mdzes zhes bya'i gsang sngags sam//
ma yengs par ni mā ma kis// spyang drang ba yi cho ga bya//

(D f.155v2-4, P f.215v4-5)

【試訳】

賢者は、如来部では転輪によって奉請するのである。

或は、奉請の儀軌は仏眼によってなされることもよい。

蓮華手の部は、すべて明王によって奉請するのである。

或は奉請の儀軌を、弁事の吉祥妃によってなすべし。

賢者は持金剛部に於いては、遜婆という[尊格の]真言か、

或は集中してマーマキーによって奉請の儀軌をなすべし。

第四章 『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼について

第一節 はじめに

『金剛手灌頂タントラ』は、現在梵本も漢訳も確認されておらず¹、蔵訳のみが伝わっている経典である。

Tib: *'Phags pa lag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud chen po.*

Skt: *Vajrapāṇyabhiṣeka-mahātantra.*

日本においてこの経典が注目を集めたのは、酒井(1962)によって『大日経』の先駆経典と位置づけられたことによる²。また、その後の研究により、本経の灌頂儀礼に釈迦から普賢への金剛杵の授与があり、この金剛杵授与によって普賢が金剛手に転換する記述などがあることから、本経が『大日経』のみならず『初会金剛頂経』にも影響を及ぼしたことが指摘³されている。すなわち、日本で言うところの中期密教経典の成立を考える上で、決して無視することの出来ない経典なのである。

この経典における灌頂儀礼の特徴は、『菴呬耶経』に見られる阿闍梨位を得る灌頂を引き継ぎながら、灌頂儀礼によって受者を金剛手に転換させることにある。このような目的の変化に応じて、曼荼羅や儀礼の構成にも変化が起こっている。この章では、『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼の目的を確認し、それに伴い曼荼羅や儀礼に新たな要素が加わったことを見てから、その理由について考えてみたい。

第二節 灌頂儀礼の目的

『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼は、釈迦が普賢に対して灌頂を行い、それによって普賢が金剛手に転換する。次に、それを現実世界に投影させた形で阿闍梨から弟子への灌頂が、金剛手によって説かれるという二重構造になっている。大塚(2013, pp.962-970)によれば、この場面はおよそ五つに分けることが出来る。

第一ステージ

毘盧遮那が他化自在天の大宮殿の集会輪にて三平等句の法門を説く。



第二ステージ

他化自在天の大宮殿に集会する者たちが、娑婆世界の大金剛鉄围山曼荼羅にて普賢が灌頂される光景を見る。

第三ステージ

娑婆世界の大金剛鉄围山曼荼羅にて釈迦が普賢に金剛手灌頂する様子の描写。

第四ステージ

娑婆世界の大金剛鉄围山曼荼羅にて実際に普賢が金剛手灌頂される。



第五ステージ

金剛手灌頂を受けた普賢は
金剛手となり金剛手の儀軌
を宣説する。

このように、「娑婆世界の大金剛鉄围山曼荼羅おける釈迦から普賢への灌頂」が説かれ、その後それを拠り所とした「現実世界における阿闍梨から弟子への灌頂」が説かれる二重構造になっている。

以上のことから、まずは釈迦から普賢への灌頂がどのような目的で行われたのかを確認する必要があるであろう。以下に第三ステージに見られる灌頂の場面を引用したい。

de nas 'jig rten gyi khams mi mjed 'dir/ bcom ldam 'das shā kya thub pa'i mtshan
gyis gling bzhi pa bar ma'i 'jig rten gyi khams kyi 'dzam *bu'i(D;bu P) gling du
bdud pham par mdzad nas/ byang chub mngon par rdzogs par sangs rgyas te/
dga' ldan gyi gnas na gnas pa nas bzung ste/ mthar gyis spyad pa spyod cing
yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mtha'i bar du byin gyis brlabs nas chos
bstan to// bcom ldam 'das shā kya thub pa de yang bstan pa rgyun mi 'chad pa'i
phyir/ byang chub sems dpa' kun tu bzang po dang/ byams pa dang/ 'jam dpal
dang/ spyan ras gzigs kyi dbang phyug dang/ sgrib pa thams cad rnam par sel ba
dang/ nam mkha'i snying po dang/ sa'i snying po dang/ byang chub sems dpa'
ngan song thams cad spong ba la sogs pa byang chub sems dpa' rnam bsdu nas/
lha dang/ klu dang/ gnod sbyin dang/ dri za dang/ lha ma yin dang/ nam mkha'
lding dang/ mi 'am ci dang/ lto 'phye chen po la sogs pa thams cad kyi mdun du/
rdo rje'i dkyil 'khor chen po bris nas/ lag na rdo rje dbang chen po bskur bas
byang chub sems dpa' kun tu bzang po dbang bskur nas de nyid la dstan pa gtad
do// (D ff.10v7-11r4, P ff.11r5-11v2)

【試訳】その時この娑婆世界に於いて[世尊毘盧遮那は]、世尊釈迦牟尼の姿によつて、四州の中の世界の閻浮堤に於いて、降魔して、菩提を現等覚して、兜率天の住処に住することから始めて、次第に行を行じて大般涅槃に至るまでを加持して法を説いたのである。世尊釈迦牟尼はまた、教説の相続を絶やさないうために、普賢菩薩と弥勒と文殊と観自在と除一切蓋障と虚空蔵と地藏と除一切悪趣をはじめとする菩薩たち⁴を集め、天と龍と夜叉と乾闥婆と阿修羅と迦楼羅と緊那羅と摩睺羅迦をはじめとする全ての前で、大金剛曼荼羅を画き、金剛手大灌頂によつて普賢菩薩を灌頂して、彼自身に教説を委嘱したのである。

この引用文は世尊毘盧遮那が、娑婆世界においては釈迦の姿で現れ、そこで普賢菩薩に灌頂を行うところである。下線部に注目すると、この灌頂は教説の相続を絶やさないうために行われたことがわかる。そして、教説の相続を絶やさないうために、どのような手段を用いたかという点、灌頂儀礼によつてその教説を普賢菩薩に委嘱したのである。つまり、この後金剛手が教主となり説いていく経典の内容は、釈迦より相承した教えであり、その教えを説くことは灌頂を授かった普賢、すなわち金剛手に任されたこととなる。

釈迦から普賢へ教説が委嘱されたことは、第四ステージに見られる灌頂の後の教誡の言葉からも読み取ることが出来る。普賢に対する一連の灌頂儀礼が終わると、それらを総括し、以下のような教誡の詞が語られる。

bcom ldan 'das shā kya thub pas kyang de'i tshe byang chub sems dpa' lag na rdo rje la bka' stsal pa/ rigs kyi bu de bzhin gshegs pa thams cad kyis dkyil 'khor 'khor los sgyur ba chen po'i rdo rje'i dkyil 'khor chen por lag *na(P;tu D) rdo rjes dbang bskur bas khyod dbang bskur to// ting nge 'dzin bye ba khrag khrig brgya stong du ma las byas pa'i rdo rje khyod la byin no// 'khor los sgyur ba'i rgyal po chen po'i rdo rjes khyod byin gyis brlabs so// rdo rje snying po thams cad khyod la dstan to// de bzhin gshegs pa thams cad kyis khyod *la(D;n.e. P) bstan pa thams cad kyi don bya ba dang bsrung bar gnang ngo// khyod kyi sngon gyi smon lam chen po yongs su rdzogs so// rigs kyi bu da rang gi rdzu 'phrul gyi cho 'phrul nges par ston cig/ rigs kyi bu lag na rdo *rjes(D;rje P) dbang bskur ba'i dkyil 'khor chen po shod cig/

(D ff.29v7-30r3, P f.30v3-6)

【試訳】世尊釈迦牟尼はまた、その時、金剛手菩薩に教誡した。「善男子よ、一切如来は、この大転輪者の曼荼羅である大金剛曼荼羅で、金剛手による灌頂によって汝を灌頂したのである。百千那由多俱胝ほど多くの三昧よりつくられた金剛杵を、汝に授けたのである。大転輪王の金剛杵によって汝を加持したのである。一切の金剛心真言を汝に教示したのである。一切如来は汝に一切の教説の利行と守護を許可したのである。汝の過去の大誓願が円満したのである。善男子よ、まさにいま、自らの神通神変を詳しく説け。善男子よ、金剛手による灌頂の大曼荼羅を説け。」

この教誡の言葉を整理すると、釈迦から普賢への灌頂儀礼でおこなわれたことは、

- 1.一切如来が大金剛曼荼羅において金剛手灌頂によって普賢を灌頂した。
- 2.三昧より作られた金剛杵を普賢に授けた。
- 3.金剛杵で普賢を加持した。
- 4.金剛の心真言を普賢に示した。
- 5.一切如来が教説の守護を許可した。
- 6.普賢の過去の誓願が円満した。

となる。そして、以上の六つの過程を経て普賢は金剛手となり、以降は「自らの神通神変を説くこと」と、「金剛手による灌頂の大曼荼羅を説くこと」をなささいという文意である。実際に、経典に説かれる、普賢が金剛手に転換する箇所では、普賢は金剛杵で加持され、金剛杵を与えられ、多くの心真言を授かり、最終的に金剛の教えを説く転輪者となることが確認される⁵。これは上記の2.から5.に相当すると考えられる。この場合の、5.の一切如来による金剛手の教説守護の許可は、教説を委嘱されたことと理解出来るであろう。普賢は教説が委嘱されたことにより、「毘盧遮那の過去の行を示す」という誓願が成就するのである。

では次に、この釈迦から普賢への灌頂をモデルに行われる、実際の阿闍梨から弟子への灌頂の教誡の詞を見てみたい。ここでも同様に、教説を相承したことが読み取れる。

me tog rnams dang bduḡ pa dang// spos mchog rnams kyis yang mchod la//
lag pa g-yas su rdo rje dang// g-yon du 'khor lo bzhag nas su//
slob ma de la 'di skad du// rdo rje slob dpon khyos 'gyur te//
de nas rdo rje ldan pa khyod// rdo rje'i chos ni rab brjod pa//
sangs rgyas kun gyis khyod lag tu// ting 'dzin *byung(P;'byung D) ba'i rdo rje byin//
deng nas 'jig rten thams cad kyī// lag na rdo rje rdzu 'phrul che//
sdang ba rnams ni tshar bcad dang// dstan pa la ni gnod byed pa//
de dag gdul bar bya ba'i phyir// 'dren pa rnams kyis rdo rje *byin(D;byed P)//
ci ltar 'khor los sgyur pa'i rgyal// bdag por bya phyir dbang dskur ba//

(D f.41r1-3, P f.41v5-8)

【試訳】花と焼香と、最勝の香によって、また供養して、
右手に金剛杵を、そして左[手]に法輪を置いて、
その弟子に次のように[述べるべし]。「汝は金剛阿闍梨になった。
それ故、金剛杵を有する汝は、金剛法を説くべし。
全ての仏が、汝の手に、三昧より生じた金剛杵を授けた。
今日より、一切世間の金剛手[たる汝]が、大神変をなし、
瞋患者たちを降伏し、教説を害するものたちを
調伏する為に、導師たちは金剛杵を与えた。
転輪王の如く、主とならしめんが為に灌頂したのである。」。

とあり、受者はこの灌頂を授かることによって阿闍梨となる。と同時に、金剛杵を授かった受者は、一切世間の金剛手として、普賢の灌頂の時と同様に二つのことを行うべきことが説かれる。

A.金剛法を演説すること。

B.大神変をなし、瞋患者たちを降伏し、教説を害するものたちを調伏すること。

この行為は、そのまま金剛手の役割である「自らの神通神変を説くこと」と、「金剛手による灌頂の大曼荼羅を説くこと」に一致するであろう。そして、受者がこれら二つを行うことを命じられるということは、すなわち、釈迦から金剛手が相承した教えを、この灌頂儀礼によって受者自身も相承したことを表している。

釈迦 —— 普賢 → 金剛手

卍

阿闍梨 —— 受者 → 金剛手
(転輪者)

卍

阿闍梨 —— 受者 → 金剛手
(転輪者)

このように、阿闍梨たちが第二の金剛手、第三の金剛手、第四の金剛手というふうに、連綿と灌頂儀礼によってその教えを相承していくことがここに示されたのである。下線部の「転輪王の如く、主とならしめんが為に」という記述は、灌頂を受けた受者が金剛法を説く者となることを示していると言える。

『金剛手灌頂タントラ』では、上記のように金剛手が釈迦の教説の相承者であり、さらに金剛手が教主となってそれを説くことの正当性を主張しているといえる。次にここでは、金剛手の正当性を主張する理由を探りたい。『金剛手灌頂タントラ』には以下のような記述が見られる。

de nas bcom ldan 'das rnam par snang mdzad kyis byang chub sems dpa' lag na rdo rje la bka' stsal pa/ lag na rdo rje nga'i slob ma rmans ma gtogs par khyod kyis su la *bsnyad(D:snyad P) par mi bya'o// de ci'i phyir zhe na/ sems can ma dad pa de dag ni tshul 'di la yid mi ches shing de dag 'di skad du/ 'di ni sangs rgyas kyis gsungs pa ma yin no zhes smra bar 'gyur bas/ de dag gi rna lam du yang bsrag par mi bya na phyag rgya lta ci smos/ (D ff.141r6-141v1, P f.141r3-5)

【試訳】その時、世尊毘盧遮那が金剛手菩薩に教勅した。金剛手よ！私の弟子たち以外に、汝は誰であれ説くべきではない。なぜならば、彼ら信のない衆生たちはこの理趣を信じず、彼らは次のように「これは仏によって説かれたのではない」と語るの、彼らの聞こえるところでも述べるべきでない。まして、印を説くべきでない。

ここでの主張は、信のないものにその教説を示してはいけないことである。その理由として、「これは仏によって説かれたのではない」と疑われることを挙げている。これは、本経が「仏説ではない」と批判されていたこのあらわれとも考えられる⁶。『金剛手灌頂タントラ』には、このように、この教えを仏の教説と信じない者に説いてはならない、とする記述が幾つか見られる⁷。

さて、金剛手が釈迦から教説を相承していたことが示されたが、それでは、受法の時はいつだったのかというのが次の課題である。『金剛手灌頂タントラ』では、教説の相承の正当性を示すために、「吉祥なる功德蔵の大城の種々の幢で荘嚴された沙羅樹の密林(*grong khyer chen po dpal yon tan gyi 'byung gnas na/ shing sā la sna tshogs kyī rgyal mtshan bkod pa'i nags tshal stug po.*)」という場所を示し、そこに曼荼羅が画かれ、普賢への灌頂が行われる。伊藤(1997, p.868)は、上記の場所に関して、「この場所は、釈迦入滅の地である、クシナガラ沙羅双樹を想起させるとともに、『華嚴経』『入法界品』で、文殊菩薩と善財童子が出会う場所である「福生城の東の莊嚴幢沙羅林」を想起させる⁸として、普賢が相承し委嘱された教説は、クシナガラ沙羅双樹なら、「釈迦が入滅する最後に今まで開示されなかった経説」であり、文殊と善財童子が出会う沙羅双樹なら、「入法界品」では説かれなかった経説」であろうとの見解を示している。結論から述べれば、『金剛手灌頂タントラ』は、上記の二つの場面を実際に想定していると言える。既に「入法界品」との関連性については、大塚(2013)により究明され、本経は「入法界品」を密教化した經典であるとの評価をされている。

また、クシナガラ沙羅樹を想定した場合について、以下のような記述がある。

de nas byang chub sems dpa' lag na rdo rjes/ byang chub sems dpa' zhi ba'i blo gros la 'di skad ces smras so// kye sems dpa' chen po rdo *rjes(D:rje P) dbang bskur ba shes bya ba'i dkyil 'khor yod de/ bcom ldan 'das kyis *de(D:n.e. P) kho bo gcig pu la bshad do// yongs su mya ngan *las 'das(D:'da' P) pa chen po'i tshe/ bstan pa dang

gsang ba'i yang ches gsang ba/ gsang chen dam pa/ nyan thos dang rang sangs
rgyas thams cad kyis kyang rnam par mi rig na/ gzhan 'jig rten pa rnam kyis lta
smos kyang ci dgos pa gsang ba dam pa 'di yang kho bo la gtad de/

(D f.103v4-6, f.103v3-6)

【試訳】その時金剛手菩薩は寂慧菩薩に次の様に語った。「おお大薩埵よ！金剛による灌頂と呼ばれる曼荼羅があり、世尊によって私只一人に説かれたのである。大般涅槃の時に。教説と秘密のまた深秘であり、最大秘密であり、一切の声聞と独覚によっても知らないものなので、いわんや他の世間の者達が〔この秘密の曼荼羅を〕知るはずはない。この最秘密は私に伝えられた。

下線部に注目すると、『金剛手灌頂タントラ』に説かれる教説は、今まで釈迦が誰にも説いたことのない教えであり、大般涅槃の時に金剛手のみに説いた教えであるといえる。

以上のことを踏まえると、本経所説の教説は伊藤(1997)によって示された通り、釈迦が入滅の最後まで説かず、さらに「入法界品」でも示されることがなかった教えであると言え、またここにおいても、これらの教えを釈迦から相承したことを示してると言えよう。

灌頂の目的に関しては、一義的には、釈迦の教えを相承しそれを絶やすことなく伝えていくことであった。そして副次的には、その役割を担う金剛手に転換させることと言えよう。そして、その教えが開示されるには、信が必要であった。また、その背景には金剛手が釈迦の教説を相承している正当性を示すことも含まれていたように思われる。

これより、『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼について見ていくが、その際も、金剛手の役割と信の重要性に注目していく。

第三節 『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅

第一項 問題の所在

この経典には『大日経』『具縁品』に説かれる曼荼羅建立の儀礼（いわゆる七日作壇法）に類似した方法⁹で行う灌頂儀礼¹⁰が説かれている。まず、『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅がどのようなものであるのか、その全体像を概観し、その後で曼荼羅に関する問題点にふれていきたい。

この曼荼羅は西門を正面とする三重構造で、内院に八葉蓮台が画かれ、八葉には東・南・西・北の葉に宝幢・開敷華王・無量光・阿閼の『大日経』に説かれる四仏が画かれ、東南・西南・西北・東北の葉に毘婆尸(Vipaśyin)・毘舍浮(Viśvabhū)・拘留孫(Krakucchanda)・尸棄(Śikhin)の過去七仏の内の四仏が画かれる。二重には、東方に文殊・東南に普賢・南方に金剛手・西南に除一切蓋障・西方に虚空蔵・西北に弥勒・北方に観音・東北に地藏と、八方に八大菩薩が画かれる。最外院は、帝釈天・火天・閻魔天・羅刹天・水天・風天・毘沙門天・伊舎那天などの護方天をはじめとする諸天が画かれる。このように曼荼羅の諸尊は名称が説かれ、大凡再構成することが可能である。

・内院（八葉蓮台）

中央…世尊大転輪者金剛手

八葉…四方に宝幢（東）・開敷華王（南）・無量光（西）・阿閼（北）の四仏¹¹

四維に毘婆尸(Vipaśyin)（東南）・毘舍浮(Viśvabhū)（西南）

拘留孫(Krakucchanda)（西北）・尸棄(Śikhin)（東北）¹²の四仏

・二重

八方…文殊（東）・金剛手（南）・虚空蔵（西）・観音（北）

普賢（東南）・除一切蓋障（西南）・弥勒（西北）・地藏（東北）¹³の八大菩薩

四門…クヴェーラ天（東）・増長天（南）・広目天（西）・毘沙門天（北）

・外院

一周…帝釈天や梵天をはじめとする諸天¹⁴

この曼荼羅¹⁵に関しては、既に大塚(1995a), (2013)・頼富(1990)・伊藤(1997b)・田中(2010)等の研究があるが、いくつかの問題がある。一つは、中尊の名称が説かれていないことである。そのため、この曼荼羅の中尊が如何なる尊格であるのかが、未だ推測の域を出ていない。上記の先行研究において中尊がどのようにみられているかは後述するが、曼荼羅の中尊が不確かなことは、曼荼羅や灌頂儀礼の意義などを考える場合に不都合であると思われる。もう一つは、曼荼羅の配置が、『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』や『蘇悉地経』のように、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部の諸尊を配置¹⁶するという構造をとらない¹⁷ことである。しかし、この経典の内容を見ていくと、曼荼羅の配置と、中尊の役割が深く関係しているように思われる。そこでこの節では、この『金剛手灌頂タントラ』に説かれる曼荼羅の中尊について考察し、その役割を確認して、それらがどのように曼荼羅の配置と関係しているのか指摘し、上記のような配置である曼荼羅の意義について考えてみたい。

第二項 曼荼羅の中尊について

『金剛手灌頂タントラ』の中尊の記述

次に、上記の曼荼羅の八葉蓮台の中央に画かれる、中尊の記述をみていきたい。既に述べた通り、この尊格は他の諸尊と違って名称が説かれない。

de yi snying po'i dbus su ni// bum pa zla ba'i 'od 'dra bri//

*de yi(D:de'i P) steng du rlung chen te// 'bar zhing tog dang ldan par bri//

zla gam 'dra zhing drag po ste// 'od ni dbyar gyi sprin mdog 'dra//

rlung gi steng du me bri ste// dbyibs ni gru gsum gnas pa yin//

rtags ni 'bras bu zur gsum pa// 'jig pa'i dus kyi me dang mtshungs//

de yi dbus su padma bri// 'od ni dus mtha'i me dang mtshungs//

de yi snying po'i dbus su ni// 'khor los sgyur ba bri bar bya//

de la bcom ldan 'das de ni gzugs sam phyag rgya 'am yi ge ci rigs su gzhas par bya'o//

phyag rgya gzhag na rdo rje ste// bsgrims nas sa bon ldan par bya//
de yi phyi rol cha rnam ni// brgyad po dag tu'ang snga ma bzhin//

(D ff.35r5-35v1, P f.36r1-4)

【試訳】^①その中心部分の中央に月の光のような[色をした]瓶を画け。^②その上には、輝いていて、幢を有する大風を画け。
半月のような形をしており恐ろしく、光が雨期の雲の色と等しい。^③[大]風の上に火を画け。[その]姿は三角形で安置せよ。
相は果としての三角形であり¹⁸、滅時の火と等しい。^④その中央に蓮華を画け。光は劫末の火と等しい。
その中心部分の中央に転輪者を画くべし。^⑤その場合その世尊は、像か、あるいは印か、あるいは字を適宜に安置すべし。
印を安置するならば金剛杵であり、注意深く種子を有するべし。その外側の諸々の部分である八[部分の尊格]などについても前の通りである。

この記述を見てみると、凡そ五つの部分からなることが分かる。まず、八葉蓮台の中心部分には月の色をした瓶、その上に風、その上に三角形の火、中央に蓮華を画き、金剛杵と種子という具合である。ただ、ここで「その中心部分の中央に転輪者を画くべし。」という一文があるが、この転輪者が先行研究において、曼荼羅の中尊を大日如来とする根拠の一つとなるのである。

そこで、先行研究ではこの記述をどのように理解していたのかを、みていくことにしたい。転輪者の理解に対して、「毘盧遮那」説と「金剛手」説の二つに意見を分けることができる。

A, 毘盧遮那説

- ・酒井(1973)その花台の中央に転輪王(大日)を画くべし。(p.186)
- ・伊藤(1997b)この八葉蓮華の中心、つまり曼荼羅の中心の尊格は、中央に三昧耶形で転輪(cakravartin)を描くことが示されているが、この転輪が釈迦牟尼であるのか、毘盧舍那であるのかは明らかでない。
- ・田中(2010)曼荼羅の図で毘盧遮那を中尊としている。(p.120)

B, 金剛手説

- ・大塚(2013)第一院には、八葉の花弁が置かれ、中央の華台には「転輪」の三昧耶形によって表される本尊(おそらく大金剛転輪者となった金剛手菩薩)が安置される。(p.966)

以上のようになかなか定め難い問題ではあるが、結論から述べれば大塚(2013)を支持したい。その理由は、『大日経』にパラレルな箇所があることと、本経に普賢菩薩が灌頂されて金剛手となり、その金剛手が転輪者となる記述がみられることである。この二点から中尊が金剛手であると考えられる。

『大日経』「秘密曼荼羅品」の金剛手

ここでは、一つ目の理由についてみていきたい。『大日経』「秘密曼荼羅品」に説かれる金剛手は、『金剛手灌頂タントラ』に説かれる曼荼羅の中尊の記述に、非常に近い内容をも

っている。

gsang ba pa'i bdag po gzhan yang khyod nyid kyil 'khor mdor bshad par bya'o//
kun tu gru bzhi lham pa la// rdo rje'i mtshan ma rnams kyis mtshan//
thams cad ser po yid du 'ong // dbus na padma rab tu gnas//
de yid bus su bya ba ni// bum pa zla ba'i 'od 'dra ba//
'di ni mtshan ma rnams kyis mtshan// klad kor gyis kyang rnam par brgyan//
de steng du yang rlung chen ni// dbyar gyi char sprin 'dra ba'i mdog/
ba dan g-yo ba sngags pas bya// klad kor gyis kyang rnam par brgyan//
de steng du yang gru gsum pa// rab tu 'jigs pa'i gzugs can te//
'jigs par byed pa'i me 'dra ba// sum mdo'i ris mtshan mtshan gyis btab//
'bar phreng 'khrigs pa 'jigs 'jigs lta// nyi ma 'char ba'i gzugs 'dra ba'o//
de yi dbus su padma che// dus mtha'i me 'od 'dra ba'o//
pad chen steng du rdo rje ni// 'bar ba'i phreng 'phro ba can//
hūṃ zhes bya ba'i sgra dang ldan// dam pa sa bon rnams kyis mtshan//
dpa' bo khyod kyil dkyil 'khor 'di// rgyal ba'i gtso bo rnams kyis gsungs//

(D ff.210r4-210v1, P f.175r1-5)

【試訳】秘密主よ、さらにまた、汝自身の曼荼羅¹⁹を略説しよう。[その曼荼羅は] 正方形でとても美しく、諸々の金剛という象徴物によって印づけられ、一切が心地よい黄色で、中央に蓮華がしっかりと据えられている。^①その中央になすべきことは、月の光のような [色をした] 瓶 [を画くことである]。

それは、諸々の象徴物によって印づけられ、空点によってまた飾られている。^②その上にまた、雨期の雨雲と等しい色 (黒色) で、揺らめく旗を [有している] 大風を、真言行者はなせ。[その大風は] 空点によってまた飾られている。

^③その上にまた三角形 [を画くべきである。その三角形は]、とても恐ろしい姿を有していて、破壊の火と等しく、三叉の相の表示によって印ぜられ、恐ろしいほど輝いている鬘が恐ろしく、太陽の上る姿と等しい。^④その中央に大蓮華 [を画くべし。色は] 劫末の火と光が等しい。

^⑤大蓮華の上に広がっている炎の連なりを有する金剛杵 [を画くべし]、hūṃ という声を有し、諸々の優れた種子により印づけられる。

勇者たる汝のこの曼荼羅は、勝者たちの主たちによって説かれたのである。

この記述も、上記の『金剛手灌頂タントラ』と同様に、五つの部分に分けることができる。そこで、両経の金剛手の記述を対比させてみたい。

	『金剛手灌頂タントラ』	『大日経』「秘密曼荼羅品」
①	中央に月の光と等しい色をした瓶を画く。	中央に月の光と等しい色をした瓶を画く。
②	その上に幢を有し、雨期の雨雲の色と等しい大風を画く。	その上に雨期の雨雲と等しい色で、揺らめく旗を有する大風を画く。

③	風の上に、三角形で滅時の火と等しい火を画く。	その上に、三角形で破壊の火と等しいものを画く。
④	劫末の火と等しい色の大蓮華を画く。	劫末の火と等しい色の大蓮華を画く。
⑤	印を安置するならば金剛杵であり、種子を有する。	大蓮華の上に金剛杵を画く。hūṃ という声を有し、諸々の優れた種子により印づけられる。

このように、この二つの記述の対比から、『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の中尊は、金剛手であると言えるであろう。

第三項 金剛手が転輪者になる記述

上記の記述から推測するに、曼荼羅の中尊は金剛手と考えることが出来る。しかし、『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の記述では、「その中心部分の中央に転輪者を画くべし」と、『大日経』にはない一文がある。ここでは二つ目の理由である、金剛手が転輪者となる記述を確認していきたい。その場面は第四ステージに当たり、以下のように説かれる。

de nas thogs pa med pa'i stobs rdo rje'i snying po smras ma thag tu de bzhin gshegs pa de dag gis ting nge 'jin dang/ gzungs dang/ stobs dang/ byang chub kyi yan lag dang/ lam dang 'phags pa'i bden pa dang stong pa nyid dang sangs rgyas kyi chos ma 'dres pa *dang(D;n.e. P) / stong pa nyi chen po'i mtha' las byas pa sbyin pa dang/ dul ba dang yang dag par sdom pa dang/ des pa la sogs pa pha rol tu phyin pa drug gis rnam par dskyes pa'i gzugs can gyi rdo rje byin gyis brlabs te byang chub sems dpa' kun du bzang po'i lag tu byin no// de bzhin gshegs pa de dag gis kun du bzang po'i lag tu rdo rje byin ma thag tu// de nas phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams rab 'byam rnams dang sangs rgyas kyi 'khor gyi dkyil 'khor thams cad du de bzhin gshegs pa thams cad dang byang chub sems dpa' thams cad dang/ nyan thos thams cad dang/ rang sangs rgyas thams cad dang/ lha dang/ klu dang/ gnod sbyin dang/ dri za dang/ lha ma yin dang/ nam mkha' lding dang/ mi 'am ci dang/ lto 'phye chen po dang/ mi dang mi ma yin pa thams cad gyis mgrin gcig tu/ kye ma byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'di ni lag na rdo rje'o lag na rdo rje'o zhes brjod do//

(D f.25v2-7 P f. 26r3-8)

【試訳】その時、無礙力金剛の心真言を唱えるや否や、それらの如来は三昧と、陀羅尼と、[十] 力と、[七] 覺支と、[八聖] 道と、[四] 聖諦と、空性と、[十八] 不共仏法と、大空の辺際から行われる布施と、律と、禁戒と、精進をはじめとする六波羅蜜によって生じる形ある金剛杵により加持して、普賢菩薩の手に与えた。それらの如来は、普賢の手に金剛杵を与えるや否や、その時、十方の諸世界と仏の集会であるすべての曼荼羅において、一切如来と、一切の菩薩と、一切の声聞と、一切の縁覚と、一切の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人は、一斉に、「おお、この菩薩摩訶薩は金剛手である、金剛手である」と言った。

下線部の箇所注目すると、金剛杵授与によって普賢菩薩が金剛手菩薩になる²⁰ことが示されていることが分かる。この金剛杵授与の後、およそ三十一の心真言²¹が普賢に授与される。最初に秘密金剛心真言が授与されるが、そこではもう普賢ではなく、金剛手として説かれている。

de bzhin gshegs pa de dag gis dam tshig 'di byi gyis brlabs nas yang gsang ba'i rdo rje zhes bya ba'i snying po *'di(D;n.e. P) gsungs pa/ na maḥ sa rba ta thā ga te bhyaḥ sa rba mu khe bhyaḥ sa rba thā gu hya ba dzra dha ra swā hā/ de nas gsang ba'i rdo *rje'i(D;rje P) snying po gsungs ma thag tu 'jig rten gyi khams rab 'byam thams cad dang sangs rgyas kyi 'khor gyi dkyil 'khor thams cad du gsang ba'i bdag *po'o(P;po D) gsang ba'i bdag *po'o(P;po D) zhes sgra gcig nas gcig tu 'ur *zhes(D;ces P) grags nas 'di lta ste/ snying po 'di'i mthu dang de bzhin gshegs pa thams cad kyi byin gyis brlabs kyi stobs kyis byang chub sems dpa' lag na rdo rje la de bzhin gshegs pa thams cad kyi thugs dang ye shes phun sum tshogs pa dag mngon sum du zhugs so//

(D ff.25v7-26r3, P ff.26r8-26v4)

【試訳】それらの如来は、この三昧耶を加持して、また、秘密金剛というこの心真言を説いた。「あらゆるやり方であらゆる方角に顔を向けている全ての如来に対して帰依します。薬叉²²よ！持金剛よ！スヴァーハー。(namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvatā guhya vajradhara svāhā.)」その時、秘密金剛の心真言を説くや否や、一切の諸世界と、一切の仏の集会であるすべての曼荼羅において、「秘密主よ、秘密主よ。」という語を連続して響かせ称賛して、次の様にこの心真言の力と、一切如来の加持力によって、金剛手菩薩に一切如来の心と、智の完成が現前した。

このように、金剛杵授与で金剛手菩薩となり、次のこの心真言では秘密主と称されるようになる。この後、宝冠を頂く真言など、多くの心真言が授けられ金剛手は大金剛転輪者となっていくのであるが、その一連の心真言授与の最後に大転輪心真言の授与がある。

de nas yang de bzhin gshegs pa de dag gis 'khor los *sgyur(D;bsgyur P) ba chen po'i stobs thogs pa med pa'i rdo rje'i snying po gsungs pa/ na maḥ sa rba ta thā ga te bhyaḥ sa rba mu khe bhyaḥ sa rba thā om ba dzra tsa kra ba rti hūṃ swā hā/ de nas 'khor los sgyur ba chen po'i gsang sngags kyi rgyal po 'di gsungs ma thag tu 'jig rten gyi khams rab 'byam thams cad dang sangs rgyas kyi 'khor gyi dkyil 'khor thams cad dang/ byang chub sems dpa'i gnas thams cad dang lha dang/ klu dang/ gnod sbyin dang/ dri za dang/ lha ma yin dang/ nam mkha' lding dang/ mi 'am ci dang/ lto 'phye chen po dang/ srin po dang/ 'byung po dang sha za la sogs pa'i gnas thams cad du *byang chub sems dpa' lag na rdo rje 'di ni(D;n.e. P) rdo rje chen po'i 'khor los sgyur ba zhes bya ba'i sgra gcig nas gcig tu 'ur *zhe(D;ces P) grags so// yang de bzhin gshegs pa de dag gis rdo rje chen po'i 'khor los sgyur ba'i snying po gsungs pa/ na maḥ sa rba ta thā ga te bhyaḥ sa rba mu khe bhyaḥ sa rba thā *dzri(P;dzī D) shrī hūṃ swā hā/ de nas de bzhin gshegs pa de dag gis yang 'khor los sgyur ba chen po la sogs pa rdo rje chen po'i snying po rnams byang chub sems dpa'

sems dpa' chen po lag na rdo rje la byin te/

(D f.29v1-5, P f.30r4-8)

【試訳】その時また、それらの如来は、大転輪の無礙力の金剛の心真言を説いた。「あらゆるやり方であらゆる方角に顔を向けている全ての如来に対して帰依します。オーム，金剛の転輪者よ！フーム，スヴァーハー。(namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathā oṃ vajracakravarti hūṃ svāhā.)」その時、この大転輪者の真言王を説くや否や、一切の諸世界と、一切の仏の集会であるすべての曼荼羅と、一切の菩薩の住所と、天と、龍と、夜叉と、乾闥婆と、阿修羅と、迦楼羅と、緊那羅と、摩睺羅伽と、羅刹と、ブータと、ピシャーチャをはじめとする者たちの一切の住所において「この金剛手菩薩は大金剛の転輪者である」という語を連続して響かせ称賛したのである。また、それらの如来は、大金剛の転輪者の心真言を説いた。「あらゆるやり方であらゆる方角に顔を向けている全ての如来に対して帰依します。ジリー，シュリー，フーム，スヴァーハー。(namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathā jṛī śrī hūṃ svāhā.)」その時、それらの如来はまた、大転輪者 [の心真言] をはじめとする諸々の大金剛の心真言を金剛手菩薩摩訶薩に授けた。

この心真言が授与される意味は、上記の記述から見るに、金剛手を大金剛の転輪者²³とすることにあると思われる。大金剛の転輪者が如何なる存在であるかは、次の釈迦からの教誡の詞を合わせてみることで、読み取る事が出来る。

bcom ldan 'das shā kya thub pas kyang de'i tshe byang chub sems dpa' lag na rdo rje la bka' stsal pa/ rigs kyi bu de bzhin gshegs pa thams cad kyis dkyil 'khor 'khor los sgyur ba chen po'i rdo rje'i dkyil 'khor chen por lag *na(P;tu D) rdo rjes dbang bskur bas khyod dbang bskur to// ting nge 'dzin bye ba khrag khrig brgya stong du ma las byas pa'i rdo rje khyod la byis no// 'khor los sgyur ba'i rgyal po chen po'i rdo rjes khyod byin gyis brlabs so// rdo rje snying po thams cad khyod la bstan to// de bzhin gshegs pa thams cad kyis khyod *la(D;n.e. P) bstan pa thams cad kyi don bya ba dang bsrung bar gnang ngo// khyod kyi sngon gyi smon lam chen po yongs su rdzogs so// rigs kyi bu da rang gi rdzu 'phrul gyi cho 'phrul nges par ston cig/ rigs kyi bu lag na rdo *rjes(D;rje P) dbang bskur ba'i dkyil 'khor chen po shod cig/

(D ff.29v7-30r3, P f.30v3-6)

【試訳】世尊釈迦牟尼はまた、その時、金剛手菩薩に教誡した。善男子よ、一切如来は、この大転輪者の曼荼羅である大金剛曼荼羅で、金剛手による灌頂によって汝を灌頂したのである。百千那由多俱胝ほど多くの三昧よりつくられた金剛杵を、汝に授けたのである。大転法輪王の金剛杵によって汝を加持したのである。一切の金剛心真言を汝に教示したのである。一切如来は汝に一切の教説の利行と守護を許可したのである。汝の過去の大誓願が円満したのである。善男子よ、まさにいま、自らの神通神変を詳しく説け。善男子よ、金剛手による灌頂の大曼荼羅を説け」

以上のように、灌頂の後に金剛杵を授与され金剛手菩薩となった普賢は、その後に心真言を授けられ、最終的には大転輪心真言によってその教えを広めていく者、すなわち転輪

者となるのである。それは、この教誡に説かれている「善男子よ、金剛手による灌頂の大曼荼羅を説け。」という命によって、表わされている。以降は金剛手が教主となり、一連の灌頂儀礼を説いていく事になる。そして、この箇所が大塚(2013)で「現時点では中尊は上記のような毘盧遮那でも釈迦でもない、灌頂によって密教宣説を委譲された大金剛輪者・金剛手菩薩であると考えている」²⁴の根拠となった部分である。

金剛手が転輪者となることは、『大日経』の胎藏三昧耶の一つ、金剛薩埵加持の印明を、吉祥法輪・転法輪と称すことや、『初会金剛頂経』の所謂「降三世品」で、一切如来に勧請される金剛手の名称が、“sarvatathāgatamahācakravartin”施護訳「金剛手菩薩摩訶薩大転輪王」²⁵となっていることにも関係していると思われる。

第四項 まとめ

以上『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の中尊について考察してきた。『金剛手灌頂タントラ』では、中尊の尊格名が説かれず、多くの先行研究では、この曼荼羅の中尊を毘盧遮那としてきた。しかし、これまでに見てきたように、『大日経』「秘密曼荼羅品」の金剛手の記述と、『金剛手灌頂タントラ』の中尊の記述は非常に近い形を持つものであった。このことから、曼荼羅の記述上では、この尊格は金剛手であるということが出来る。また、曼荼羅の中尊の記述にある転輪者に関しても、先行研究では法輪を転ずる者として、毘盧遮那か釈迦と推定していたようであるが、本経に普賢菩薩が灌頂されて金剛手となり、その金剛手が転輪者となる記述がみられることから、この転輪者も金剛手であることが確認された。以上の二点から、本経の曼荼羅の中尊を金剛手であると推定したい。

第四節 曼荼羅の意義

では次に、金剛手が中尊である曼荼羅の意義について確認していきたい。上記で述べたように、『金剛手灌頂タントラ』は、所謂三部立ての曼荼羅ではない。この曼荼羅について、大塚(2013)は、他化自在天における毘盧遮那の集会輪が娑婆世界の大金剛鉄圍山曼荼羅へ移行し、今度はそれがこの土壇マンドラへと図像化する密教的な展開がなされた²⁶とし、『入法界品』の法界を象徴するものとしている²⁷。本論の立場もそれと変わることはないが、曼荼羅の配置に関する新たな解釈を提示したい。

第一項 中尊の役割

曼荼羅の意義を考える上で、一番重要なのは中尊である。そこで、中尊である金剛手が、経典中において如何なる役割を担っているのかを、第二節で確認した釈迦から金剛手への教誡の言葉から探ってみたい。金剛手の役割に関する教誡の言葉を整理すると、以下の二つとなる。

A.自らの神通神変を説け。

B.金剛手による灌頂の大曼荼羅を説け。

実際にこの教誡の後、金剛手はこの二つを説いていく。そして、B.の金剛手による灌頂

の大曼荼羅の演説の内容こそが、本章で考察の対象となっている一連の灌頂儀礼である。

B.の内容を見る前に、灌頂儀礼とこの曼荼羅の配置に関係している記述がA.の金剛手の神通神変の内容に見られるので、以下に金剛手の神通神変の内容を確認していきたい。

金剛手による神通神変は三回説かれる。一度目は教誡の直後、二度目は金剛手の役割であるB.の灌頂の大曼荼羅を示した後、三度目は二度目の神通神変の後である。この三つの神通神変は、大凡同じ内容である。ここでは曼荼羅の構造や、灌頂儀礼にも関係していると思われる三回目の神通神変を確認したい。

第二項 神通神変の内容

金剛手は自らの神通神変を示す中で、調伏の事業として以下のような行為をなす。

de nas lag na rdo rje ting nge 'dzin de las langs te yang nyan thos dang/ rang sangs rgyas thams cad dang/ lha dang/ klu dang/ gnod sbyin dang/ dri za dang/ lha ma yin dang/ nam mkha' lding dang/ mi 'am ci dang/ lto 'phye chen po dang/ mi dang mi ma yin pa la sogs pa sems can thams cad kyi srog la dbab pa'i tshogs kyis bye ba *bsreg(P;bsregs D) pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin la snyoms par zhugs nas 'jig pa'i dus chen po'i tshe 'byung ba'i nyi ma bdun ltar 'bar ba rgya mtsho'i gling chen po'i me'i sgro ltar sems can thams cad kyi sems dang sems las byung ba'i tshogs za ba 'jig pa'i me chen po zhes bya ba rdo rje snying *po'i(D;po P) mchog 'di smras so// na maḥ sa rba ta thā ga te bhyaḥ/ sa rba mu khe bhyaḥ/ sa rba thā phaṭ hūṃ/ 'jig pa'i me chen po'i snying po smras ma thag tu/ de nas thams cad dang ldang pa'i 'khor de chu shing gi tshal rtsa ba bcad pa lta bu dang/ rlung drag po chen pos bskyod pa bzhin du 'gul nas stan thams cad las kha *sbum(D;bub P) tu 'khor lo chen po'i *rdo rje'i(D;n.e. P) dkyil 'khor gyi steng du *bsgyel(D;sgyel P) to// byang chub sems dpa' sems dpa' chen po sa bcu la gnas pa rnams ni ma gtogs so//lag na rdo rje'i mthus thams cad dang ldang pa'i 'khor des sangs rgyas kyi zhing 'di thams cad dang/ ri rab dang/ ri rab chen po dang/ khor yug dang/ khor yug chen po 'bar zhing me lce gcig tu gyur pa dang/ rgya mtsho dang/ rgya mtsho chen po thams cad *bskams(D;skams P) nas rnam par tshig ste thal bar gyur pa mthong ngo//

(D f.55v2-7, P ff56r4-v2)

【試訳】 その時、金剛手はその三昧より起きあがり、また、一切の声聞・縁覚と天と龍と夜叉と乾闥婆と阿修羅と迦楼羅と緊那羅と摩睺羅伽と人非人をはじめとする一切の衆生の生命を奪う「一千万回焼く」という三昧に入って、大いなる滅時の時に生じる七つの太陽の如く燃え、海の大洲の火の羽²⁸の如く一切衆生の心・心所を食らう「破壊の大火」という名のこの金剛心真言の最勝を説いた。「あらゆるやり方であらゆる方角に顔を向けている全ての如来に対して帰依します。パット、フーン！（*namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathā phaṭ hūṃ.*）」破壊の大火の心真言を説くや否や、その時、一切と俱なるその集会者は、芭蕉の林が根を切断されるが如く、大暴風によって揺さぶられるように震動して、すべての座より下向きに、大金剛

鉄圍山曼荼羅²⁹の上に投げ出された。[ただし]十地に住する菩薩摩訶薩たちは除かれた。金剛手の威力によって、一切と俱なるその集会者は、全てのこの仏国土と、須弥山と、大須弥山と、鉄圍山と、大鉄圍山が燃えて一つの炎となり、全ての海と大海が乾き、焼かれ、灰となるのを見たのである。

この部分は、伊藤(2013 p.113)に報告があるように、不空訳『金剛手光明灌頂経最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』³⁰にパラレルな箇所がある。

時に金剛手菩薩、三摩地より一切の声聞・辟支仏と、一切の天・龍・葉叉・乾闥婆・阿素囉・迦葉拏・緊那囉・麼護囉識・人及非人と、一切の群生等を警覺し召集し、皆、集会に来たり。復た、彼の群生衆の差別の心を抜き撮り、合わせて一体に同じ、等しく三摩地に住す。俱胝焚焼と名づく。世界の威、唯だ一つの大火聚と成ること、七つの日光照の如し。大馬口に等しくして、衆流、俱に湊り、呑納すること余り無し。尽く、猛焰と成れり。是の大威怒王聖無動尊の微妙心を説く。亦た、大馬口の如く、一切衆生の若干の種心等を呑み噉い、大火光界と成れり。曩莫薩嚩怛佉孽毘葉薩嚩目契毘葉嚩怛囉吒贊拏摩訶灑拏欠佉呬薩嚩尾觀南呬怛囉吒憾唎。纔に妙真言を説かば、一切衆身、劍を揮うが如く断ち、一時に地に歎れること、猶お利刀の芭蕉林を断ぜざるが如し。亦た、大暴悪の旋嵐猛風の衆樹葉を飄するが如く、大衆、吹き擲げ輪圍山間に置かれり。唯し、十地の大菩薩等は除く。一切仏国土三千大千世界は咸く、大忿怒王の威光を被り、焚焼し同一の体相となり、大火聚と成りて、蘇彌盧山・摩訶蘇彌盧山・鐵圍山・大鐵圍山・一切大海皆悉く枯涸・乾焼し、灰燼と成る。大衆、咸な見たり。
(『大正藏』 vol.21, p.1b)

以上が神通神変の場面である。ここではまず、金剛手が全ての衆生の生命を奪う「一千万回焼く」という三昧に入る。次に、金剛心真言を説く。すると、十地に住する菩薩を除く全ての集会者たちは大金剛鉄圍山曼荼羅に投げ出され、全ての仏国土・須弥山・鉄圍山が燃え、大海が乾き、灰となるのを見るのである。すると、その光景をみた文殊が、金剛手に対して以下のように述べる。

rīgs kyi bu 'khor 'di la dam tshig la 'jug pa'i sgo cung zad *cig(D;gcid P) stsol cig dang/ des bstan pa di la srog gi *re ba(D;reg pa P) thob cing dad pa thob nas rang rang gi gsang sngags kyi snying po 'bul bar gyur to//

(D f.56r5, P f.56v7-8)

【試訳】「善男子よ。この集会者に、三昧耶に入るいくつかの門を与えたまえ。それによって、この教説において、生命の希望を獲得し、信を獲得し、各々の心真言を献上するであろう」。

三昧耶に入る門が集会者たちに与えられれば、彼らは生命と信を獲得して、心真言を献上するという。このように言われた金剛手は、文殊に金剛杵と陀羅尼を授ける³¹。そして、集会者たちに三昧耶に入る門が与えられる。

de nas 'jam dpal gzhon nur gyur pas 'khor de dag la smras pa/ rīgs kyi bu dag rig

pa'i rgyal mo rdo rje mi pham pa mes rab tu rmongs byed 'di dran par gyis shig dang *'dis(D;'di P) khyed la phan pa dang bde ba dang srog thob par byed par 'gyur ro// lag na rdo rjes rig pa chen mo 'di smras ma thag tu de nas dam pa sbyin pa'i rdo rjes 'khor de byin gyis brlabs nas mgrin geig tu tshig smras pa/ phyag 'tshal lo// bcom ldan 'das rdo rje mi pham pa mes rab tu rmongs byed de la phyag 'tshal lo zhes smras te skad cig de nyid la 'khor de langs nas/ kun du bzang po la sogs pa byang chub sems dpa' rnam dang byang chub sems dpa' phyag na rdo rje dang 'jam dpal dzhon nur gyur pa la blta zhing tshig 'di skad ces smras so// kye ma ye shes kye ma skyid// kye ma sngags shes bsam mi khyab// des ni bdag cag thams cad kyang// mgon dang bsam gtan dga' dang ldan// sems zhi tshigs ni ma mchis par// sangs rgyas bstan pa lhur len gyur// sangs rgyas rnam kyī spyān sngar ni// bdag cag thams cad mchis nas su// cho ga'i rgyal po tshul chen 'dir// snying po dag ni *da(D;de P)dbul lo//

(D f.56v2-6, P.57r4-8)

【試訳】その時、文殊師利法王子は、それらの集会者に述べた。「善男子たちよ。この「征服されることのない火によって気絶させる金剛明呪(*vajrājītanālapramohānī)³²」を念じなさい。そのことによって、汝に利益と楽と生命を獲得させるであろう。」金剛手がこの大明呪を説くや否や、その時、妙施金剛によってその集会者は加持され、一斉に言葉を述べた。「礼拝します。世尊よ、この征服されることのない火によって気絶させる金剛[明呪]を礼拝します。」と述べたちょうどその一刹那に、その集会者は起き上がり、普賢をはじめとする菩薩たちと、金剛手菩薩と、文殊師利法王子を見て、以下のような言葉を述べた。「おお、智慧よ！おお、安楽よ！おお、不可思議なる真言の智慧よ！これにより、我ら一切はまた、救世者であり禪定に専心する者を喜んで受け入れ、心を寂靜にし、困難なく、仏の教説に専心します。諸仏の目の前に我ら一切は在して、儀軌王のこの大理趣において、心真言を今献上します。」

この記述から、大金剛鉄圀山曼荼羅に投げつけられ、地に倒れ、生命が奪われそうな集会者たちは、金剛明呪を念じれば生命を獲得することが出来ると言える。そして、金剛明呪を礼拝すると宣言した瞬間に、地に倒れていた集会者たちは起き上がること（生命の獲得）が出来、仏の教説に専心する（信の獲得）こととなり、各々心真言を献上していくのである。最初は梵天である。

de nas bcom ldan 'das la tshangs pas 'di skad ces gsol to// bcom ldan 'das bdag kyang lag na rdo rje dbang *chen po(D;n.e P) *bskur(D;skur P) ba'i dkyil 'khor rim par phye ba mang po 'dir rang gi snying po dbul lo// na maḥ sa rba ta thā ga te bhyaḥ/ sa rba mu khe bhyaḥ/ sa rba thā om/ bcom ldan 'das 'di ni bdag gi snying po'i mchog lags te/ rig byed bzhi rab tu brjod pa rigs bzhi kun du gzhog pa dbyangs dang ldan pa'i bkod pa chen po 'god pa'o// bcom ldan 'das 'di las rig byed rnam 'byung sngags rnam dang mchod sbyin la sogs pa'i las rnam 'byung ste/ rgya mtsho chen po bzhin du chos thams cad kyī gzhir gyur pa'o// lag na rdo rjes smras pa/ rdo rje sems dpa' rdo rje che// rdo rje om zhes bya ba ste//

byams dang ting nge 'jin las skyes// nga rgyal rnam par spangs pa legs//

(D ff.56v6-57r2, P ff.57r8-57v3)

【試訳】その時、世尊に梵天が次のように述べた。「世尊よ。私もまた、この金剛手大灌頂曼荼羅の多くの章に、自身の心真言を献上します。「あらゆるやり方であらゆる方角に顔を向けている全ての如来に対して帰依します。オーン(namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathā oṃ.)」世尊よ。これは、私の心真言の最勝のものです。そして、[この心真言は]四ヴェーダを唱え、四つのカーストを普く配置し、音声を具える大莊嚴を安置するものです。世尊よ、これ(心真言)より諸々のヴェーダが生じ、諸真言と祭祀をはじめとする諸々の事業が生じるのであり、あたかも大海のように、[この心真言は]一切法の根本になるのです」と。金剛手が述べた。「金剛薩埵よ！大金剛よ！金剛オーンと呼ばれ、慈と三昧から生まれたものよ！慢を捨てることはすばらしいことである」と。

今までの流れを確認しつつ、この場面が意味するところを考えたい。十地に住する菩薩以外の集会者が大金剛鉄圍山曼荼羅に投げ飛ばされ、生命を失おうとしている時、三昧耶に入る法門が与えられた。その三昧耶に入る門とは、世尊金剛手が説いた金剛明呪を念じることであった。そこで、調伏された集会者たちが金剛明呪を念じると、生命を獲得し、信を獲得し、各々心真言を金剛手大灌頂曼荼羅に献上したのである³³。以降、梵天に続いて帝釈天や、龍や四天王たちが順次心真言を献上していき、全ての集会者が曼荼羅に入ることとなる。金剛手に真言を捧げる集会者は以下の通り。

	尊格名	D.	P.
1	梵天(tshangs pa: brahman)	56v6	57r8
2	帝釈天(lha rnam kyī dbang po brgya byin: śakradevendra)	57r2	57v3
3	全ての龍王(klu'i rgyal po: nāgarājā)	57r6	57v8
4	大夜叉将毘沙門天(rnam thos kyī bu: vaiśravaṇa)	57v2	58r3
5	大夜叉将阿吒婆拘('brog gnas: ātavaka)	57v6	58r8
6	大夜叉将持国天(yul 'khor srung: dhṛtarāṣṭra)	58r1	58v2
7	大夜叉将広目天(mig mi bzang: virūpākṣa)	58r4	58v5
8	宝蔵神？(chu dbang rmugs byed 'jin: *jambhalajalendra)	58r7	59r1
9	八手(*lag(D;lag pa P) brgyad pa)	58v4	59r5
10	大夜叉将パンチカ(lngas rtsen: pañcika)	58v7	59v1
11	ヴェーマチトラ(*thags bzangs ris(D;thag zangs ris P): vemacitra)をはじめとする阿修羅王たち	59r5	59v8
12	種々の華鬘を有する者(sna tshogs phreng ba can)をはじめとする乾闥婆王たち	59v2	60r3
13	大樹(ljon pa: druma) 緊那羅王をはじめとする緊那羅王たち	59v5	60r8
14	ヴァイナテーヤ(rnam par bdud kyī bu: vainateya)をはじめとする全ての迦楼羅王	60r2	60v4
15	バヤーナカ(jigs su rung ba: bhayānaka)をはじめとする全ての羅刹王	60v1	61r3

16	火天大仙 (drang srong chen po me: agni)	60v5	61r8
17	雲の華鬘を有する者(sprin gyi phreng ba can)をはじめとする風天たち	61r2	61v4
18	月天(zla ba: candra) 星宿王	61r7	62r2
19	日天(nyi ma: āditya)をはじめとする全ての執曜	61v4	62r7
20	バロダ龍王(klu'i rgyal po chu lha: varuṇanāgarāja)多くの龍王	62r1	62v4
21	ヴィシュヌ(khyab 'jug: viṣṇu)	62r4	62v8
22	ルドラ(drag po: raudra) 餓鬼王	62v1	63r5
23	ブータの主伊舎那天(bang ldan: isāna)	62v7	63v4
24	ウマー(lha mo dka' thub zlog: umā)	63r4	63v8
25	昴宿(smin drug gi bu: kārttikeya) 大執曜	63r6	64r2
26	白雲天子(lha'i bu sprin dkar)と全ての雲天	63v3	64r7
27	破壊雷雲(glog sprin 'joms pa)・雷威光(glog gzi brjid)・雷光線(glog 'od snang)・妙雷鬘(glog phreng bzang)	64r2	64v6
28	須弥(ri rab: sumeru)山王をはじめとする山の大王たち	64r6	65r3
29	閻魔(gshin rje: yama)	64v4	65r8
30	黑夜(mtshan mo *nag mo(D; bzang mo P): kālarātrī)	64v7	65v4
31	カーラダダ(be con nag po: kāladaṇḍa)	65r1	65v5
32	カーラプルシャ(skyes bu nag po: kālapuruṣa)	65r3	65v7
33	ムリティユ('chi bdag: mṛtyu)	65r4	66r1
34	アルジュナ?(dpal byed: arjuna?)	65r6	66r3
35	カーラカルナー(rna nag *mo(D; ma P): kālakarṇī)	65r7	66r5
36	梵天妃(tshangs pa'i chung ma: brahumī)	65v3	66r8
37	ルドラ妃(drag po'i chung ma: raudrī)	65v6	66v3
38	ヴィシュヌ妃(khyab 'jug gi chung ma: vaiṣṇavī)	66r2	66v6
39	クマーラ妃(gzhon nu'i chung ma: kumārī)	66r4	66v8
40	チャームンダー(cha mu *ṇḍi(D; ṇṭa P): cāmuṇḍā)	66r7	67r3
41	ヴァーラーヒー(phag gi chung ma: vārāhī)	66v3	67r7
42	クヴェーラ妃(lus ngan gyi chung ma: kauberī)	66v6	67v3
43	バイラヴァ妃('jigs 'jigs lta chen po'i chung ma: bhairavī)	67r2	67v6
44	ガンジス(*gang ga(D; gaṃ gā P): gaṅgā)大河をはじめとする全ての大河	67r5	68r2
45	種々の華鬘を有する者(sna tshogs phreng ba can)をはじめとする乾闥婆王たち	67v2	68r6
46	幢持明王(rig sngags 'chang gi rgyal po tog)をはじめとする持明王たち	67v6	68v3
47	牙を有する者(so can: dantī)をはじめとする全ての大羅刹女たち	68r4	69r1
48	クータ(brtsegs pa: kūṭa) ブータ王をはじめとする全てのブータ王	68v3	69r7
49	ゴーパーラ(ba lang skyong ba: gopāla)をはじめとする全てのピシャーチャ(piśāca)	68v7	69v3
50	震動オースターラカ(gnon po 'gul po)をはじめとする全てのオースターラカ(ostāraka)	69r3	69v7

51	離愛(rnam par *'byam(D;'khyam P))をはじめとするチャーヤー(chāyā)たち	69r5	70r1
52	クンピーラ?(nya mid: kumbhīra?)をはじめとする全てのオージョーハーラ(ojohāra)	69r5	70r2
53	醜顔(bzhin ngan)をはじめとするすべての餓鬼衆	69v1	70r4
54	善勝 (legs rgyal)をはじめとするすべてのマーラ衆の天子	69v2	70r6
55	ジャヤー(rgyal ma: jayā)をはじめとする四大姉妹	69v7	70v3
56	ヴィジャヤー(rnam par rgyal ma: vijayā)	70r4	70v7
57	アジター(mi *'pham(D;pham P) ma: ajitā)	70r7	71r2
58	アパラジター(gzhan gyis mi thub ma: aparājitā)	70v2	71r4
59	トゥンプル(tam bu ra: tumburu)	70v4	71r7

以上が心真言を献上する集会者たちである。この調伏され心真言を献上した者たちが、曼荼羅の最外院に配置される諸天なのである。ただし、網掛けされた尊格は曼荼羅上にみられない。しかし、この曼荼羅のモデルとなる、釈迦が普賢に金剛手灌頂を行った娑婆世界の大金剛鉄圍山曼荼羅の集会者たちの中には見出すことができる³⁴。

そして、全ての諸尊が心真言を捧げ終わると、金剛手はその行為を讃歎し、さらにこの三昧耶に入る法門を犯さないことを告げる。

de nas lag na rdo rje de'i tshe thams cad dang ldan pa'i 'khor de la bltas nas legs so zhes bya ba byin te/ grogs po dag 'di ltar khyed kyis dkyil 'khor chen po 'dir rang gi snying po rnams smras shing phul ba dang rjes su yi rang ba ni drogs po dag legs so legs so// snying po 'di dag ni snying po mchog gis drangs pa ste/ des na 'di dag *ni(D;n.e. P) snying *po(D;po'i P) mchog gis zin pas dngos grub sbyin par 'gyur ro// gang la la zhis bstan pa 'di las 'das na snying po mchog gis rdo rje 'bar ba kun du mched cing 'bar bas/ de'i mgo bo 'gems par 'gyur te gzhan du ma yin no//

(D f.71r4-6, P f.71v6-8)

【試訳】次に金剛手は、その時一切と共なるその集会者を見て、「よいかな」という[言葉]を与えた。「友よ！このように汝が、この大曼荼羅に自身の心真言を語り、献上し、随喜したことは、友よ！よいかな、よいかな。これらの心真言は、最勝なる心真言によって導かれたのであり、それらは最勝なる心真言によって摂受されているので、悉地が与えられるであろう。誰かがこの教えを越えたならば、最勝なる心真言によって、金剛の輝きあらゆる処に広がり燃えることによって、その[越えてしまった者の]頭は破壊されるであろう。これ以外のことはおこらない」

ここまでの神通神変の内容である。ここまでの流れを整理すると、世尊金剛手が、一切如来の許可によって、十地の菩薩以外の全ての集会者たちを調伏するのであるが、助かる方法が与えられる。それが三昧耶に入る法門であった。金剛手が与えた明呪を、念じることによって集会者たちは助かる。と同時に、信を獲得するのである。信の獲得は本経の重要なテーマであることは、既に述べた通りである。信を獲得した後は、それぞれ全ての集

会者たちが心真言を献上していくのであるが、心真言を捧げた集会者たちは曼荼羅の最外院を構成する尊格たちであった。そして最後には、越三昧耶を厳しく戒められるのである。このように考えると、三昧耶に入る法門とは、曼荼羅に入ることとも言えるであろう。なお、この三昧耶に入る法門は、阿闍梨から弟子への灌頂儀礼中にも見られる、本経の特徴の一つといえる。その作法については、次の節で確認していきたい。

第三項 曼荼羅に入る二通りの者と金剛薩埵について

三昧耶に入る門が与えられ、調伏された集会者たちは生命と信を獲得し、各々心真言を献上した。上記の記述では、梵天が心真言を献上した後、金剛手から「金剛薩埵よ！大金剛よ！」と称賛される。ここでは、金剛手によって梵天が金剛薩埵とされていることなので、『金剛手灌頂タントラ』におけるこの金剛薩埵が如何なる存在であるか考えていきたい。

dam pa sbyin pa'i rdo rje gang dag dkyil 'khor chen po la 'jug pa'i sgo'i chos kyi rnam grangs kyi tshul 'di nyid nyan pa dang/ 'jug pa de dag sangs rgyas mang po bsnyen bkur byas par 'gyur na/ gang dag lag na rdo rje dbang chen bskur ba/ rdo rje'i dkyil 'khor chen po 'dir zhugs pa de dag lta ci smos te/ bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub la nges par 'gyur ro// 'jam dpal gyis smras pa/ zhi ba'i blo gros de de bzhin te/ ji skad smras pa de bzhin no// gang dag tshul 'di nyan pa dag ni rdo rje sems dpa' yin no//

(D f.97r3-5, P f.96v2-4)

【試訳】「妙施金剛よ、この大曼荼羅に入る門である法門の理趣を聞き、[そこに] 入る者達は、多くの仏を敬うであろう。そして金剛手の大灌頂を[授かり]、この大金剛曼荼羅に入る者達は、言うまでもなく無上正等覚を必ず成ずるであろう」。文殊は語った。「寂慧よ、その通りである。言った通りである。この理趣を聞いた者達は、金剛薩埵なのである」と。

この引用文によれば、入曼荼羅の理趣を聞く者は金剛薩埵であるということが出来る。すなわち、『金剛手灌頂タントラ』における金剛薩埵とは、何か特定の尊格を指し示すのではなく、金剛の曼荼羅に入った者は、皆金剛薩埵なのである。梵天も三昧耶に入る門が与えられ、金剛の曼荼羅に入ったために「金剛薩埵」と称されたのであろう。そしてさらに、曼荼羅に入る二通りの者たちが考えられている。

1. 大曼荼羅に入る方法たる理趣を聞き曼荼羅入る者 → 多くの仏を敬う
2. 金剛手の大灌頂を授かり大金剛曼荼羅に入る者 → 無上正等覚を成ず

一つ目の入曼荼羅の方法を聞いて、そこに入る者とは、金剛手の調伏の事業によって曼荼羅に入る者たちのことである。これは先の梵天のケースが当てはまり、その対象者は「仏の教説を害する外教徒」が想定される。梵天が調伏されてから、金剛薩埵と称讃されるまでの流れと対比すると、梵天をはじめとする諸天が調伏され、三昧耶に入る門が与えられ

たように、仏の教説を害する外教徒も、金剛手である阿闍梨に調伏され、大曼荼羅に入る門が与えられるのである。諸天たちの場合は金剛明呪を念じることで、曼荼羅上での生命の獲得と、仏の教説に専心する信の獲得をはたした。恐らく、外教徒の場合も同様に、本經に説かれる金剛の心真言を受持し、それによって曼荼羅に入り、仏の教説における信を起し、多くの仏を敬うこととなるのであろう。

次の、金剛手の灌頂を授かり曼荼羅に入るものとは、本經の灌頂儀礼を指していると思われる。すなわち、その対象者は金剛手たる金剛阿闍梨によって灌頂される弟子である。灌頂を授かった弟子は、大金剛曼荼羅に入り無上正等覚を成じるのである。そして、一切世間の金剛手となり、調伏の事業を行っていくのである。

第四項 まとめ

『陀羅尼集經』や『蘇悉地經』や『蕤呬耶經』の曼荼羅が、東方に仏部・北方に蓮華部・南方に金剛部を配置する曼荼羅であったのに対し、『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅はその法則に反した本經独自の諸尊の配置を行っていた。そのため、そのような配置に如何なる意義があるのかを、經典に説かれる思想を基に探ってきた。ここで、上記の神通神変の内容と曼荼羅の配置の関係を考えてみたい。

まず、この神通神変は中尊である大転輪者金剛手の役割である。そこで、釈迦から金剛手への教説の詞の内容を今一度よくみると、「善男子よ、一切如来は、この大転輪者の曼荼羅である大金剛曼荼羅で、金剛手による灌頂によって汝を灌頂したのである」、また「一切如来は汝に一切の教説の利行と守護を許可したのである」とある。このことから、中尊の周りに四方四仏と過去仏を安置することは、一切如来を表していると考えられる。これはさらに、一切如来の表示である四方四仏と過去仏を八葉蓮台に配置し、その中心に金剛手を安置することで、一切如来により灌頂され許可されたことを表しているとも考えられる。これ以降金剛手は「世尊金剛手³⁵」、或いは「一切如来の教勅に従う金剛手³⁶」と呼ばれる。

また、二重に関しては、金剛手の行う神通神変では、十地に住する菩薩を除く全ての集会者たちを調伏するという行為から、曼荼羅の二重に配される八大菩薩が十地に住する菩薩であり、最外院に配される諸天たちが調伏された集会者たちと考えられる。

以上のように考えると、この曼荼羅が金剛手の使命である神通神変を如実に表しているといえる。これまでの一連の流れを考慮して、改めて曼荼羅の配置を示せば、以下のようになろう。

中尊……………金剛手……………金剛法を説く世尊
八葉蓮台……四方四仏・過去七仏……………一切如来
第二重……………八大菩薩……………十地の菩薩
最外院……………諸天……………調伏される者達

このような曼荼羅が用いられる背景には、一つには仏の教説を害する外教徒を調伏し、金剛の心真言を与え、金剛手の曼荼羅に引入させて、仏を敬いその教えを実践していく金剛薩埵に転換³⁷させていたことが予想される。もう一つは、入壇の弟子を、金剛の教えを実践していく金剛手に転換させることをあらわしていると言える。

第五節 『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼

第一項 『金剛手灌頂タントラ』の一連の灌頂儀礼について

ここでは、先ず『金剛手灌頂タントラ』の一連の灌頂儀礼の構造を確認していきたい。経典の記述から儀礼を再構築すると、その期間は四日間となる。簡単に示すと、以下の表の通りである。なお、本灌頂儀礼に七日作壇法を適用させた場合の日にちを< >に示した。

D. 『金剛手灌頂タントラ』

四日間	
前行	D-0-1.阿闍梨は心真言を念誦 D-0-2.金剛手忿怒の心真言で一万回護摩 D-0-3.大転輪曼荼羅の中央に座し、世尊大転輪者 [の心真言] を念誦 D-0-4.大忿怒心真言によって弟子を清浄にし、結護する。
初日	D-1-1.地面を一肘量掘り、埋め直し、その状態をみて土地の良し悪しを見る。 D-1-2.土地に闍伽・供物・灯明・香・花などを捧げる D-1-3.土地の結護を行う D-1-4.三昧に入り、地神に語る D-1-5.造壇の土地で就寝（夢で土地を占う）
二日目 <二日目～ 五日目>	D-2-1.土地を受持するために護摩を行う D-2-2.土地を掘って埋め直す D-2-3.香で地を満たし平らにする D-2-4.土地の中央に五宝を埋める D-2-5.弟子を受持する D-2-6.念誦と護摩によって（弟子の）結護 D-2-7.斎戒をする D-2-8.香と花で供養 D-2-9. 弟子に大乘の法を説く D-2-10. 翌朝夢の内容を告げるべきことを弟子に語り、共に曼荼羅の中で寝る
三日目 <六日目>	D-3-1.金剛の心真言で牛の五種物を印ずる D-3-2.弟子を呼び、金剛忿怒の心真言で洒水 D-3-3.弟子に器を与え「飲食の量を知れ」と語る D-3-4.日没に無畏明呪の真言によって護摩 D-3-5.齒木の所作
四日目 <七日目>	D-4-1.日中に斎戒させる D-4-2.曼荼羅に入る準備 D-4-2-1.無垢なる陀羅尼を与える

	D-4-2-2.三昧耶と、三昧耶を損なうことを語る D-4-2-3.全ての罪を清めることを念じさせる D-4-3.曼荼羅拵ち（諸如来と持金剛と転輪者を念じて画く） D-4-4.曼荼羅作画 D-4-5.（諸尊）供養 D-4-6.瓶の準備 D-4-7.瓶の配置 D-4-8.道場の準備 D-4-9.供養（香・花・飲食・布など） D-4-10.護摩 D-4-11.四方に四つの大乘経典を安置（東方『般若経』・北方『金光明経』・ 西方『如来秘密経』・南方「入法界品」） D-4-12.正法を読誦（四つの大乘経典か） D-4-13.弟子の結護（三帰・発菩提心・灑浄など） D-4-14.投華得仏 D-4-15.護摩 D-4-16.布施 D-4-17.灌頂壇の建立 D-4-17-1.灌頂壇拵ち D-4-17-2.灌頂壇作画 D-4-17-3.灌頂壇の門に甘露軍荼利を安置する D-4-18.灌頂 D-4-19.金剛杵と法輪の授与
--	---

『金剛手灌頂タントラ』に見られる一連の灌頂儀礼は以上の通りである。これらは、大塚(1995a)で指摘されている如く、『蕤呬耶経』と比較すると、いくらかコンパクトな内容といえる。そして、上の表で示したように、経典の記述からその日数を辿ると、四日間のようなものである。初日から二日目にかけては、就寝のため日付の変更が読み取れる。二日目から三日目にかけても就寝の記述が見られる。三日目から四日目にかけては、護摩を行うのが日没であるのに対して、齋戒が日中であるため、日付が変更したと言える。しかし、『蕤呬耶経』も経典の記述のみから、七日作壇法を完全に再構築することは不可能であった。特に、初日から五日目までの作法は、明らかではない。これは『大日経』にも同様のことが言える。『大日経』の場合は、『大日経疏』や Buddhaghaya の注釈によって、七日作壇法が明らかになるが、経典の記述のみでは、やはり初日から五日目までの儀礼の区分は不明である。このようなことを踏まえて、もう一度『金剛手灌頂タントラ』の儀礼をみてみると、七日作壇法を適用させることも可能に思える。即ち、土地の選定から最初の就寝までが初日。『蕤呬耶経』や『大日経』においても区分が不分明な土地を受持する作法などが二日目から五日目まで行われる。弟子に対する洒水や齒木の所作が六日目。曼荼羅を画き、投華得仏を行い、護摩を修して、弟子から阿闍梨に対する布施が行われ、灌頂壇を建立した後に灌頂を行うのが七日目といった具合である。また、このような区分は『陀羅尼集経』

や『蕤呬耶經』,そして『大日經』に通じる七日作壇法の構造となる。しかし、『金剛手灌頂タントラ』には注釈書もなく、実際にどのように儀礼が行われていたかは經典から探る以外に方法がなく、上記で述べたことは、七日作壇法が『金剛手灌頂タントラ』に適用される根拠にはなりえない。ただ、『金剛手灌頂タントラ』より以前に成立したと考えられている經典、及び『大日經』が七日作壇法を用いていることを考えれば、この經典の灌頂儀礼も七日作壇法であった可能性はあるであろう。

このように『金剛手灌頂タントラ』の一連の儀礼を概観すると、『陀羅尼集經』や『蕤呬耶經』の一連の灌頂儀礼と、次第の順序が異なる部分が見られる。例えば、最終日の「投華得仏→護摩→布施→灌頂壇建立→灌頂」の順序に注目すると、弟子から阿闍梨に対して行われる布施の位置が不自然に思える。全ての儀礼が終了する前に行われ、その後灌頂壇を建立し、灌頂が行われる。弟子から阿闍梨に対する布施は、『陀羅尼集經』では七日目の最後に行われていた(B-7-22)、『蕤呬耶經』も同様である(C-7-49)。このような次第構成は、後に『大日經』「具縁品」にも引き継がれる。森(2011)では『大日經』に見られるこのような次第に対して、「投華得仏の目的は、弟子がマンダラの中のどの尊格と関係があるのかを明らかにすることにあるが、本来は独立したプロセスであったと考えられる。投華得仏の最後に、息災護摩と、弟子から阿闍梨への布施が行われるが、これらは儀礼の終結部に置かれるのが一般的である。」³⁸と、もともと投華得仏は独立した儀礼であった可能性を指摘している。確かにその可能性もあるが、『金剛手灌頂タントラ』の場合では、別の可能性も指摘できる。第四節第三項で確認したとおり、本經では曼荼羅に入る方法が二通り示されている。

1. 大曼荼羅に入る方法たる理趣を聞き曼荼羅入る者
2. 金剛手の大灌頂を授かり大金剛曼荼羅に入る者

1.の曼荼羅に入ることを目的としている者は、投華得仏までで儀礼が終了し、2.の灌頂を授かるものは、さらに進んで灌頂が行われるとも考えられる。当然可能性としては、經典の伝承途中に錯簡してしまったことも考えられる。ここでは、全て可能性の指摘に留まっていたが、以下に本經の灌頂儀礼に見られる特徴についていくつか私見を述べていきたい。

第二項 『金剛手灌頂タントラ』の儀礼にみられる新たな要素

上記の表の通り、『金剛手灌頂タントラ』の一連の灌頂儀礼は、『陀羅尼集經』や『蕤呬耶經』と次第が異なる部分が多い。ここでは、以下の五点の儀礼を確認して、本經の特徴を探りたい。

1. 初日 D-1-5.造壇の土地で就寝
2. 二日目 D-2-9. 弟子に大乘の法を説く、D-2-10. 翌朝夢の内容を告げるべくことを弟子に語り、共に曼荼羅の中で寝る
3. 三日目 弟子を受持する次第の構成
4. 四日目 D-4-2.曼荼羅に入る準備

5. D-4-13.弟子の結護・D-4-14.投華得仏

1. 初日 D-1-5.造壇の土地で就寝

D-1-5 の儀礼は、土地の選定の後、さらにこの土地に於いて曼荼羅を建立すべきかどうかを占う儀礼である。

de yi nub mo sa der ni// ku sha bting ba'i steng du nyal//
gal te sa de rung gyur na// der ni *bsgrims(D;sgrims P) te bri bar bya//
sngon gyi sangs rgyas mi mchog gis/ de ni bgegs med yin zhes brjod//
gzhan du na ni der mi bri// bgegs dang bcas pas phung bar 'gyur//

(D f.32r3-4, P f.32v7-8)

【試訳】

その夜その土地で、クシャ草の座の上で寝るべし。

もしその土地が適しているならば、そこで注意深く [曼荼羅を] 画くべし。

過去の仏や人中尊によって、「そこは障礙がない」と [夢の中で] 言われる。

そのように言われなければ、そこで画くべきでない。障礙があるので、無益となるだろう。

これは、『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』には見られない本経独自のものであり、初日の儀礼の区分を知ることが出来る重要な儀礼である。『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』では、初日に、本経の次第で言うところの「D-2-2.土地を掘って埋め直す」と「D-2-3.香で地を満たし平らにする」に相当すると考えられる所作が行われる。しかし、本経では初日ではなく二日目に行われる。『金剛手灌頂タントラ』の場合は、「D-1-5.造壇の土地で就寝」によって、曼荼羅をこの地に建立すべきかどうかが決まるため、土地を治す所作などは、全て二日以降に行われるのであろう。

2. 二日目 D-2-9, D-2-10.

「D-2-9. 弟子に大乘の法を説く」と「D-2-10. 翌朝夢の内容を告げるべくことを弟子に語り、共に曼荼羅の中で寝る」は、七日作壇法では六日目の夜に行われるもので、弟子の見た夢を翌朝聞き、その内容によって吉凶を占うものである（実際に夢の内容を確認するのは翌朝）。本経において、この儀礼が二日目に行われる理由は明らかでない。これまでみてきた『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』では、本儀礼は弟子を受持する儀礼の一部であり、本経の次第で言えば、三日目の D-3-5.齒木の所作の後に行う方が、他の經典と整合する。また、その際に弟子に語る内容であるが、『陀羅尼集経』では以下のように語られている。

次に阿闍梨、諸弟子に語れ。「汝等、臥すために去るべし。若し夢相有らば、明朝、我に向いて各の具さに之を説け。各各用心せよ。造次にも他に向いて漏泄すること得ざれ」是の語を作し已りて、次に阿闍梨、弟子等を引きて東の階従り下りて、各の散して房に帰せしめよ。
(『大正蔵』 vol.18, p.888a)

また『蕤呬耶経』では、

【漢訳書き下し文】

次に即ち、諸の弟子の為に願欲に相應せる正法を広説せよ。然る後に、教えて頭面を東に向かわしめ、茅草を敷きて臥せしめよ。天明けて起き已れば、阿闍梨、応に彼等に善・不善の夢を問うべし。

(『大正蔵』 vol.18, p.763b)

【蔵訳】

'dod chags bral dang ldan pa'i chos// slob ma rnams la bshad nas ni//
ku sha bting ba'i sa gzhi la// shar phyogs sngas ltas nyal du gzhug/
de nas nang par nam langs nas// rmi lam ci mthong dri bar bya//
thos nas bzang ngam mi bzang ba// the tshom med par bshad par bya//

(D f.146v6-7, P f.207v6-7)

【試訳】

離貪の法を弟子たちに説いて、
クシャ草の座の地面に、東方に枕を見て寝させよ。
そして朝、夜が明けたら、どのような夢を見たのか問うべし。
[夢の内容を] 聞いて、善か、あるいは不善であるかを確かに説くべし。

とある。『陀羅尼集経』の場合は、どちらかという寝ている最中であっても罪を犯すことのないように戒める内容が読み取れる。『蕤呬耶経』は、内容については不明であるが、蔵訳に注目すれば、『陀羅尼集経』に近い内容の可能性もあるであろう。

本経の場合は以下のように説かれている。

slob dpon yud tsam yud tsam zhing// de tshe slob ma rnams la ni//
theg chen zab mo rgya chen 'di// chos kyang rab tu bshad par bya//
gsang sngags brjod las 'byung ba yi// yon tan kun du brjod na phan//
byang chub sems dpa' rnams kyis ni// rdzu 'phrul la sogs yongs su brjod//
pha rol rgyun la snying rje ba// de dag yud tsam yud tsam brjod//

(D ff.32v7-33r2, P f.33v4-5)

【試訳】阿闍梨は直ぐに、その時弟子たちに対して、
この広大で甚深なる大乘の法をまた説くべし。
真言を誦することから生じる功德を全て説けば利益となる。
菩薩たちによる神変などを説くべし。
他者を絶え間なく哀れむことを、彼らに直ぐに説くべし。

この内容は、就寝中の弟子を戒める内容というよりは、弟子が灌頂儀礼によって授かる本経の教説の内容と一致する。

3. 三日目 弟子を受持する次第の構成

三日目は、牛の五種物（尿・糞・乳・酪・酥）に金剛の心真言を誦して、金剛忿怒の心真言を誦しながら、その牛の五種物によって洒水を行う。『蕤呬耶経』では土地を浄化するために、牛の五種物を枳利枳利忿怒の真言で誦して洒水を行う儀礼³⁹が見られる。『金剛手

灌頂タントラ』における牛の五種物による洒水も、弟子の浄化を行うことが予想される。
次の D-3-3 は、他の經典には見られない所作である。

shing a śva ttha'i lo ma *kong bu(D:bskyongs ba P) 'am snyim pa'i nang du snod du
bya ba sbyin zhing khyed de ring zas kyi tshod shes par gyis shig ces bsgo bar
bya'o// (D f.33v5-6, P f.34v1-2)

【試訳】アシュバッタ樹の葉の容器か、合掌の中を器として〔食べ物を〕与えて、「汝は今日より、食べ物の量を知りなさい」と命じるべし。

これは、同日に先の洒水と、D-3-5 の齒木の所作があることから考えると、弟子を受持する次第の一部と考えられる。これから入壇する弟子は、以降与えられた器の量の食事をしていくことになることが予想される。その後は、護摩と齒木の所作が行われる。上記の夢占いが別の日にちにみられるなど、本経は『陀羅尼集経』と『蕤呬耶経』の次第と異なる部分が多い。弟子を受持する次第を、『陀羅尼集経』と『蕤呬耶経』と比較すると以下の通りである。

『陀羅尼集経』	『蕤呬耶経』	『金剛手灌頂タントラ』
弟子の結護 秘密法蔵を学ぶことを誓う	弟子の結護 三帰 発菩提心	
香水を注ぐ	忿怒尊で加持した香水を注ぐ 弟子の頭に手を置き念誦	金剛忿怒の心真言で洒水
弟子の胸に手を置き馬頭の呪を誦す	弟子の心（漢訳）に手を置き明王念誦	*弟子に器を与える *念誦と護摩によって弟子を結護する
呪索を腕につける		
洒水	洒水	
炬火を用いて右邊	焼香	
	灌頂に用いる瓶の準備	
齒木の所作 香水を飲ませる	齒木の所作 香水を飲ませる	齒木の所作
	三度啓白	
就寝（夢占い） 三度啓白	就寝（夢占い）	

本経には、『陀羅尼集経』・『蕤呬耶経』・『大日経』に見られる、呪索を腕に着ける所作や、香水を弟子に飲ませる所作も見られない。本経の灌頂儀礼を概観すると、これまでの灌頂儀礼とは系統が異なるようにも思える。

4. 四日目 D-4-2.曼荼羅に入る準備

四日目は日中に弟子に齋戒をさせ、その後 D-4-2.曼荼羅に入る準備が行われる。ここで

はその箇所を確認して、この所作がどのような意味を有しているのか検討していきたい。

de nas *phyi(D;phyir P) nyin slob ma rnam// smyung ba byed du bcug nas su//
rdo rje mi pham me zhes bya// srid pa gsum po rmongs byed pa//
rtag dran bya phyir de dag la// dri ma med pa'i gzungs sbyin bya//
snying du sdug *pa'i(D;pa P) dam tshig brjod// nyams pa la yang lhag par brjod//
(D f.34r1-2, P f.34v4-6)

【試訳】次に翌日、弟子達に齋戒をさせて、
征服されることの無い火というものによって、三界の者を気絶させる金剛[明呪]を、
常に念じるために、彼ら[弟子たち]に無垢なる陀羅尼を与えるべし。
心の中にある三昧耶を説いて、違越することもさらに説くべし。

この作法は、最終日に曼荼羅を画く前に行われる。この引用文のみから理解をすれば、弟子は曼荼羅を画く前に陀羅尼が与えられ、三昧耶と、その三昧耶を違越してしまった場合について聞かされることになる。ところが、「征服されることの無い火というものによって、三界の者を気絶させる金剛を、常に念じるために」の一文に注目すると、この儀礼が、金剛手の神通神変である調伏の事業と、同一のモチーフとも考えられる。そこで、改めて神通神変の内容を確認したい。金剛手は、十地の菩薩を除く全ての衆生を調伏する。そして、その光景をみた文殊が、金剛手に以下のように語る。

rigs kyi bu 'khor 'di la dam tshig la 'jug pa'i sgo cung zad *cig(D;gcid P) stsol cig
dang/ des bstan pa di la srog gi *re ba(D;reg pa P) thob cing dad pa thob nas rang
rang gi gsang sngags kyi snying po 'bul bar gyur to// (中略) de'i tshe rdo rje de rdo
rje mchog gi stobs kyi gzungs dang lhan cig tu 'jam dpal gzhon nur gyur pa la byin
no//
na maḥ sarba ta thā ga te bhyaḥ/ sarba mu khe bhyaḥ/ sarba thā ehi ma hā ba dzra
*kro ṭa(P;ko ṭi D) ku ṭi la pā pa ka aṃ ku la shi khe ka pi la ke *shī(D;shā P) ta ṭi
ta ṭi/ ko ṭi ko ṭi/ ka *rkka(D;rka P) ṭi mu ṭi ma hā thin du da lo lo/ du ka *du(D;rdū
P) ka/ sa ma sa ma/ sa ra sa ra/ bi sa ra bi sa ra/ *sphu(D;spu P) ra *sphu(D;spu P)/
u *ddho(D;da do P) ti te/ ha ri *piṃ(D;pi P) ga le/ tsa ṭi bi tsa ṭi/ *dzwā(D;dzwa P)
le bi *dzwā(D;dzwa P) le/ ba dzra gho *ṇa(D;ne P)/ ba dzra sa ra *dri(D;dhi P) ṣṭa
pra ha ra *ṇe(D;ne P)/ ma ti *bhū(D;bhu P) te/ *ra tna(D;ra da na P) tra ya/ a ti ta
le/ ba dzra dha ra bi shā sa ma/ a pra ti ha ta pra ma *rta(D;dha P) ni swāvhā/
de nas 'jam dpal gzhon nur gyur pas 'khor de dag la smras pa/ rigs kyi bu dag rig
pa'i rgyal mo rdo rje mi pham pa mes rab tu rmongs byed 'di dran par gyis shig
dang *'dis(D;'di P) khyed la phan pa dang bde ba dang srog thob par byed par 'gyur
ro// lag na rdo rjes rig pa chen mo 'di smras ma thag tu de nas dam pa sbyin pa'i
rdo rjes 'khor de byin gyis brlabs nas mgrin gcig tu tshig smras pa/
(D ff.56r5-56v3, P ff.56v7-57r5)

【試訳】「善男子よ。この集会者に、三昧耶に入るいくつかの門を与えたまえ。それによって、この教説において、生命の希望を獲得し、信を獲得し、各々の心真言を献上

するであろう」(中略) その時 [金剛手は] その金剛杵を、「最勝なる金剛の力の陀羅尼」と共に、文殊師利法王子に与えた。

*namaḥ sarvatathāgatebhyaḥ sarvamukhebhyaḥ sarvathā ehi mahāvajrakrodha kuṭīlapāpaka amkulaśikhe kavilake śīta ṭitaṭi koṭi koṭi karkkaṭi muṭi mahāthinadudalolo duka duka sama sama sara sara visara visara sphura sphura uddhotite haripīṅgale caṭi vicaṭi jvale vijvale vajraghoṇa vajrasaradrṣṭapraharaṇe matibhūte ratnatraya atitale vajradharaviśāsama apratihatapramardani svāhā.⁴⁰

その時、文殊師利法王子は、それらの集会者に述べた。「善男子たちよ。この「征服されることの無い火によって気絶させる金剛明呪」を念じなさい。そのことによって、汝に利益と楽と生命を獲得させるであろう」金剛手がこの大明呪を説くや否や、その時、妙施金剛によってその集会者は加持され、一斉に言葉を述べた。

そして、調伏された集会者たちは、「征服されることの無い火によって気絶させる金剛明呪」を念じるのことで、生命と信の獲得をし、心真言を献上することで曼荼羅への参入を果たす。そして、最後には、

de nas lag na rdo rje de'i tshe thams cad dang ldan pa'i 'khor de la bltas nas legs so zhes bya ba byin te/ grogs po dag 'di ltar khyed kyis dkyil 'khor chen po 'dir rang gi snying po rnam smras shing phul ba dang rjes su yi rang ba ni grogs po dag legs so legs so// snying po 'di dag ni snying po mchog gis drangs pa ste/ des na 'di dag *ni(D;n.e. P) snying *po(D;po'i P) mchog gis zin pas dngos grub sbyin par 'gyur ro// gang la la zhig bstan pa 'di las 'das na snying po mchog gis rdo rje 'bar ba kun du mched cing 'bar bas/ de'i mgo bo 'gems par 'gyur te gzhan du ma yin no//

(D f.71r4-6, P f.71v6-8)

【試訳】次に金剛手は、その時一切と共にその集会者を見て、「よいかな」という [言葉] を与えた。「友よ！このように汝が、この大曼荼羅に自身の心真言を語り、献上し、随喜したことは、友よ！よいかな、よいかな。これらの心真言は、最勝なる心真言によって導かれたのであり、それらは最勝なる心真言によって摂受されているので、悉地が与えられるであろう。誰かがこの教えを違越したならば、最勝なる心真言によって、金剛の炎があらゆる処に広がり燃えることによって、その [違越してしまった者の] 頭は破壊されるであろう。これ以外のことはおこらない」

と、この教えを違越してはならないことを示した。今回の弟子に対する儀礼を、この神通神変と対照させてみたい。弟子は「征服されることの無い火というものによって三界の者を気絶させる金剛 [明呪]」を常に念じるために、無垢なる陀羅尼が与えられる。その陀羅尼は、集会者たちと同じく「最勝なる金剛の力の陀羅尼」であろう。この陀羅尼は、金剛杵と共に文殊に与えられた陀羅尼であるが、文脈上、この陀羅尼と金剛明呪は同一であり、集会者たちが念じたのもこの陀羅尼と考えられる。そして阿闍梨は、陀羅尼を与えるために、心の中の三昧耶を説くのである。この流れから予想するに、ここでの三昧耶は「無垢なる陀羅尼」を指し示していると考えられる。即ち、阿闍梨自身もかつて灌頂を受けるために、この陀羅尼を授かっており、常に念じているはずである。そして、今度はその阿

闍梨が、自身の心に中に於いて念じているこの金剛明呪を、弟子に与えるために説いたのであろう。そして、「違越すること」は、集会者たちが曼荼羅参入を果たした後に述べられた内容と同じであろう。

弟子が何故ここで明呪を念じるかという、調伏された集会者たちが、明呪を念じることで生命と信の獲得、及び曼荼羅への参入を果たしたことから、信の獲得と曼荼羅の参入のためと思われる。信が重要なことは、上記で述べた通りである。信がないものには、金剛手が相承した教説は示されないため、信の獲得が必要だったと考えられる。曼荼羅の参入に関しては、この儀礼が曼荼羅の作画の前に行われることを考えると、これから阿闍梨と共に曼荼羅を画くに当たり、参入の儀礼を行ったと考えられる。

また、弟子が曼荼羅参入に際して、三昧耶を与えられ、それを違越してしまった場合に、焼かれて頭が破壊されることは、『金剛頂経』以降に見られる「誓水」の役割⁴¹を連想させる。すでに確認してきた通り、本経には香水を飲む儀礼は見られず、直ちに本儀礼と『金剛頂経』以降の「誓水」を結びつけることは出来ないが、儀礼が有する機能に関しては、何らかの関連が予想される。

5. D-4-13.弟子の結護・D-4-14.投華得仏

『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』では、第六日目の弟子を受持する次第の中に律儀の授与が見られた。本経では、この作法が投華得仏の次第に組み込まれている。以下にその箇所を確認していきたい。

slob ma thams cad bos nas su// de dag la ni skyabs gsum sbyin//
sdiag pa mi bya brjod par bya// sdom pa dag kyang 'dzin du gzhus/
mkhas pas cho ga 'di bzhin du// byang chub sems kyang bskyed du gzhus/
rdo rje drag po'i sngags chu yis// de nas kun *la(D;tu P) bsang gtor bya//
dam tshig yongs su brjod byas la// mkhas pa nang du zhugs nas su//
gos rnams yongs su brje bya ste// sngags kyis mngon du gdab par bya//
de tshe snying rje ldan pa yis// slob ma de dag gdong bkab *la(D;pa P)//
'khor *los sgyur(D;lo bsgyur P) ba'i dam tshig gi// phyag rgya sngags pas 'ching
bcug ste//
lag tu me tog byin byas nas// de tshe snying gar yi ge bsam//
*skyob(P;scob D) pa kun gyi spyang sngar ni// me tog de dag dor du gzhus/
blo dang ldan pas slob ma yi// rna g-yas rdo rje dril bu bzhag/
rdo rje rnga zhes bya ba yi// lha mo chen mo g-yon par ro//
me tog rnams ni gar bab pa// lha de de yi yin par 'dod//
de ltar slob ma bcug byas nas// de tshe dam tshig bstan par bya//

(D f.38v2-6, P ff.39r7-39v3)

【試訳】一切の弟子を呼び、彼らに三昧耶を与え、
悪〔業〕を行わないことを説くべし。律儀もまた保たせて、
賢者はこの儀軌通りに、菩提心も発させるべし。
金剛忿怒の真言〔で加持した〕水によって、次に全てを洒水すべし。

三昧耶を完全に説いて、智者（賢者）は〔曼荼羅の〕中に入り、
 衣などを完全に变えて、真言によって印じ、
 その時悲を有する者は、彼ら弟子たちの顔を覆い、
 転輪者の三昧耶の印を、真言行者は〔弟子に〕結ばせて、
 手に華を与えて、その時心臓に文字を観想せよ。
 全ての守護者の目の前で、それらの華を投げさせよ。
 賢者（智を有する者）は弟子の右耳に金剛鈴を置き、
 金剛太鼓という大女尊を左〔耳〕に〔置くべし〕。
 諸の華が落ちた所のその尊格が、彼の〔尊格〕であると望まれる。
 このように弟子を導入して、その時三昧耶を示すべし。

これが『金剛手灌頂タントラ』に説かれる投華得仏の次第である。ではこれを、『陀羅尼集経』と『蕤呬耶経』と『大日経』「具縁品」の投華得仏と比較してみたい。

	『大日経』 ⁴²	本経	『蕤呬耶経』 ⁴³	『陀羅尼集経』
1	弟子引入	弟子引入	弟子引入	弟子引入
2		三婦・律儀の授与		
3	洒水		洒水	
4	塗香・華の授与		塗香などの授与	
5	発菩提心	発菩提心		
6		洒水		
7	法界生や転法輪の印などで〔弟子を〕加持	三昧耶を説く	心真言を誦す	
8	三昧耶印で衣の加持	真言によって衣を加持	弁事真言で衣を加持	
9	覆面	覆面	覆面	覆面
10		転輪者の三昧耶印を結ばせる	前の示した印を結ばせる	観世音三昧〔耶〕印を結ばせる
11		手に華を与える	印に華を与える	印に華を与える
12	三昧耶を三回誦す		曼荼羅主の印を頭上に置き、真言を三度誦す	観世音三昧〔耶〕呪を七遍誦す
13	頭上に ra 字を観想	心臓に文字を観想		
14			真諦加持の詞を述べる	
15	一切の守護者の目の前で投華	全ての守護者の目の前で投華	投華	投華
16		弟子の耳に大女尊		

		[の種子?]を安置する		
--	--	-------------	--	--

『金剛手灌頂タントラ』では、この投華得仏の次第の中に、他の三つの経典では第六日目におこなわれる律儀の授与がある。ここでも、本経は次第の内容に相違が見られるのである。表の 5 では、発菩提心が見られ、7 において三昧耶が説かれる。投華得仏の次第中にこの二つの所作が見られると、金剛頂経系統の「発菩提心真言」と「三昧耶の真言」が連想されるが、本経におけるここでの三昧耶が何であるのかは不明である。ただ、『蕤呬耶経』と『大日経』と対照すると、真言であることが予想されよう。

その後は、覆面をし、『陀羅尼集経』以来に見られる三昧耶の印を結び投華に臨む。表の 12 の箇所、本経では三昧耶の真言を誦すことが示されないが、他の経典を参照する限り、同様に三昧耶の真言を誦すものと考えられよう。また、『金剛手灌頂タントラ』より、投華に臨む受者に対して、文字の観想が行われる。本経では、表の 14 の真諦加持の詞を唱える所作はないが、投華の前に文字の観想が行われることは、『金剛頂経』以降の「遍入」⁴⁴を連想させる。しかし、経典成立史から考えて、本経の儀礼中に「遍入」を想定することは難しいであろう。また、如何なる文字が観想されるかも詳細不明である。可能性としては、灌頂儀礼によって受者が金剛手と位置づけられるため、曼荼羅の中心に安置された hūṃ 字とも考えられる。また、灌頂の後に説かれる成就法の中では、行者が身体に「kha, ha, ra, va」などの文字を布字⁴⁵し、本尊と一体となる三密加持⁴⁶が説かれる。その場合、心臓に位置する文字が ra 字であるため、ra 字とも考えられよう。ra 字の場合は『大日経』と一致するが、文字が観想される場所が異なる。本儀礼における文字の観想は、後に「遍入」に通じる可能性を含みつつも、ここでの意義は明らかでない。

以上が、『陀羅尼集経』と『蕤呬耶経』と比較した場合に本経に新たに見られる儀礼である。一連の儀礼の構造や、本項で確認した儀礼など考慮すると、今までの灌頂儀礼とは系統が異なるとも言える。また、経典に何かしら錯簡はあった可能性も指摘出来よう。何れにしても、経典から読み取れる次第の構成は『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』とは異なると言える。また、従来本経の有する「金剛杵の授与」などから、『金剛頂経』との関わりが指摘されてきたが、この他の儀礼に関しても関連を考察する必要があるであろう。本論では『金剛頂経』との関係まで考察が及ばなかったが、今後はこの問題にも取り組んでいきたい。

第三項 瓶の配置

ここでは、瓶水が曼荼羅上にどのように配置されていくのか確認していきたい。本経に説かれる瓶の配置は以下の如くである。

cho ga shes pas de lta bur// rdo rje'i dkyil 'khor mchog bris te//
 byin gyis brlabs pa byas nas su// rab tu bsgrims te mchod par bya//
 de nas bum pa zhabs mi gnag/ kha yi cha ga shel kha can//

mgrin pa ring zhing lto che ba// nyi shu rtsa lnga blang bar bya//
 sa bon rin chen sna lngas bkang// spos kyi chus kyang rab tu bkang//
 kha rgyan yal gas khebs byas shing// de bzhin 'bras bus kha bkang la//
 mgul *chings(D;bcings P) kyis kyang bcings byas la// kha dog ci rigs rnam par dgod//
 sgo bzhi po ni thams cad du// bum pa snga ma ci bzhin du//
 brgyad nyid du ni gsungs pa ste// dgu pa de ni bsang gtor ba//
 rdo rje drag pos rnam kun tu// bsgrims te de ni sngags kyis gdab//
 bcu pa dbus su shes par bya// de ni 'khor los *sgyur(D;bsgyur P) la *dbul(D;'bul P)//
 (D ff.37r6-37v1, P f.38r3-6)

【試訳】

儀軌を知る者は、以上のように、最勝なる金剛曼荼羅を画いて、
 加持をして、注意深く供養すべし。

次に瓶は、底が黒くなく、[瓶]の口の縁は水晶を具え、
 首は長く腹が膨らんでいるものであり、二十五遍受持すべし。

五種の穀物と宝を満たし、香水もまた満たすべし。

口の飾りは枝で覆い、同様に果実で口を満たし、

首を縛る物によってまた[瓶の首]を縛り、相応しい色のものを配置すべし。

四門[の瓶]は、全てに於いて、前の瓶の通りに[するべし]。

[以上]ちょうど八個[の瓶]が説かれた。その第九[の瓶]は灑浄のものであって、
 金剛忿怒の真言によって常に、注意深く印ずるべし。

第十[の瓶]は中央と知れ。それは転輪者に捧げるべし。

これによれば、準備される瓶の数は十であり、配置すべき場所が明記してあるのは四門
 と中央である。第九の瓶は、灑浄の為の瓶であり、金剛忿怒と対応関係にあることから、
 『蘇悉地経』のように西門の外に安置されることが予想される。

残りの四瓶を配置する場所は詳細不明であるが、以下の二つの理由により、四角に配置
 するものと考えたい。

一つ目の理由は、『陀羅尼集経』・『蘇悉地経』・『蕤呬耶経』においても、瓶は四角に配置
 されていたこと。二つ目の理由は、瓶を加持する尊格が、

rin po che sna bzhi'i bum pa rin po che dang/ sman thams cad kyis bkang pa/ rin
 po che me tog dang/ me tog kun *tu(P;du D) rgyas pa dang/ 'od dpag med dang/ mi
 'khrugs pa dang/ kun tu(P;du D) bzang po dang/ sgrib pa thams cad rnam par
 *sel(D;sil P) ba dang/ byams pa dang/ sa'i snying pos byin gyi brlabs pa dag gis spyi
 bor dbang bskur ro//
 (D f.40v5-6, P f.41v2-3)

【試訳】一切の宝と薬で満たされ、宝幢と開敷華と無量光と阿闍と普賢と除一切蓋障
 と弥勒と地蔵によって加持された四宝の瓶によって、頭頂を灌頂すべし。

と、宝幢・開敷華・無量光・阿闍の四仏、及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩
 であり、この尊格が曼荼羅において四方と四角に配置されていることである。

- ・八葉の四方...宝幢（東）・開敷華王（南）・無量光（西）・阿闍（北）
- ・二重の四角...普賢（東南）・除一切蓋障（西南）・弥勒（西北）・地藏（東北）

このように考えると、四門に安置された瓶に四仏が対応し、四角に安置された瓶には四菩薩が対応することとなり、瓶の配置と加持する尊格の対応関係が一致する。

第四項 瓶水灌頂について

では次に、阿闍梨から弟子への瓶水灌頂の場面を確認したい。

rin po che sna bzhi'i bum pa rin po che dang/ sman thams cad kyis bkang pa/ rin
po che me tog dang/ me tog kun *tu(P;du D) rgyas pa dang/ 'od dpag med dang/ mi
'khrugs pa dang/ kun tu(P;du D) bzang po dang/ sgrub pa thams cad rnam par
*sel(D;sil P) ba dang/ byams pa dang/ sa'i snying pos byin gyi brlabs pa dag gis spyi
bor dbang bskur ro//

sngags pa pad ma dam pa der// rab tu bzhag nas bdag nyid kyis//
me tog spos kyis mchod byas la// mar me mchod yon dbul bar bya//
gdugs dang rgyal mtshan ba dan dang// sil snyan sgra rnams phyung pa dang//
rol mo'i sgra sil snyan mang gis// yang dag mngon du dga' byas la//
skyob pa kun gyi mngon sum du// bsgrims te de ni dbang bskur ro//
ji ltar gling bzhi'i dbang phyug go// 'khor *los sgyur(D;lo bsgyur P) rgyal dbang
bskur ba//
de bzhin sngags pas ngo mtshar dang// bkra shis kun gyis dbang bskur ro//
me tog rnams dang bdug pa dang// spos mchog rnams kyis yang mchod la//
lag pa g-yas su rdo rje dang// g-yon du 'khor lo bzhag nas su//
slob ma de la 'di skad du// rdo rje slob dpon khyod 'gyur te//
de nas rdo rje ldan pa khyod// rdo rje'i chos ni rab brjod pa//
sangs rgyas kun gyis khyod lag tu// ting 'dzin *byung(P;'byung D) ba'i rdo rje
byin//
deng nas 'jig rten thams cad kyis// lag na rdo rje rdzu 'phrul che//
sdang ba rnams ni tshar bcad dang// dstan pa la ni gnod byed pa//
de dag gdul bar bya ba'i phyir// 'dren pa rnams kyis rdo rje *byin(D;byed P)//
ci ltar 'khor los sgyur pa'i rgyal// bdag por bya phyir dbang bskur ba//

(D ff.40v5-41r3, P f.41v2-8)

【試訳】一切の宝と薬で満たされ、宝幢と開敷華と無量光と阿闍と普賢と除一切蓋障と弥勒と地藏によって加持された四宝の瓶によって、頭頂を灌頂すべし。

真言行者は妙なる蓮華に、彼を安置して、[阿闍梨]自ら、
華と香によって[弟子を]供養し、灯と闍伽を献じるべし。
傘と幢幡と、音を出す鏡鉢と、
多くの音色を出す鏡鉢によって歓喜させて、

全ての守護者の目の前で、注意深く彼を灌頂するのである。
 四州の自在者のようである。転輪王の灌頂である。
 同様に真言行者は、全ての希有と吉祥によって灌頂するのである。
 花と焼香と、最勝の香によって、また供養して、
 右手に金剛杵を、そして左[手]に法輪を置いて、
 その弟子に次のように[述べるべし]。「汝は金剛阿闍梨になった。
 それ故、金剛杵を有するあなたは、金剛法を説くべし。
 全ての仏が、汝の手に、三昧より生じた金剛を授けた。
 今日より、一切世間の金剛手[たる汝]が、大神変をなし、
 瞋恚者たちを降伏し、教説を害するものたちを
 調伏する為に、導師たちは金剛杵を与えた。
 転輪王の如く、主とならしめんが為に灌頂したのである」。

先の瓶の配置で確認した通り、受者は宝幢・開敷華・無量光・阿闍の四仏、及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩によって加持された瓶水で灌頂される。その後、阿闍梨から香と華で供養され、右手に金剛杵を授与され、左手に法輪が置かれるのである。この金剛杵と法輪の授与は、それぞれ普賢が金剛手となる時に授けられた金剛杵授与と、金剛手が転輪者となった時に授けられた大転輪心真言に相当すると考えられる。このように考えると、ここでの宝幢・開敷華・無量光・阿闍の四仏、及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩によって加持された瓶水で行われる灌頂は、一切如来による普賢への灌頂に相当するであろう。

釈迦から普賢へ	阿闍梨から弟子へ
・一切如来が大金剛曼荼羅において金剛手灌頂によって灌頂する。	・宝幢と開敷華と無量光と阿闍と普賢と除一切蓋障と弥勒と地蔵によって加持された四宝の瓶によって灌頂する。
・三昧より作られた金剛杵を授ける。 ・金剛杵で加持する。	・右手に金剛杵を授ける。
・金剛の心真言（大転輪心真言など）が授けられ、転輪者となる。	・左手に法輪を置く。

前の章までに確認してきた灌頂儀礼と比べると、灌頂儀礼に際して瓶を加持する尊格に特徴が見られる。それは、瓶を加持する尊格が定まっていることである。『陀羅尼集経』や『蘇悉地経』は、受者の本尊によって瓶水を加持する尊格は異なる。『蕤呬耶経』の場合は、曼荼羅のすべての尊格による灌頂であったが、曼荼羅主は受者によって異なると考えられる。『金剛手灌頂タントラ』の場合は、受者が誰であれ、曼荼羅の中尊もその配置も変わることがない。また、そのことが瓶水を加持する尊格の固定化に繋がったと考えることも可能であろう。

この四仏・四菩薩は、曼荼羅上では八葉の四方と、二重の四角に配置されている。そして、本章第四節で確認した通り、この曼荼羅は金剛手の役割である神通神変を表している。

金剛手の神通神変は、一切如来によって教説の守護を許可された金剛手が、十地の菩薩以外の集会者たちを調伏することにある。つまり、神通神変を行う金剛手は曼荼羅の八葉蓮台の中心に安置され、金剛手に灌頂を授けた一切如来は中尊を囲むように八葉に安置され、調伏されることのなかった十地の菩薩は二重に安置され、調伏された者たちは第三重に安置されるのである。

ではここで、以上のことも踏まえて改めて瓶水を加持する尊格を確認したい。曼荼羅上では、これらの四仏は一切如来の表示を担い、四菩薩は十地の菩薩の表示を担っていた。このことから考えると、瓶を加持する四仏四菩薩は、一切如来と十地の菩薩に相当し、四仏四菩薩による瓶水の加持は、一切如来と十地の菩薩による加持となるであろう。

普賢への灌頂においては、一切如来による灌頂や金剛杵の授与があり、それによって一切如来に教説の守護を許可された。これを象徴的に表す為に四仏の加持があると考えられる。また、四菩薩は、神通神変において調伏されなかった存在であり、曼荼羅中の諸尊である。そのため、ここでは曼荼羅中の諸尊の役割として、瓶を加持したものと考えられる。即ち、八葉の諸尊を四仏が代表し、四菩薩が二重の諸尊を代表することで、曼荼羅の諸尊全体の灌頂と言えるであろう。

第六節 まとめ

以上が『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼である。本経では、灌頂儀礼の目的が、阿闍梨位を得ることを継承しながらも、新たに受者自身が金剛手と位置づけられることとなる。

また、曼荼羅に関しても、『陀羅尼集経』・『蘇悉地経』・『蕤呬耶経』が、仏部・蓮華部・金剛部の諸尊を東方・北方・南方と配置していたのに対して、本経では金剛手の役割である神変を表す構造をとる。

一連の灌頂儀礼に関しても、『陀羅尼集経』や『蕤呬耶経』と比べた場合には違いが見られた。また、金剛手の神変に見られる曼荼羅参入の儀礼など、新たに付加された要素もあった。曼荼羅や儀礼の構造のみから考えると、経典の錯簡の可能性も指摘出来ると同時に、今までの灌頂儀礼との系統の相違も予想出来るであろう。現段階では、個々の儀礼に関しては共通するものもあるため、本経の教説を曼荼羅や灌頂儀礼に取り入れながらその構成が変化したと考えている。

瓶水灌頂に関しては、『陀羅尼集経』では結縁の尊格によって灌頂が行われ、『蘇悉地経』においても修法者の本尊によって行われた。『蕤呬耶経』は曼荼羅全体の尊格（或いは曼荼羅主）による灌頂であり、これらは受者や儀礼の目的に応じて、瓶水と結びつく尊格が変化すると言える。『金剛手灌頂タントラ』では、受者が誰であれ曼荼羅の配置に変化は起こらず、また瓶水を加持する尊格も固定している。その尊格は釈迦から普賢への灌頂をモデルとして、一切如来と十地の菩薩によりおこなわれる。また、瓶水灌頂の後の金剛杵と法輪の授与が行われることを考えると、本儀礼は、受者を金剛手として位置づけるための灌頂と考えられる。

1 本經に説かれるごく一部が、不空訳『金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』（『大正藏』vol.21, no.1199）の冒頭部分と一致することが報告されている。伊藤(2013, p.113)参照。またその内容については、駒井(2015b, pp.65-68)参照。

2 序論参照。

3 『初会金剛頂經』との関係を指摘したものには、大塚(2013, pp.987-988)や元山(2005)などがある。

4 ここでの八大菩薩は「普賢菩薩・弥勒・文殊・観自在・除一切蓋障・虚空蔵・地藏・除一切悪趣」であるが、灌頂の曼荼羅に画かれる八大菩薩は、「文殊・金剛手・虚空蔵・観音・普賢・除一切蓋障・弥勒・地藏」である。本經には、二系統の八大菩薩が見られる。

5 大塚(1995a, pp.300-292), 大塚(2013, pp.962-965), 駒井(2015a, pp.(5)-(9))参照。

6 『大日經』にもその教説が仏説でないとの批判を受けていたことを暗示する一説が見られることが、種村(2013, pp.78-79)に報告されている。【漢訳書き下し文】秘密主よ、未来世に於いて、劣慧・無信の衆生は、是の如きの説を聞きて信受すること能わず。慧無きを以ての故に而も疑惑を増す。彼、唯だ聞く如くのみ堅住して修行せず。自ら損じ他を損じ、是の如きの言を作さん。彼の諸の外道に是の如き法あり。仏の所説に非ずと。(『大正藏』vol.18, p13c)【蔵訳】de la gsang ba pa'i bdag po ma 'ongs pa'i dus na sems can blo zhan pa ma dad pa gang dag bstan pa 'di la dad par mi 'gyur zhing yid gnyis dang som nyi mang ba/ thos pa tsam snying por 'dzin pa/ sgrub pa la mi phyogs pa dag 'byung bar 'gyur te/ de dag ni bdag nyid kyang ma rung la gzhan yang phung bar byed pa yin no// 'di skad du 'di ni phyi rol pa rnam la yod de/ sangs rgyas rnam kyis gsungs pa ni ma yin no zhes smra par 'gyur gyi// (D f.177r1-3, P f141r4-5)【試訳】「秘密主よ！未来においては、智慧が劣り信がない衆生は誰であれ、この教えを信じず、異議を唱え、大いに疑うであろう。そして、ただ[教え]を聞くだけで、心髓を持ち実践に向かうことはないであろう。彼らは自身も滅ぼし、他の人も破壊するであろう。[そして]次のように「これは外教徒たちが有するもので、諸仏が説いたのではない」と言うであろう」

7例えば、「zhi ba'i blo gros khyod kyis ma dad pa su la yang dkyil 'khor gyi rgyal po 'di ma bstan cig/ dam tshig 'di yang yongs su dag pa ma gtogs pa su la yang ma sbyin cig/ (D ff.105v7-106r1, P f.106r1-2)【試訳】寂慧よ！汝は信がない者には誰であれ、この曼荼羅王を示してはいけない。この三昧耶もまた、清浄な者たちのを除いては与えてはいけない」などがある。

8 伊藤(1997, p.868)参照。

9 本章第五節参照。

10 『金剛手灌頂タントラ』に説かれる一連の灌頂儀礼については大塚(1995a)参照。

11 『金剛手灌頂タントラ』の四方四仏に関しては、頼富(1990, pp.118-128)参照。

12 八葉蓮台に過去七仏が画かれることに関しては、大塚(2013, p.966)に言及がある。

13 ここに画かれる八大菩薩の系譜については、頼富(1990, pp.118-128)参照。

14 最外院に配置される諸天は凡そ五十九尊である。全ての諸天に関しては大塚(1995a)・伊藤(1997b)参照。

15 『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の配置図は、伊藤(1997b)及び、田中(2010, p.120)参照。

16 初期密教に見られる三部立の曼荼羅の配置については田中(2010, pp.83-102)参照。

17 もちろん、初期密教から『大日經』に至るまでの密教經典に説かれる曼荼羅が、全て東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部という配置なわけではない。例えば『蘇婆呼童子經』の除難灌頂に用いる曼荼羅には、仏・菩薩が配置されないことが報告されている。(大塚 2013, p.890)

18 ここの“bras bu zur gsum pa”が、何を説いているのか詳細不明である。しかし、こ

の部分は『大日経』の金剛手の記述の「三叉の相の表示」に相当する部分であり、ここでの三角形は三叉の相であることが想定される。

19 『大日経』「秘密曼荼羅品」の金剛手の曼荼羅の図が、『大正蔵』「図像部 1」の『秘密曼荼羅品図尊分附図』p.9「金剛部別壇」に収録されている。

20 『初会金剛頂経』堀内本§42に同等の内容が示されている。この箇所は、本経と『初会金剛頂経』の関係を論じる際の典拠とされる部分である。

21 ここで金剛手に授与される全ての心真言については、大塚(1995a, pp.299(26)-294(31))参照。

22 この真言の *guhya vajradhara* を *guhyaka vajradhara* と理解し、今は葉叉とした。『大日経』においても、金剛手は *guhyakādhīpati*(秘密主)、即ち葉叉の王と呼ばれている。

23 転法輪者となる表現も、『初会金剛頂経』に説かれる、一切如来の法輪を転じるものとして灌頂された普賢を彷彿させる。(堀内本§42. 註記 10 参照。)

24 大塚 (2013, pp.982-983) 参照。

25 堀内本§619・『大正蔵』vol.18, p.369c。また、『初会金剛頂経』における金剛手については、山野(1997a)・(1997b)参照。

26 大塚(2013, pp.982-983)参照。

27 大塚(2013, p.984)参照

28 今は” *rgya mtsho'i gling chen po'i me'i sgro*”を「海の大州の火の羽」とした。この”*sgro*”はナルタン版のチベット大蔵経を見てみると”*sgron*”(N:No.449, *rgyud*, vol.tha, f.176r3.)とあり、或いは「海の大州の燈火」とすべきか。何れにしても” *rgya mtsho'i gling chen po'i me'i sgro*”の詳細は不明である。しかし、ここでの金剛手が「一千万回焼く」という三昧に入り、そこで起きる、「滅時の時に生じる七つの太陽のように燃えること」と、「海の大州の火の羽のように一切衆生の心・心所を食らうこと」の二つは、ヒンドゥー教の宇宙観を取り入れていると考えられる。定方(1985)によれば、ヒンドゥー教の世界の消滅は以下のように説かれている。

「ここで永遠なるヴィシュヌ神は破壊神ルドラの性格をとって、あらゆる被造物を自己に再結合する。かれは太陽の七つの光線のなかに入り、大地のあらゆる水分、生物のあらゆる水分、さらに地下界の水分まで蒸発させ、地上および地下を涸渇させてしまう。太陽の七つの光線は十分水分を吸って膨張し、七つの太陽になる。その光は四方八方に広がり、三世界と地下界を火に包む。ヴィシュヌ神は竜神シェーシャの焦がすがごとき息吹に変じて、地下界を灰燼に帰せしめる。猛火は地下界を焼きつくして、地表に燃えうつり、地表を焼きつくす。大地は姿を変え、亀のこうらのさまを呈する。火はさらに空界(ブヴァール・ローカ)に達し、天界(スヴァール・ローカ)に達する。三界は火に包まれたフライパン同然となる。…中略…ヴィシュヌ神は三界を焼きつくすと、今度は巨大な雲の固まりをいくつも吐きだす。…中略…これらの雲が雷鳴をとどろかせ、あたり一面を覆うと、雨が滝のように降りだし、さしもの劫火も消滅する。一方、雨は百年降りつづいて、世界を水びだしにする。地上はいうに及ばず、空界、天界までも水に沈み、暗黒に包まれ、そこにあるものすべてが破滅する。」(定方 1985, pp.147-148)

このような記述を背景にしているとすれば、” *rgya mtsho'i gling chen po'i me'i sgro*”は世界が水に飲みこまれる様を表したものかもしれない。

29 ここでは以下の理由によって「*'khor lo chen po'i *rdo rje'i*(D;n.e. P) *dkyil 'khor*」を「大金剛鉄圍山曼荼羅」という訳にした。

1. 普賢が釈迦から灌頂を授かった場所が「大金剛鉄圍山曼荼羅」*'rdo rje' 'khor* (D;'khor P) *yug chen po'i dkyil 'khor* (D f.10r7, P f10v5)であること。

2. 小稿で問題とする第三巻「曼荼羅建立儀軌」で画かれる曼荼羅の最外院が「大鉄圍山曼荼羅」*'khor yug chen po'i dkyil 'khor* (D f.35v7, P f.36v4)であること。

3. 該当部分の漢訳が「輪圍山」となっていること。

30 この『金剛手光明灌頂経最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』は、田中(2010, p.121)で指摘されているように、経題に「金剛手光明灌頂経」とあり、『金剛手灌頂タントラ』と何等かの関係が予想される。さらに、本論中で示したように、パラレルな箇所が確認され、全く無関係とは言えない。しかし、全体的な内容や分量は大きく異なる。

31 この箇所では、文殊が金剛杵を授けられ妙施金剛へと転換する。

32 この陀羅尼によって、大金剛鉄围山曼荼羅に投げつけられ、地に倒れ、生命が奪われそうな集会者たちが助かる。そして、曼荼羅に新たに参入を果たすのである。しかしその後、この經典の教えから逸脱した場合には、この陀羅尼によって金剛の輝きがあらゆる処に広がり燃え、教えから逸脱した者の頭が破壊されるため、ここでは pramohanī を気絶させると訳した。また、この金剛明呪と同一と考えられる陀羅尼が存在する。

「'phags pa rdo rje mi *pham(P;'phan D) pa me ltar rab tu rmongs byed ces bya ba'i gzungs(*vajrājītanālapramohanīnāmādhāraṇī) (Toh. no.752, Ota. no.408)

33元山(2005)によれば、諸天が献上する心真言は、金剛手大曼荼羅や、この曼荼羅によって修行する真言行者のために捧げられたものである。

34「娑婆世界の大金剛鉄围山曼荼羅の集会者」については伊藤(1995b)、また「曼荼羅の最外院の諸天」については大塚(1995a)・伊藤(1997b)参照。

35 e.g. 「bcon ldan 'das lag na rdo rje'i」 (D f.54r1, P f.54v4)

36 e.g. 「de bzhin gshegs pa thams cad kyi bka' bzhin byed pa lag na rdo rjes」 (D f.54v6, P f.55v1)

37金剛手が、諸天などの外教徒を調伏し入信させる記述は、『金剛頂経』の所謂「降三世品」にも同意趣の内容が確認できる。本経は「金剛界品」だけでなく「降三世品」にも影響を与えていることが予想される。

38 森(2011, p.172)参照。

39 【蔵訳】 dkyil 'khor sa gzhi cho ga la// khro bo *kī li kī la(D;ki li ki la P) yis//
ba yi rnam lnga la bzlas pa'i// bsang gtor byas na sbyangs par 'gyur//
(D f.142v2, P f.203v4)

【試訳】 曼荼羅の土地の儀軌において、枳利枳利忿怒 [の真言] によって、
牛の五種物を誦した洒水を行えば、浄化されるであろう。

40 この真言を還梵することが出来なかった。これは蔵訳の音を拾い示したものである。

41 後期密教に見られる誓戒については桜井(1996, pp.63-70)参照。

42 大塚(1993, pp.119-121)参照。

43 大塚(1996, p.135), (2013, pp.946-647)参照。

44 後期密教の「遍入」については桜井(1996, pp.70-74)

45 酒井(1973, pp.53-59)参照。

46 酒井(1973, pp.71-74)参照。長文になるが、以下に『金剛手灌頂タントラ』説かれる三密加持の該当箇所を示しておきたい。

de nas 'jam dpal gzhon nur gyur pas byang chub sems dpa' lag na rdo rje la 'di skad ces smras smras so// rigs kyi bu ji ltar khyod kyis bshad *pa'i(D;pa bzhin P) don bdag gis shes pa ltar na/ bdag 'di snyam du byang chub sems dpa' yid rnam par sbyang bar bya'o snyam byed do// de skad ces smras pa dang/ lag na rdo rjes 'jam dpal gzhon nur gyur pa la 'di skad ces smras so// 'jam dpal legs so legs so// yid rnam par dag par bya ba'i phyr tshig 'di khyod kyis legs par smras so// 'jam dpal de'i phyr nyon cig dang/ gang dang ldan na byang chub sems *dpa'i(D;dpa' P) spyad pa gsang kyi sgo spyod pa'i byang chub sems dpa' rnam gsang sngags rnam la gsang ba'i dngos grub thob par gyur pa'i yid rnam par dag pa zhes chos kyi sgo kho bos khyod la bshad par bya'o//'jam dpal de la rigs kyi bu 'am/ rigs kyi bu mo dkyil 'khor mthong ba/ byang chub tu sems bskyed pa/ yid snying rje dang ldan pa/ thabs la mkhas pa/ gsang sngags kyi sgo yi ge'i tshul bstan pa la mkhas pas 'di snyam du ngag ma *gtogs(D;rtogs P) par yid med/ yid ma *gtogs(D;rtogs P) par ngag med/ yid ma *gtogs(D;rtogs P) par

lha'i gzugs med de/ yid nyid ngag yin *la(D;n.e. P) ngag nyid yid yin zhing lha'i gzugs
nyid kyang yid yin la/ ngag nyid kyang lha'i gzugs yin no snyam du bsam par bya'o//
de ltar tha dad du bya ba med par mos na/ sngags pas yid rnam par dag pa thob
bo//yid rnam par dag pa dang ldan pa de gang gi *tshe(D;tshe na P)// rnam pa thams
cad du rtag par bdag *gi(D;gis P) lus dang lha'i gzugs bdag gi ngag dang lha'i ngag tu/
bdag gi yid dang lha'i yid du mtshungs par mthong ba de'i tshe mnyam par
*gzhag(D;bzhag P) pa yin no//

gang tshe kun du thams cad du// sngags pa mnyam par gzhag gyur na//
de'i tshe lus la soggs pa *yi(D;yid P)// mnyam nyid gnas la zhugs par 'gyur//
mnyam nyid gnas la gnas pa yi// yan lag bskyod pa ji snyed dang//
tshig tu brjod ji snyed pa// de snyed gsang sngags phyag rgya yin//

(D ff.117v3-118r3, P ff.118r4-118v4)

【試訳】

その時、文殊師利法王子は金剛手菩薩に次のように語りました。「善男子よ！このようにあなたが説いた義を、私が理解するならば、私は次のように「菩薩が意を清浄にすべきである」と思うのです。このように語ると、金剛手は文殊師利法王子に次のように語りました。「文殊よ！よいかな、よいかな。意を清浄にするために、この言葉を汝はよく語った。文殊よ！その故に聞きなさい。それを具えれば、菩薩行を真言門に行じる菩薩たちは、諸真言において秘密の悉地を獲得するであろう「意を清浄にする」という名の法門を、私は汝に説明しよう。文殊よ！この場合、善男子、或いは善女人にして、曼荼羅を見て、菩提心を発して、心に悲を具えて、方便に巧みであり、真言の門の文字の理趣を示すことに巧みなる者が、このように「語を除いて意なし、意を除いて語なし、意を除いて本尊の姿なし。すなわち、意自体は語であり、語自体は意であり、本尊の姿自体もまた意であり、語自体もまた本尊の姿である」と思うべし。このように[意と語と本尊の姿に]差別がないと確信すれば、真言行者は意を清浄にすることを獲得するのである。その意を清浄にすることを具えた者が、全てにおいて常に、自分の身を本尊の姿とに、自分の語と本尊の語とに、自分の意と本尊の意とに、同じものを見た時、その時に定に入るのである。

普く一切に於いて、真言行者が定に入る時、

その時に身をはじめとする[語や意など]の、平等性の位に入るであろう。

平等性に住する者の、何であれ支分として動かされたものと、

何であれ言葉として語られたもの、それ自体は真言と印である。」

これによれば、行者が、「意＝語＝本尊の姿」と強く確信した時にこの法門を獲得することが出来る。そして、この法門を獲得した者が、

自分の身 = 本尊の姿

自分の語 = 本尊の語

自分の意 = 本尊の意

というふうに、自分と本尊は平等であるという位に入った状態になれば、その行者の行動は全て印となり、言葉は全て真言になる。行者は、このような状態で様々な成就法を行うのである。

結論

以上本論では、『大日経』に繋がると考えられている初期密教経典の中でも、七日作壇法が説かれる経典を取り上げて、灌頂儀礼の目的と、曼荼羅と、儀礼の内容の関係を中心に、その特徴について論じてきた。以下に得られた結果を整理し、併せて今後の課題を提示して結論としたい。

第一章では、初めて詳細な七日作壇法が説かれる『陀羅尼集経』の灌頂儀礼を取り上げた。『陀羅尼集経』に見られる七日作壇法は、その基本構造が既に整っている。しかし、残念ながらどのように導入されたかは明らかでない。一連の灌頂儀礼の次第を見ると、弟子が新たに曼荼羅に入り、自らの本尊を決定するための灌頂儀礼と言える。その為に造壇される第十二巻の曼荼羅は、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部、外院に諸天を配置する三部立ての構造を基本にしつつ、諸尊を仏・般若・蓮華（菩薩）・金剛・諸天の五つに分類している。これは『陀羅尼集経』全体の構成を表すような尊格の配置といえる。瓶水灌頂に関しては、弟子が投華得仏によって結縁した本尊の印と真言で行われる。即ち、結縁の本尊の印を結び頭上につけ、その印中に投華で用いた華を置き、結縁の本尊の真言を誦しながら灌頂が行われる。

第二章の『蘇悉地経』は、成就のための灌頂儀礼である。その内容から、受者は既に別の方法により、自身の本尊が定まっていることが推測される。曼荼羅に関しては、三部立ての曼荼羅であるが、特に三部ごとに、部主・部母・部心といった尊格を中心として配置される。『蘇悉地経』の灌頂儀礼の特徴は、中尊は受者の所持する真言尊が属する部族の部主尊であり、その前に、受者が所持する真言尊が安置される場所にある。すなわち、曼荼羅の中尊の前に、成就させたい自身の本尊を安置するのである。瓶水灌頂の場面では、複数の瓶が用いられる。さらに、灌頂に用いる瓶と、その瓶を加持する尊格の対応関係が、未熟ながらも構築されていく。最初に軍荼利の瓶によって灌頂を行い、最後は自身の本尊の瓶によって灌頂が行われる。これは、成就法が成就していない修法者の障壁を取り除き、改めて自身の本尊によって灌頂を行うことで成就に導くといった役割が考えられる。

第三章の『蕤呬耶経』の灌頂儀礼は、阿闍梨位を与えるための灌頂である。七日作壇法に関しては、既に『陀羅尼集経』に見られたものとほぼ同様の構造である。しかし、受者の菩提心を発することなどの新たな要素や、阿闍梨と受者が共に曼荼羅を画くようになることなど、『陀羅尼集経』と比較した場合の変更点も確認される。曼荼羅は、『陀羅尼集経』や『蘇悉地経』と同じく、三部立ての構造をとる。また、中尊に関しても特定の尊格を指示せず、阿闍梨と受者によって異なるものと考えられる。瓶水灌頂は、曼荼羅中の全ての諸尊の真言によって行われる。受者がこの灌頂によって阿闍梨になれば、後には当然他の弟子に灌頂を授けることになる。そして、その弟子が入壇した際に、曼荼羅上に画かれた全ての諸尊の印や真言を伝授出来る立場であることが求められる。即ち、阿闍梨位の灌頂において、全ての諸尊の真言によって灌頂されるのは、この灌頂によって阿闍梨となる受者が、曼荼羅上の諸尊を全て成就するためであろう。

第四章の『金剛手灌頂タントラ』に説かれる灌頂は、上記の三つの経典とは異なり、釈迦から普賢への灌頂をモデルにした阿闍梨から弟子への灌頂儀礼が説かれる。経典中から

読み取れる灌頂の目的は、釈迦より伝えられた教説を相承することと、受者がその教説を伝えていく金剛手へと転換することである。また、灌頂儀礼と同様に、曼荼羅にも教説との関係が見られる。『陀羅尼集経』・『蘇悉地経』・『蕤呬耶経』の曼荼羅が、中尊に規定がなく、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部の諸尊を配置していたのに対し、『金剛手灌頂タントラ』では、中央に金剛手、八葉蓮華に四方四仏と過去仏、二重に八大菩薩、外院に諸天を配置する構造を取る。その配置が金剛手の神通神変であることは本論で指摘した通りである。瓶水灌頂の場面に目を向けると、宝幢・開敷華・無量光・阿閼の四仏、及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地藏の四菩薩によって加持された瓶水で灌頂が行われる。『陀羅尼集経』や『蘇悉地経』『蕤呬耶経』の灌頂とは異なり、受者が誰であれ、瓶水を加持する諸尊は定まっているのである。その後は、金剛杵と法輪が授与され、金剛法の演説と、教説を害する者を調伏していくことが使命となるのである。また、新たに曼荼羅に参入する場合や、教説を相承するために、信があることが条件となる。そして、その信の獲得のために金剛明妃を授かることが必要となる。曼荼羅に参入した後に、金剛法の教えから逸脱した場合には、金剛明妃によって焼かれ、頭が破壊されるという『金剛頂経』以降に見られる「警戒」と同じ役割も見られる。

以上のように、七日作壇法が登場してから、中期密教に至るまでの間の瓶水灌頂には、それぞれの經典に求められた役割があり、その役割を果たすための曼荼羅の構造と、瓶水灌頂の方法が異なっていると言えるであろう。瓶と尊格の対応関係は、目的に合わせて選定され、その尊格の曼荼羅上における配置も重要な要素であると理解される。

また、『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』『蕤呬耶経』の灌頂は、その役割は異なるも、一連の流れとしてみることも出来るであろう。一人の弟子が『陀羅尼集経』の灌頂によって自身の本尊と結縁し、その後成就法を行っていく過程で『蘇悉地経』の灌頂を受け、最後に、阿闍梨となる資格が認められれば、『蕤呬耶経』に説かれる灌頂によって阿闍梨となるのである。

それに対して、『金剛手灌頂タントラ』の場合は、以前に他の灌頂によって自身の本尊が決定していようと、金剛法の教説を相承し、大金剛曼荼羅に参入する場合には、新たな手続きが求められる。また、二通りの曼荼羅に入る方法と、投華得仏の後に弟子が阿闍梨への布施を行い、その後改めて灌頂壇を建立して灌頂を行うという次第の構成を考えると、本来は二段階であった儀礼を、一つの次第にまとめあげたと考えることも可能であろう。『金剛手灌頂タントラ』において、一つの經典のなかで曼荼羅の参入から阿闍梨位までの流れが完結し、この經典を相承する為の新たな要素が付加されたと考えられる。さらに、『金剛手灌頂タントラ』より、受者を特定の尊格へと位置付ける動きが見られた。このように、第一章から第四章までの流れを踏まえて、灌頂儀礼の変遷過程を示すならば、『金剛手灌頂タントラ』において、灌頂儀礼の役割が受者自身を金剛手へと転換させることとなり、それに伴って曼荼羅の構造や、瓶水灌頂の方法、さらに曼荼羅参入に関する新たな要素が付加されたといえよう。

これに関連して、以下のような推論を行いたい。松長(1980, pp136-138)では、初期密教と中期密教の区分に関して、以下の五点を挙げている。1.中期密教では修法の目的が主に成仏となる。2.中期密教に至り三密行が成立する。3.大乘思想の儀軌化が行われる。4.組織的な曼荼羅が成立する。5.教主が釈迦から毘盧舎那になる。このことを踏まえて、改

めて『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼を振り返ると、灌頂によって受者は金剛手と位置付けられる。また、本論では詳細な部分まで立ち入ることができなかったが、灌頂を授かった者が修法を行うときには、三密瑜伽によって行者自身が金剛手そのものと確信した状態で行う。そして、大塚(2013)において指摘されている通り、本経は『華嚴経』「入法界品」の影響を多分に受け儀軌化したものと言える。曼荼羅に関しても、『陀羅尼集経』・『蘇悉地経』・『蕤呬耶経』までの三部に基づく諸尊の配置ではなく、中尊である金剛手の神通神変を表している。さらに、経典中では教主である毘盧舍那が登場する。このような背景を考慮すると、本経において中期密教が成立したと考えることも可能であろう。

当然上記のようなことは、『金剛手灌頂タントラ』に見られる三密瑜伽の成立過程をより詳細に論じていく必要があるであろう。また同時に、本経から『大日経』・『金剛頂経』に展開する過程についてさらなる考察が必要とされる。以上のことを今後の研究課題として示し、結論とする。

参考文献

<略号>

D	デルゲ版チベット大蔵経
P	北京版チベット大蔵経
Toh	東北帝国大学法文学部編 西藏大蔵経総目録
Ota	大谷大学監修 影印北京版西藏大蔵経 総目録
『大正蔵』	『大正新修大蔵経』

<一次文献>

・『陀羅尼集経』（『大正蔵』 No.901, vol.18）

・『蘇悉地経』

『蘇悉地羯羅経』（『大正蔵』 No.893, vol.18）

Legs par grub par byed pa'i rgyud chen po las sgrub pa'i thabs rim par bhye ba.

(**Susiddhikaramahātantrasādhanopāyikāpaṭala*) D:Toh.807, P:Ota.421.

・『蕤呬耶経』

『蕤呬耶経』（『大正蔵』 No.897, vol.18）

dKyil 'khor thams cad kyi spy'i cho ga gsang ba'i rgyud.

(**Sarvamaṇḍalasāmānyavidhīnām guhyatantra.*) D:Toh.806, P:Ota. 429

・『金剛手灌頂タントラ』

'Phags pa lag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud chen po.

(**Vajrapāṇyabhiṣekamahātantra.*) D: Toh.496, P: Ota.130.

・『大日経』

『大毘盧遮那成仏神変加持経』（『大正蔵』 No.853, vol.18）

*rNam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par byang chub pa rnam par sprul
ba byin gyis rlob pa shin tu rgyas pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po zhes bya ba'i chos
kyi rnam grangs. (*Mahāvairocanābhisambodhi- vikrviṭādhiṣṭhāna- vaipulya- sūtrendra
-rājo nāma dharma-paryāya.)* D: Toh.494, P: Ota.126.

・『金剛手光明灌頂経最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』（『大正蔵』 No.1199, vol.21）

・『征服されることのない火によって気絶させる金剛という名の陀羅尼』

'Phags pa rdo rje mi pham pa me ltar rab tu rmongs byed ces bya ba'i gzungs.

(**Vajrājītanālapramohanīnāmadhāraṇī*) D:Toh.752, P:Ota.408.

・『金剛頂經』

堀内本：堀内寛仁. 1983. 『梵藏漢対照 初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇（上）—金剛界品・降三世品』（密教文化研究所）

『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大經王經』（『大正藏』 No.865, vol.18）

・『大日經疏』

『大毘盧遮那成仏經疏』（『大正藏』 No.1796, vol.39）

<二次文献>

伊藤堯貫

(1994) 「『金剛手灌頂タントラ』の一考察」『智山学報』 43, pp.(1)-(15)

(1995a) 「『金剛手灌頂タントラ』 試訳 (1)」(『大正大学大学院研究論集』 19)

(1995b) 「『金剛手灌頂タントラ』 試訳 (2)」『智山学報』 44, pp.(27)-(51)

(1997a) 「『金剛手灌頂タントラ』における金剛手灌頂について」『印度学仏教学研究』 45(2), pp.868-866(pp.(175)-(177))

(1997b) 「『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅について」『密教学研究』 29, pp.(53)-(71)

(1998) 「『金剛手灌頂タントラ』における「真言門において菩薩行を修する菩薩」『現代密教』 10, pp.112-120

(2000) 「『蘇悉地經』とインド社会」『現代密教』 13, pp.267-283

(2003) 「『蘇悉地經』と『蘇悉地羯羅供養法』『蘇悉地羯羅成就法集』」『密教学研究』 35, pp.(1)-(16)

(2009) 「曼荼羅の作画者—絵師から阿闍梨へ—」『密教学研究』 41, pp.(41)-(57)

(2013) 「『金剛手灌頂タントラ』」高橋尚夫・木村秀明他編『初期密教思想・信仰・文化』春秋社, pp.107-117

磯部武男

(2012) 「金剛杵の起源と中期密教における意義について」『密教文化』 228, pp.164-140 (pp.(7)-(31))

大塚伸夫

(1993) 「『大日經』の曼荼羅行」『密教学研究』 25, pp.85-123

(1995a) 「『金剛手灌頂タントラ』における曼荼羅行について」『豊山教学大会紀要』 23, pp.312-272(pp.(13)-(53))

(1995b) 「『金剛手灌頂タントラ』の灌頂について」『印度学仏教学研究』 44(1), pp.352-350 (pp.(143)-(145))

(1996) 「『蕤呬耶經』の曼荼羅行について」『密教学研究』 28, pp.89-139

(1998a) 「『蘇婆呼童子請問經』における灌頂について」『仏教教理思想の研究 佐藤隆賢博士古稀記念論文集』山喜房仏書林, pp(189)-(200)

- (1998b) 「『蘇婆呼童子經』の曼荼羅と密教儀礼について」『豊山教学大会紀要』26, pp.79-99
(2000) 「『華嚴經』入法界品と『金剛手灌頂タントラ』」『密教文化研究所紀要別冊2』「密教の形成と流伝」, pp.23-52
(2013) 『インド初期密教成立過程の研究』春秋社

大村西崖

- (1918) 『密教発達志』仏書刊行会図像部(1972年覆刻)

大山仁快

- (1961) 「『雜部密教事相の一考察-事物的な呪法を中心として-』」『密教文化』52, pp.28-38
(1982) 「蘇悉地經に関する一考察」『密教文化』140, pp.37-43

小倉一宏

- (1992) 「大悲胎藏生曼荼羅の研究」『密教文化』180, pp.36-61

越智淳仁

- (2008) 「『大日經』の先驅思想-般若經の師資相承句と不来不去を中心に-」『種智院大学密教資料研究所紀要』10, pp(14)-(28)

金本拓士・伊藤堯貫

- (1998a) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(1)」『智山学報』46, pp.(33)-(70)
(1998b) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(2)」『佐藤隆賢博士古希記念論文集 仏教教理思想の研究』山喜房仏書林, pp.(149)-(187)
(2000) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(3)」『智山学報』49, pp.(17)-(44)
(2003) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(4)」『智山学報』52, pp.(17)-(52)
(2007) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(5)」『智山学報』56, pp.(275)-(344)
(2007) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(6)」『真言密教と日本文化 加藤清一博士古希記念論文集 下』ノンブル, pp.272-245(pp.(183)-(210))
(2010) 「『蕤呬耶經』藏・漢訳テキスト研究(7)」『密教学研究』42, pp.(17)-(45)
※ただし(2000), (2007)は伊藤の単独, (2003), (2010)は金本の単独の発表である。

龜山隆雄

- (1991) 「『大日經疏』と『瞿醯經』」『現代密教』3, pp.117-140

木内堯央

- (1984) 『天台密教の形成-日本天台思想史研究-』溪水社

清田寂雲

- (1977) 「十一面神呪心經について」『天台学報』20, pp.44-50
(1983) 「円珍の『菩提場經略義釈』について」『密教文化』142, pp.14-23

駒井信勝

- (2011) 「『陀羅尼集經』における灌頂儀礼をめぐって」『智山学報』 60, pp.(115)-(137)
- (2012a) 「『陀羅尼集經』の普集会曼荼羅について」『智山学報』 61, pp.(57)-(79)
- (2012b) 「『陀羅尼集經』第十二巻にみられる供養法をめぐって～第三・八巻の軍荼利結界法・供養法にかかわって～」『仏教文化学会紀要』 21, pp.(18)-37
- (2013) 「『蘇悉地經』にみられる灌頂儀礼をめぐって」『智山学報』 62, pp.(13)-(23)
- (2014) 「初期密教灌頂儀礼にみられる瓶の加持について」『密教学研究』 46, pp.(83)-(101)
- (2015a) 「『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の中尊について」『智山学報』 64, pp(1)-(12)
- (2015b) 「『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の意義について」『現代密教』 26, pp.(61)-(80)

小峰彌彦

- (1993) 「胎藏曼荼羅の構造」『インド学密教学研究上-宮坂宥勝博士古稀祈念論文集-』法蔵館, pp.671-682
- (2007) 「胎藏曼荼羅解釈上の一視点」『川崎大師教学研究所研究紀要』 10, pp.161-190

酒井眞典(紫朗)

- (1962) 『大日経の成立に関する研究』高野山出版社
- (1973) 『修訂 大日経の成立に関する研究』国書刊行会
- ※(1973)は(1962)を修訂したものである。本論文では、(1973)を用いた。
- (1983) 「大日経研究」(『酒井眞典著作集第一巻大日経研究』法蔵館)

桜井宗信

- (1996) 『インド密教灌頂儀礼研究-後期インド密教の灌頂次第-』法蔵館

佐々木大樹

- (2003) 「『陀羅尼集經』の研究-特に第四「十一面観音經」と、第十「功德天法」の異訳対照を中心として-」『智山学報』 52, pp.139-168
- (2004) 「『陀羅尼集經』所収の仏頂系経軌の考察」『智山学報』 53, pp.193-222
- (2005) 「『陀羅尼集經』に関する諸文献の考察」『大正大学大学院研究論集』 29, pp.73-85

定方晟

- (1985) 『インド宇宙誌』春秋社

佐和隆研

- (1975) 「陀羅尼集經覚書」『仏教藝述』 100, pp.53-58

清水明澄

- (2007) 「『大日経』の注釈書の書誌学的研究」『密教文化』 219, pp.25-39

高田順仁

- (1996) 「『蘇悉地羯羅經』「請問品」の考察」『密教学』32, pp.(109)-(128)
(1998) 「『蘇悉地經』「真言相品第二」の考察-台密蘇悉地羯羅經觀と三部諸尊の分類-」『密教学』34, pp.(89)-(106)
(2000) 「明呪の律(vidya-vinaya)-『蘇悉地羯羅經』「持戒品第七」和訳-」『密教学』36, pp.(47)-(64)

高田仁覚

- (1970) 「曼荼羅(maṇḍala)の通則について-とくに蕤呬耶經(guhya-tantra)を中心として-」『高野山大学論集』5, pp.1-9
(1977) 「勝菩提造『蘇悉地羯羅成就法集』の研究-所作タントラの四支念誦次第-」『高野山大学』12, pp.23-47
(1978) 『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会

田中公明

- (1987) 『曼荼羅イコロジー』平河出版社
(2010) 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社

種村隆元

- (2013) 「密教とシヴァ經」『シリーズ大乘仏教 10 大乘仏教のアジア』春秋社, pp.73-102

千葉照観

- (1988) 「仏頂尊と仏眼に関する問題-その成立を中心として-」『印度学仏教学研究』37(2), pp.114-117

中野義照

- (1969) 「現図胎藏マンドラ最外院の構想」『密教文化』88, pp.3-21

八田幸雄

- (1986) 「胎藏曼荼羅中台八葉部の構成」『印度学仏教学研究』35(1), pp.95-99

東伏見慈晃

- (2000) 「蘇悉地經と関連經典における成就法の一考察-特に円仁を中心にして-」『天台学報』42, pp.137-141

船山徹

- (2013) 『仏典はどう漢訳されたのか-スートラが經典になるとき』岩波書店

松長有慶

- (1969) 「両部マンドラの系譜-五仏を中心として-」『密教文化』87, pp.27-36

- (1972)「インド密教の流布と展開—遺品・遺跡を中心として—」『密教文化』100, pp.120-109
(1978)『The Guhyasamāja tantra』東方出版
(1980)『密教経典成立史論』法蔵館
(1998)『松長優慶著作集 第五巻 秘密集会タントラの研究』法蔵館

三崎良周

- (1965)「唐末の密教と蘇悉地」『印度学仏教学研究』14(2), pp.698-701
(1988)『台密の研究』創文社

宮坂宥峻

- (2014)「三世輪マンダラの構造と特色」『佛教文化学会紀要』23, pp.(217)-(234)

元山公寿

- (2005)「中期密教における真言について—『金剛手灌頂タントラ』を中心として—」『日本仏教学年報』70, pp.(153)-(167)

森雅秀

- (1992)「インド密教における結界法—Vajrāvali-nāma-maṇḍalopāyikā 和訳 (2) —」『名古屋大学文学部研究論集』114, pp.(89)-(109)
(1994)「インド密教におけるバリ儀礼」『高野山大学密教文化研究所紀要』8, pp.204-174
(1997)『マンダラの密教儀礼』春秋社
(2011)『インド密教の儀礼世界』世界思想社
(2014)『アジアの灌頂儀礼—その成立と伝播—』法蔵館

山野智恵

- (1997a)「初会金剛頂経における金剛手—金剛手の出現—」『智山学報』46, pp.378-360
(pp.(65)-(83))
(1997b)「初会金剛頂経における金剛手」『大正大学大学院研究論集』21, pp.216-204
(1998)「金剛手の変遷」『智山学報』47, pp.221-240
(1999)「理趣経における金剛手」『智山学報』48, pp.(47)-(66)
(2000)「初期密教経典における金剛手」『密教学研究』32, pp.55-71

頼富本宏

- (1988)「仏教パンテオンの構成」『宗教研究』62(1), pp.111-134
(1990)『密教仏の研究』法蔵館

ロルフ・ギーブル

- (2000)『『蘇悉地羯囉経』原典研究初探—漢字音訳献願偈等の推定還梵を中心に—』『東方学』99, pp.105-91